



# 田野口・宮ノ下遺跡

— 中町東線・西線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

付章 安坂・城ノ堀遺跡 V

2009年3月

兵庫県多可郡多可町教育委員会

# 田野口・宮ノ下遺跡

—中町東線・西線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

付章 安坂・城ノ堀遺跡 V

2009年3月  
兵庫県多可郡多可町教育委員会

# 序 文

平成2年度から行われた中町東線建設工事、平成19年度からはじまりました中町西線建設工事に伴う発掘調査によって、思い出遺跡、牧野・大日遺跡、牧野・町西遺跡、田野口、笹町遺跡、今回の田野口・宮ノ下遺跡と、多可町中区北部平野北辺に隣接して広がる遺跡群が発見されました。これらの遺跡からは縄文時代草創期にはじまる多可町の祖先の足跡が連綿と続いて営まれてきたことが明らかになりました。これらの遺跡は、残念ながら道路建設工事により一部消滅することになるわけですが、新しく敷設される道は、多可町の新たな歴史を切り開いていく道になっていくでしょう。今回の報告を始め、各遺跡の調査成果が多可町の新たな歴史創生のいしづえとなり、豊かな文化をつくりだしていく道しるべとなることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査作業及び整理作業にあたり、多くの方々にご協力・ご指導いただきましたことを厚くお礼申し上げます。

2009年3月

多可町教育委員会

教育長 小林 紀之

# 例 言

- 1 本書は兵庫県多可郡多可町中区田野口字宮ノ下に位置する田野口・宮ノ下遺跡の発掘調査報告書である。また、付章として安坂・城の堀遺跡の発掘調査成果を掲載している。
- 2 調査は多可町教育委員会が主体となり、田野口宮ノ下遺跡は課長補佐 安平勝利、安坂・城の堀遺跡は副課長 宮原文隆が担当した。
- 3 遺跡の空中写真・空中写真測量は、田野口・宮ノ下遺跡は(株)ジオテクノ関西、安坂・城の堀遺跡は(株)ワールドに委託して行った。
- 4 田野口・宮ノ下遺跡の遺構等の実測は松田優子、藤田侑子、安平が行い、遺構及び遺物写真と遺物実測は安平が行った。安坂・城の堀遺跡の遺構等の実測は藤浦薫、藤原敏、笹倉崇司、宮原、遺構及び遺物写真は宮原、遺物実測は小林千代美、早崎喜代美、宮原、トレースは早崎、吉田衣里が行った。
- 5 本書で示す標高地は、田野口・宮ノ下遺跡については、多可町建設課及び(株)ジオテクノ関西が設定のB.Mを使用した値である。安坂・城の堀遺跡については、多可町建設課（旧中町建設課）及び(株)ワールドが設定のB.Mを使用した値である。方位は座標北で示している。
- 6 本書記載の土器実測図断面は、弥生土器・土師器・土師質土器－黒、須恵器・陶器－白抜き、施釉陶器・磁器－網目とした。また、土器実測図において、中心軸に沿って内外面の成形・調整表現が上一直線にわたって欠する土器は、遺存率及び歪み等のため復元径に問題があることを示している。
- 7 遺構の表記に際しては、次のように略したものがある。  
 竪穴住居跡・掘立柱建物－SB 溝－SD 土坑－SK 柱穴・柱穴状遺構－P  
 また、遺物実測番号は、木製品－W、石製品－Sを付けた。
- 6 遺物には通し番号を付し、図面、写真、表の番号は一致する。遺物写真については、土器個別別写真は原則として縮尺を1/3としている。木製品集合写真は任意の縮尺をとっている。
- 7 田野口・宮ノ下遺跡の遺物実測図は、基本的に3次元デジタイザーを使用して行い、すべてデジタルデータとして保管している。
- 9 本書の執筆・編集は、『田野口・宮ノ下遺跡』を安平が、『安坂・城の堀遺跡』を宮原が行った。
- 10 本書にかかる資料は、兵庫県多可郡多可町中区東山539-3 那珂ふれあい館で保管している。

# 本文目次

序文

例言

## I はじめに

1. 地理的環境…………… 1
2. 歴史的環境…………… 2
3. 調査に至る経緯、調査体制…………… 3

## II 発掘調査の概要

1. 掘立柱建物…………… 6
2. 溝…………… 10
3. 土坑…………… 16
4. その他の遺構…………… 21

## III まとめ…………… 24

## IV 付章 安坂城の堀遺跡Vの発掘調査概要

1. はじめに…………… 28
  - 1) 調査方法及び調査体制…………… 28
  - 2) 立地…………… 29
2. 安坂・城の堀遺跡第3区B・C調査区の概要…………… 35
  - 1) 溝…………… 35
  - 2) その他の遺構と遺物…………… 42
  - 3) 安坂・城の堀遺跡第3区小結…………… 43
3. 安坂・城の堀遺跡第5区調査区の概要…………… 44
  - 1) 竪穴住居跡1…………… 44
  - 2) 掘立柱建物…………… 47
  - 3) 土坑…………… 50
  - 4) 溝…………… 51
  - 5) その他の出土遺物…………… 51
  - 6) 安坂・城の堀遺跡第5区B・C調査区小結…………… 52
4. おわりに…………… 55

# 表 目 次

田野口・宮ノ下遺跡 土器観察表  
安坂・城の堀遺跡 土器観察表  
報告書抄録

# 挿 図 目 次

田野口・宮ノ下遺跡

- |                                    |                      |
|------------------------------------|----------------------|
| 第1図 多可町位置図                         | 第2図 周辺の遺跡分布と旧地形      |
| 第3図 位置図-1                          | 第4図 位置図-2            |
| 第5図 遺構配置図                          | 第6図 掘立柱建物01          |
| 第7図 掘立柱建物01 出土遺物                   | 第8図 掘立柱建物02と出土遺物     |
| 第9図 掘立柱建物03と出土遺物                   | 第10図 掘立柱建物04         |
| 第11図 P29・30・32・33（掘立柱建物04）と出土遺物    |                      |
| 第12図 掘立柱建物05・06                    |                      |
| 第13図 P14・17・18・27（掘立柱建物05・06）と出土遺物 |                      |
| 第14図 溝01                           | 第15図 溝01 出土遺物①       |
| 第16図 溝01 出土遺物②                     | 第17図 溝02・03・04       |
| 第18図 溝02・03・04 出土遺物                | 第19図 土坑01            |
| 第20図 土坑01 出土遺物                     | 第21図 土坑02・溝05        |
| 第22図 土坑02 遺物出土状況                   | 第23図 土坑03            |
| 第24図 土坑02・溝05出土遺物                  | 第25図 P10・16・61・89・96 |
| 第26図 P10・16・61・89・96出土遺物           |                      |
| 第27図 その他の出土遺物                      |                      |

安坂・城の堀遺跡

- |                     |                  |
|---------------------|------------------|
| 第28図 位置図            | 第29図 調査区位置図      |
| 第30図 遺構配置図          | 第31図 溝1          |
| 第32図 溝1 断面図         | 第33図 溝1 土器出土状況   |
| 第34図 溝1 出土遺物①       | 第35図 溝1 出土遺物②    |
| 第36図 溝1 出土遺物③       | 第37図 溝3 出土石器     |
| 第38図 溝2・3           | 第39図 溝2 断面図      |
| 第40図 溝2 出土遺物        | 第41図 溝2及び第3区出土遺物 |
| 第42図 竪穴住居跡1         | 第43図 中央土坑1・2     |
| 第44図 竪穴住居跡1 出土遺物    | 第45図 掘立柱建物2      |
| 第46図 掘立柱建物3・4       | 第47図 掘立柱建物5      |
| 第48図 掘立柱建物跡3・5 出土遺物 | 第49図 P7・9・12     |

第50図 P7・9・12出土遺物

第52図 土坑2・3 出土遺物

第54図 第5区B・C 出土遺物①

第56図 第5区B・C 出土遺物③

第51図 土坑1・2・3

第53図 溝 出土遺物

第55図 第5区B・C 出土遺物②

第57図 古代の特殊遺物

## 図 版 目 次

田野口・宮ノ下遺跡

図版1 多可町中区北部平野航空写真(南から) (西から)

図版2 調査区空中写真

図版3 調査前全景 調査区全景(東から)

図版4 掘立柱建物01・02・03 P43 P81

図版5 掘立柱建物04 P29 P30 P32 P33

図版6 掘立柱建物05・06 P17 P18 P27 P14

図版7 溝01(東から) 溝01土層 遺物出土状況① 遺物出土状況② 遺物出土状況③

図版8 溝02・03・04 溝02土層 溝03土層 溝04土層

図版9 土坑01検出状況 土坑01集石検出状況 土坑01完掘

図版10 土坑01土層① 土坑01土層② 土坑01土層③ 土坑01カラミ出土状況

図版11 土坑02検出状況 土坑02完掘 土坑02土蔵 遺物出土状況

図版12 土坑03完掘 土坑03土層 P10 P16 P61 P89 P96

図版13~19 出土遺物

安坂・城の堀遺跡

図版20 空中写真

図版21 第3区全景 (西から) (東から)

図版22 第3区溝1 遺物出土状況(1)

図版23 第3区溝1 遺物出土状況(2)

図版24 第3区溝1 遺物出土状況(3)

図版25 第3区溝1 遺物出土状況(4) 溝1断面

図版26 第3区溝1・2 溝1(南東から) 溝2(北西から)

図版27 第3区溝2 遺物出土状況 溝2断面

図版28 第5区全景 第5区B(東から) 第5区C(東から)

図版29 第5区竪穴住居跡1 (北から) (南から)

図版30 第5区竪穴住居跡1ほか 竪穴住居跡1 中央土坑2断面  
竪穴住居跡1 中央土坑1 P14 P23

図版31 第5区掘立柱建物3・4 (東から) (南から)

図版32 柱穴内土器等出土状況 P7 P12 P6 P18 P71 P75

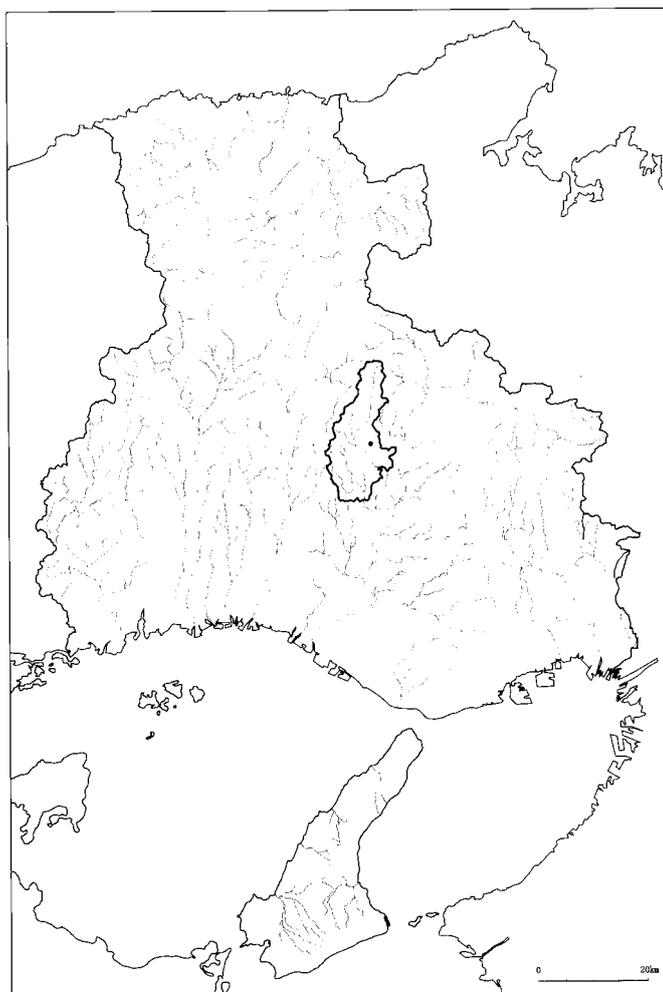
図版33~37 出土遺物

# I はじめに

## 1 地理的環境

多可町は、平成17年11月1日に旧中町、加美町、八千代町が合併して誕生した新町である。

当町から南方の神戸市沿岸部までは約45km、北方の豊岡市沿岸部までは約70kmの直線距離にあり、兵庫県のほぼ中央部、播磨最北端に位置する。行政境は、北は丹波市、朝来市、東は丹波市、南は西脇市、加西市、西は神崎郡神河町、市川町にそれぞれ接しており、東西約13km、南北約30km、総面積185.15km<sup>2</sup>の町域を有する。町域の約79.8%を山林地帯が占めており、特に町北部には標高692.6mの妙見山、939.4mの笠形山、1005.2mの千ヶ峰など600～1000m級の山々がそびえる山間地帯である。町内は三国岳を源とする杉原川が加美区、中区の中央部を貫流し、笠形山を源とする野間川が八千代区の中央部を南流して谷底平野を形成している。



第1図 多可町位置図

気候は、瀬戸内気候の影響下にあるが、内陸性気候の影響も受け、寒暖の差が比較的大きい。

主な産業は、古くから農林業、繊維産業を中心として発達してきたが、近年の経済、社会状況の変化、人口構成年齢の高齢化、過疎化など、農山村地域を取巻く状況が厳しい中であって、新たな産業の導入・振興が模索されている。

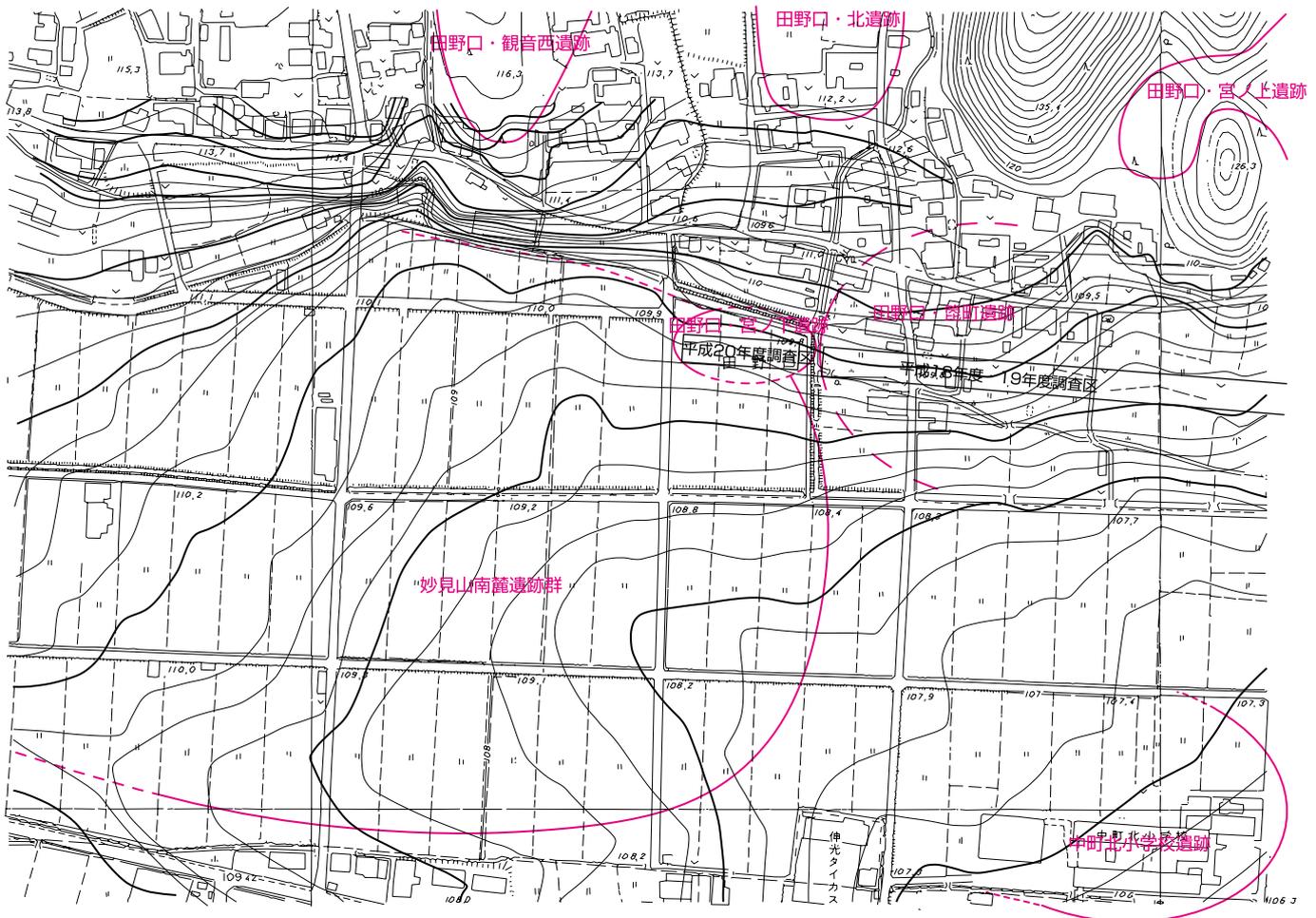
田野口・宮ノ下遺跡は、中区にあり、中央を流れる杉原川によって、大きく北部平野、中央平野、安田平野に分けられるうちの北部平野北側に位置し、北方にそびえる妙見山の山裾、標高108.00m付近に広がる。

## 2 歴史的環境

町内には旧石器時代から近世期にかけての遺跡が、約 600 ヶ所近く確認されている。当該地周辺は多可町中区北部平野に位置するが、北部平野の遺跡の分布については多可町文化財報告 6『田野口・鏡町遺跡Ⅲ』<sup>1)</sup>で概要を記しているので参照いただきたい。

ここでは、田野口・宮ノ下遺跡周辺の旧地形と遺跡の分布をみてみたい。

当該地周辺は、妙見山南麓に広がる平野部を形成し、南には加古川の支流杉原側が流れる。すでに圃場整備が行われており、現状では、高低差のない比較的平坦な田園風景が広がっている。図2は圃場整備前の地図から旧地形を復元したものである。それをみると、中央部に妙見山から南東方向にのびる谷がみられ、現在の東山、田野口集落はその谷が形成した扇状地上に、南の水田が広がる地域は扇状地末端から南に広がっていることがわかる。周辺の遺跡の分布をみると、ほぼ、現在の集落と重なる位置にあり、妙見山南麓に緩やかにのびる麓屑面上や扇状地にある。各遺跡の性格は、発掘調査が行われた遺跡が少なく詳細は不明であるが、扇状地末端部分から少



第2図 周辺の遺跡分布と旧地形

し上がった南方を見渡せる場所に位置する田野口・北遺跡では奈良時代から平安時代前期の建物跡や漆を貯蔵した短頸壺が出土しており、工房関係施設の存在の可能性が考えられている<sup>2)</sup>。また、隣接する田野口・観音西遺跡では大量の奈良時代の遺物が散布しているほか、田野口・宮ノ上遺跡でも奈良時代の遺物が採取されており、中区北部平野の特徴とされる官衙的要素の強い遺跡（思い出遺跡、多哥寺遺跡、牧野・大日遺跡など）の存在との関連も考えられ注目される。<sup>3)</sup>

また、田野口・篋町遺跡、今回報告する田野口・宮ノ下遺跡が位置する扇状地末端部では、弥生時代終末期～古墳時代初めの遺構、遺物が検出されており、当期の遺跡の立地の特徴を示しているものと思われる。

注 1) 多可町文化財報告6『田野口・篋町遺跡Ⅲ』多可町教育委員会 2008年3月

2) 中町文化財報告31『東山野際1・2号墳』中町教育委員会 2004年3月

3) 中町文化財報告30『中町の遺跡Ⅱ』中町教育委員会 2004年3月

### 3. 調査にいたる経緯、調査体制

平成19年度中町東線・西線道路改良工事計画に伴い、工区内への遺跡の広がりを確認するために試掘・確認調査を行った結果、遺跡の存在が確認された約1000㎡について全面調査を行った。

【調査面積】 約1,000㎡

【本発掘調査期間】 平成19年12月19日～平成20年3月4日

【整理・報告作業】 平成20年度

#### 【調査体制】

〈調査主体〉 多可町教育委員会

〈発掘整理作業〉 発掘・整理担当 安平勝利 宮原文隆

調査補助員 早崎喜代美 松田優子 藤田侑子

〈発掘・整理作業従事者〉

杉浦克也 越川芳明 杉本正蔵 坪内梅吉 中川虎男 中道和三男 中山林次 橋本己義

藤井豊次 吉田衣里 吉田数男 吉田眞一

〈調査・整理作業協力者、協力機関〉(敬称略)

兵庫県教育委員会文化財室 多可町役場建設課 田野口地区

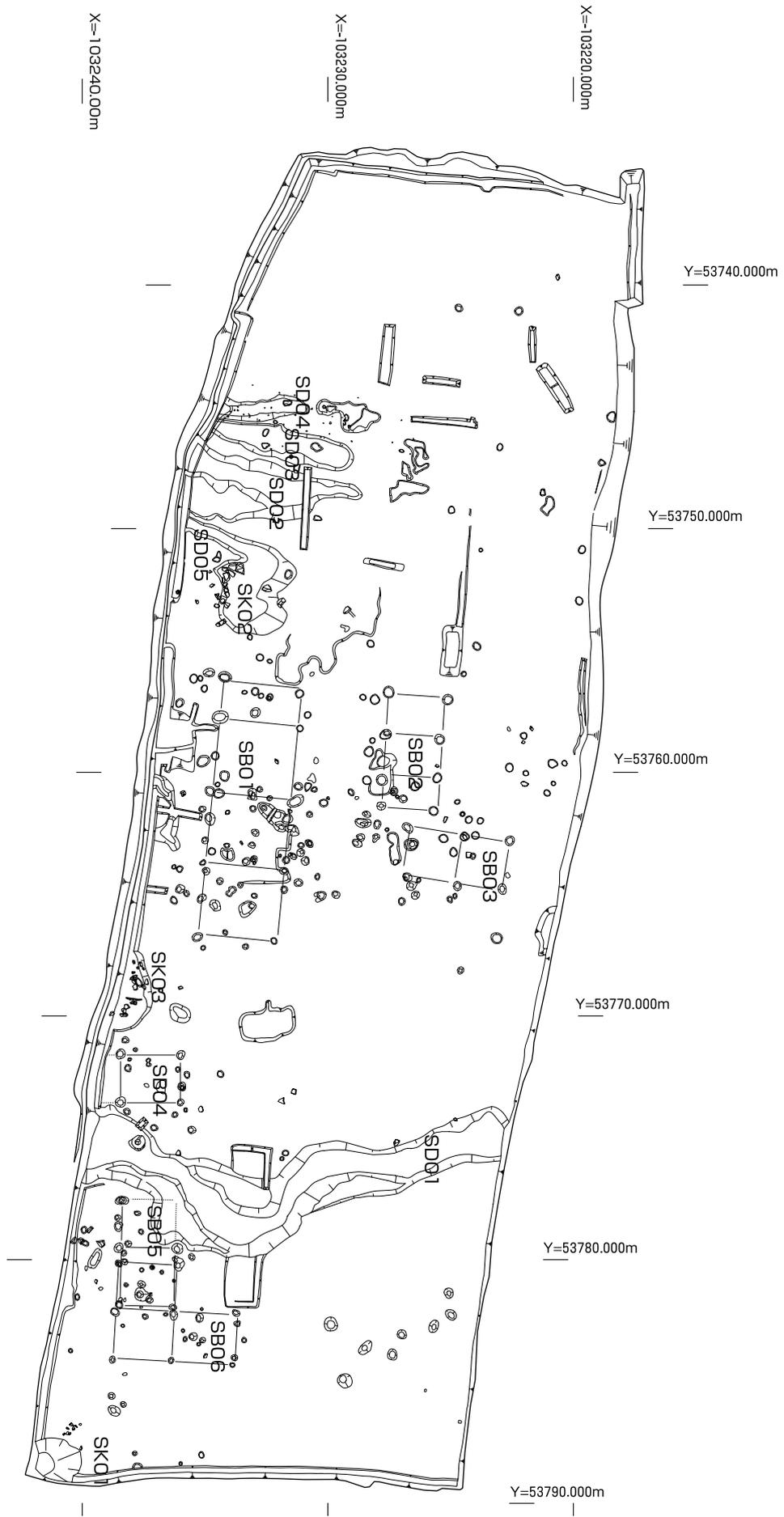
西脇市・多可郡広域シルバー人材センター多可町支部 大志(株)



第3図 位置図-1



第4図 位置図-2



第5図 遺構配置図

## Ⅱ 発掘調査の概要

当該地周辺は、すでに圃場整備時にかなり削平が行われており、圃場整備時の整地層直下、現圃場である地表面から約 35～40 cm 下層で遺構面が検出された。遺構面は、扇状地形の先端部にあることから、にぶい黄橙～明黄褐色の砂質系土層と砂礫層によって構成されている。

圃場整備時の削平は、調査区北側で顕著であることから、検出された遺構は、調査区南半部に集中しており、北側は途切れて消滅している遺構も見られる。

検出された遺構には、掘立柱建物跡 4 棟、溝状遺構 4 本、土坑 3 基、ピット状遺構がある。以下主な遺構について述べる

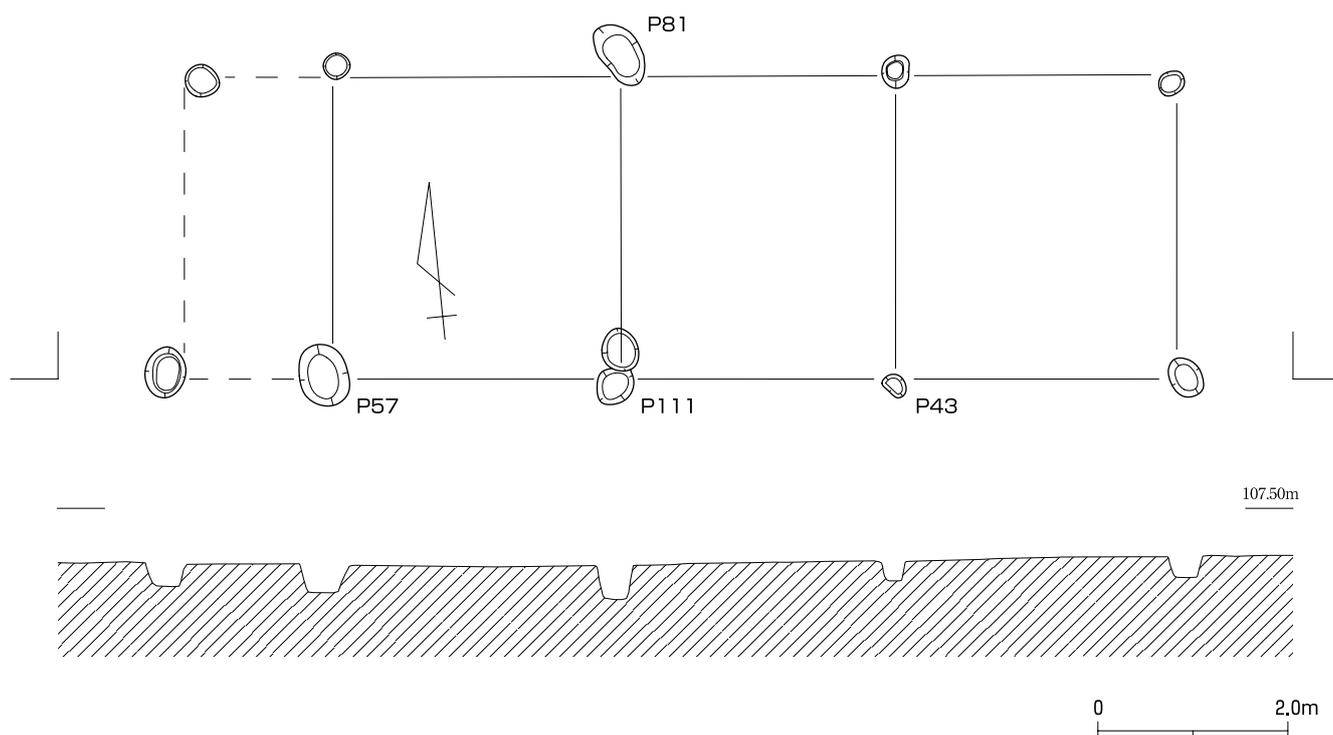
### 1. 掘立柱建物

#### ・掘立柱建物01 (SB01)

調査区中央南よりのピット状遺構が集中する部分に位置する掘立柱建物。東西に主軸を持ち、建物の規模は 1 × 3 間 (約 3.2 × 9.0 m) で、西側に半間 (約 1.6 m) の張り出しをもつ可能性がある。柱間は約 3 m をはかり、通常の約 2 倍の規模を持つ大型建物である。

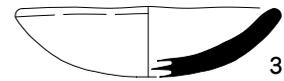
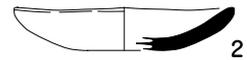
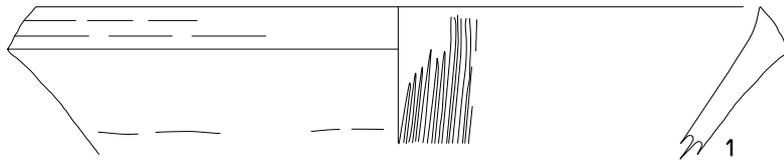
柱穴内からは 14 世紀～15 世紀代の遺物が出土している。

(1) は備前焼播鉢で、尖り気味に拡張した口縁部をもち、10 条のクシ描卸目が施される。備前焼編年中世 3 b 期<sup>1)</sup> に相当し、15 世紀前半に比定される。(2)・(3) はいずれも手捏ね成形の

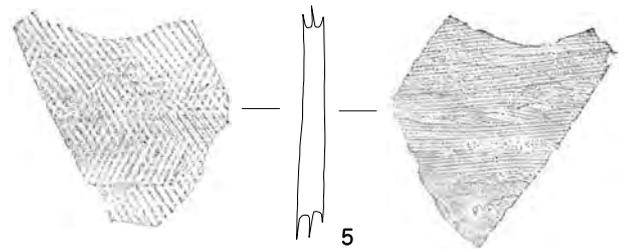
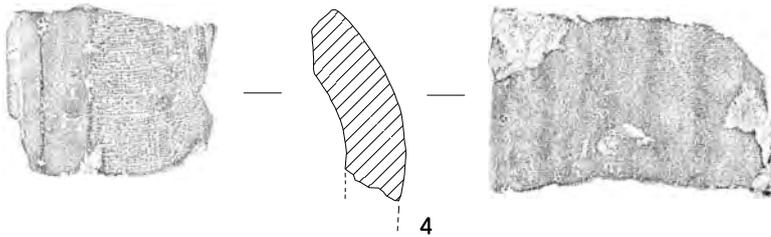


第6図 掘立柱建物01

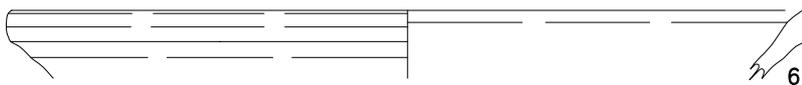
P81



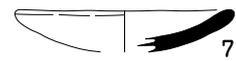
P43



P57



P111

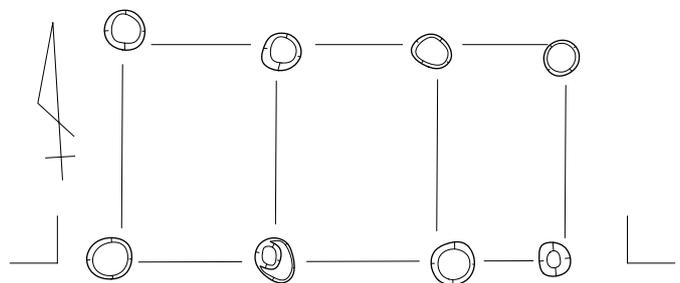


第7図 掘立柱建物01 出土遺物

小皿。(4) は丸瓦片で、凹面側縁はしっかりと面取りされ、細かい布目痕が残る。概ね 14 世紀～15 世紀代のものであろう。

・掘立柱建物02 (SB02)

SB01 北側に並列する、東西を主軸にした 1 × 3 間 (約 2.4 × 4.6 m) の建物。柱間は南北が約 2.2 m、東西が 1.6 m と、南北が長い。柱穴内からの出土遺物は小片がおおく、図化できたのは (8) のみである。時期を明確に確定できるものはないが、SB01 と大きな時期差はないものと思われる。



P97



108.00m

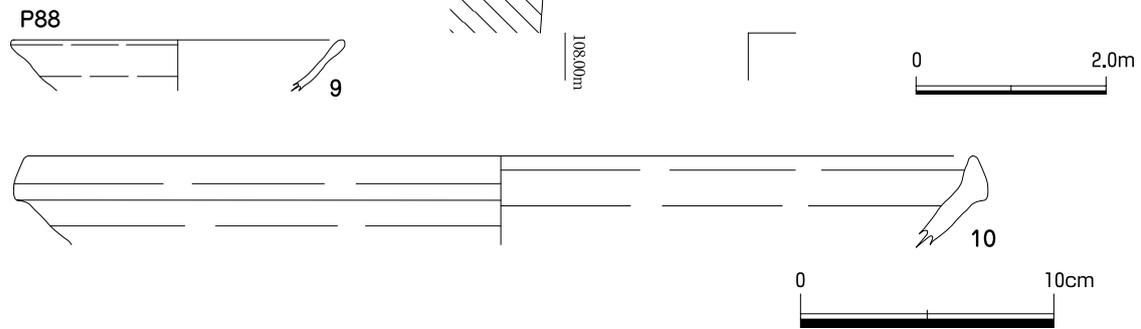


第8図 掘立柱建物02と出土遺物

・掘立柱建物03 (SB03)

SB02に東接して、主軸を南北に持つ掘立柱建物で、1×2間(約2×4m)の規模を持ち、柱間は1.8m前後をはかる。SB02にほぼ直交して建つことから、何らかの関連を持つ建物である可能性がある。

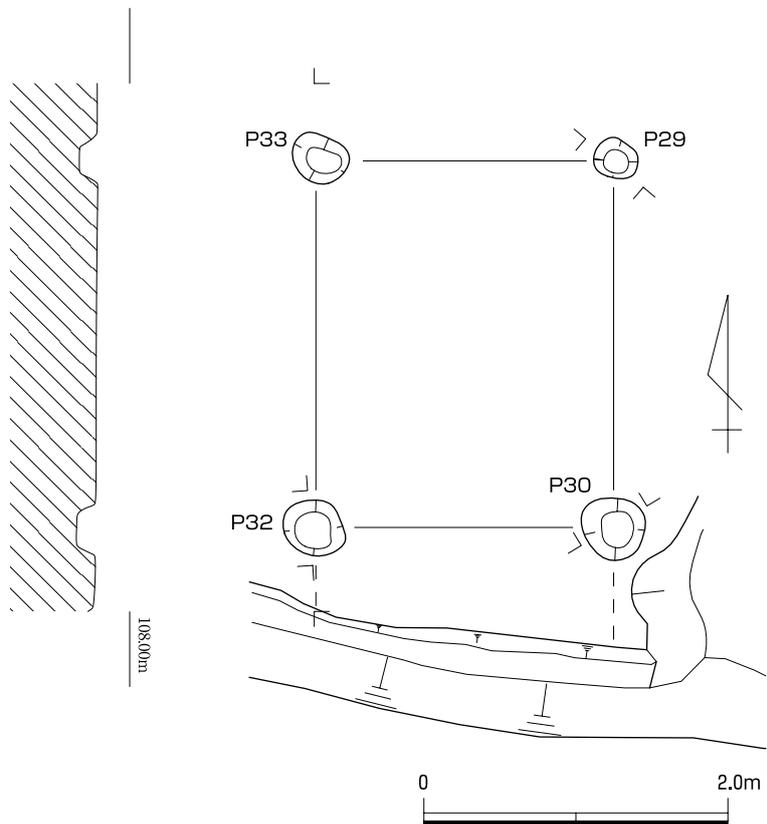
柱穴内からの遺物は少なく小片であるが、図化できた(9)・(10)は東播系須恵器で、いずれも14世紀代に比定される。



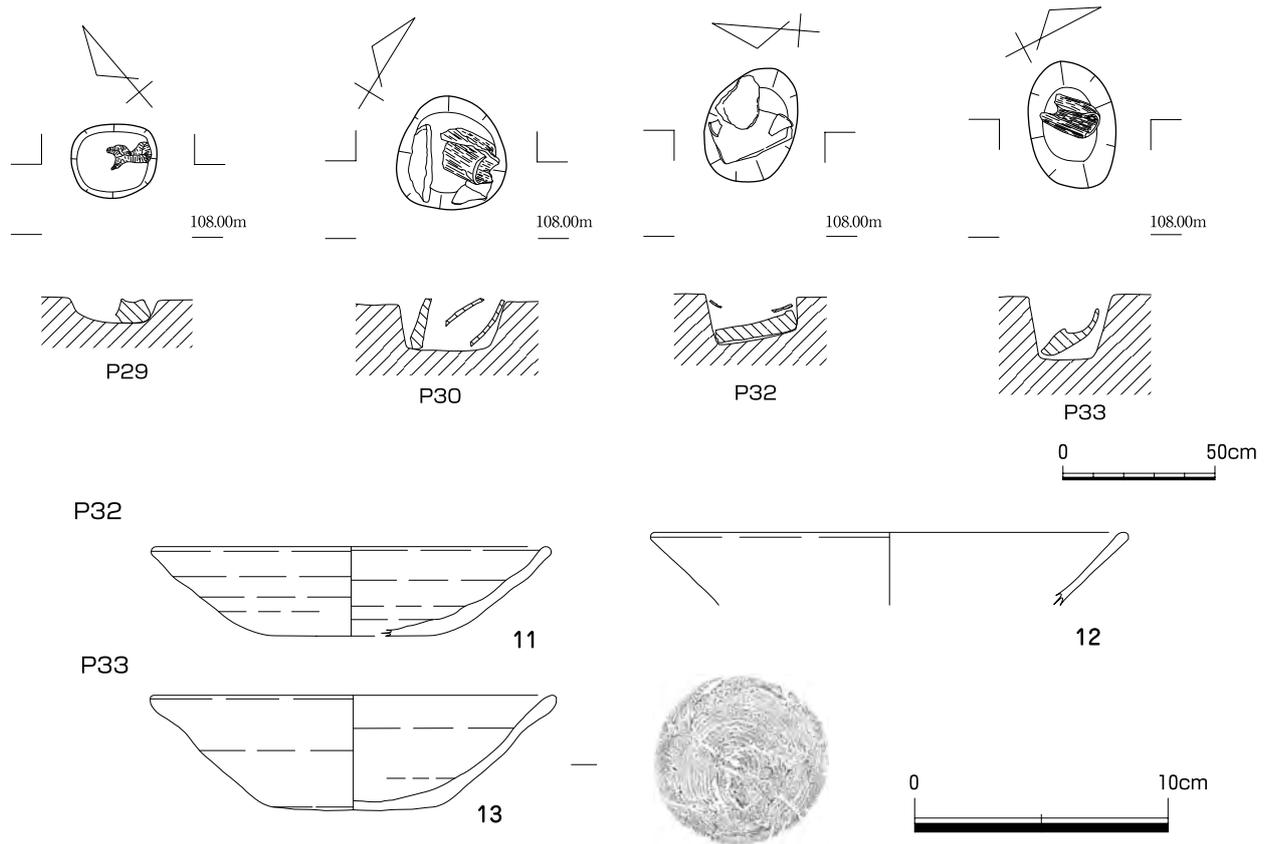
第9図 掘立柱建物03と出土遺物

・掘立柱建物04 (SB04)

調査区南側、SD01西側に位置し、南側の調査区外へのびている可能性はあるが、検出したのは1×1間(2.4×1.9m)の掘立柱建物。角柱穴からは、中世期の遺物小片が出土しているが、図化できるものは少ない。P32・33から出土した山茶碗は13世紀後半～14世紀前半に比定されるものである。また、建物を構成するP29・30・33からは柱痕、P32からは根石が出土している。



第10図 掘立柱建物04



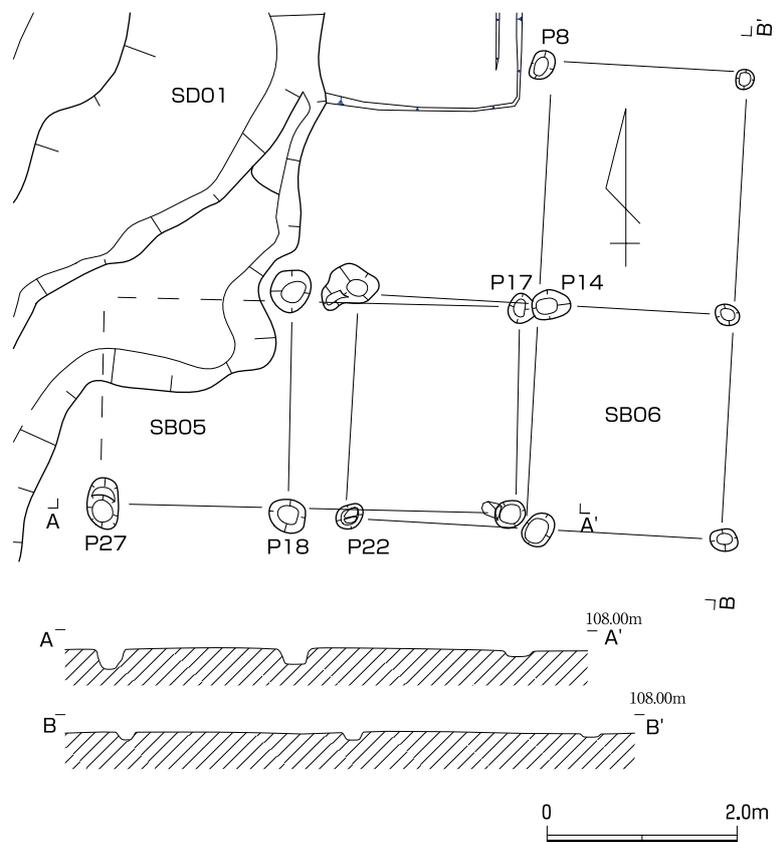
第11図 P29・30・32・33（掘立柱建物04）と出土遺物

・掘立柱建物05・06

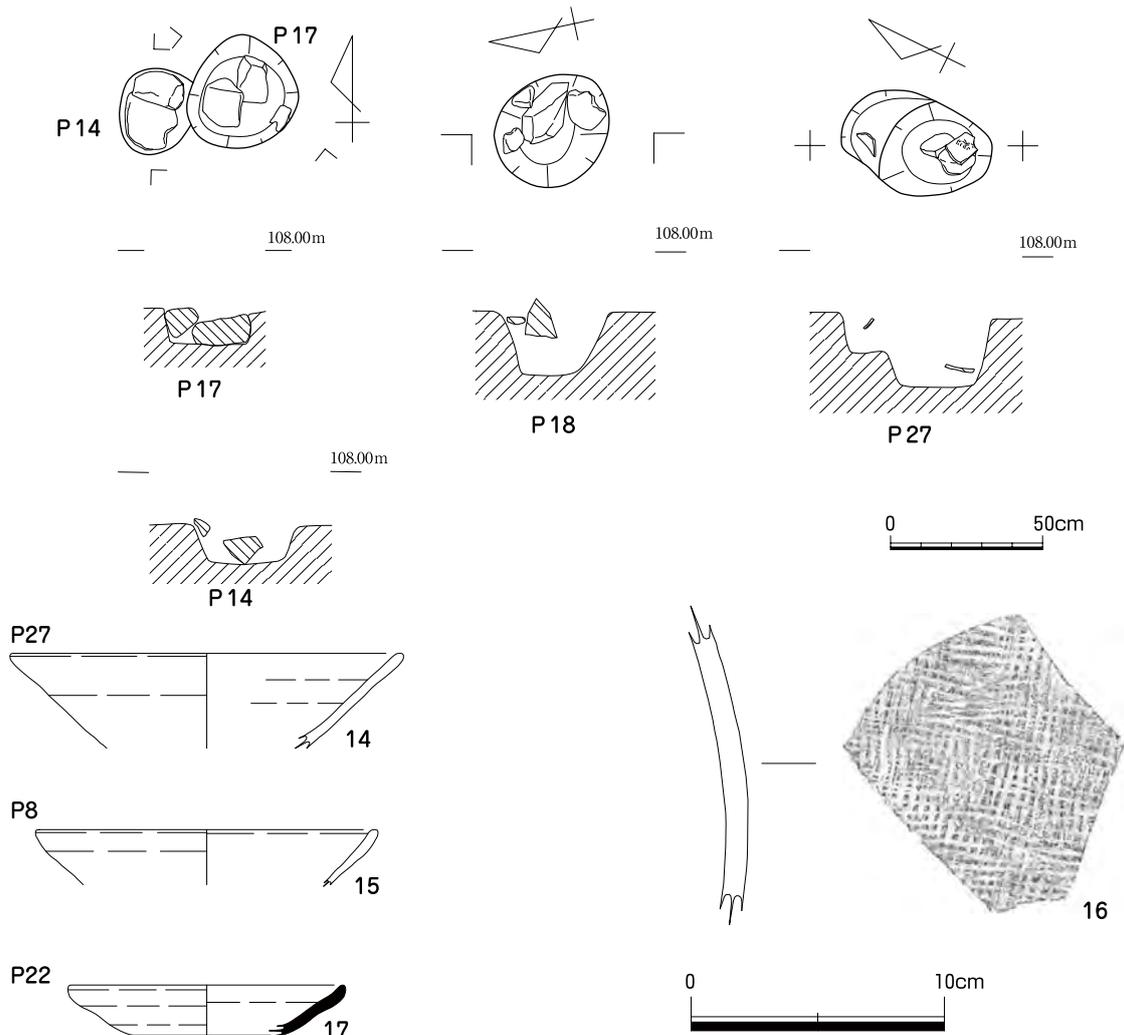
(SB05・06)

SB05・06は調査区南東よりに重複して位置する。P-17とP14の切り合い関係ではSB05がSB06に切られている状況が観察された。

SB05は1×2間（約2.2×4.3m）を検出したが、西側がSD01と重複しており、検出できなかった柱穴の存在が考えられる。東西を主軸とし、柱間は約2.3mをはかる。柱穴からは須恵器、土師器小片が出土しているが、図化できたのは、P27から出土した13～14世紀代の山茶碗(14)



第12図 掘立柱建物05・06



第13図 P14・17・18・27（掘立柱建物05・06）と出土遺物

と甕胴部片（16）のみである。

SB06は梁間1間、桁行東西2間、南北2間の逆L字形の建物。SB05に比べ、若干南に軸をふる。柱間は約1.9mをはかる。柱穴内からは須恵器、土師器小片が出土している。山茶碗（15）と京都系土師器皿（17）のみである。P14と17の切り合い関係はSB05がSB06より古いことを示すが、少ないながらも、遺物を比較すると、大きな時期差はみられない。

## 2. 溝

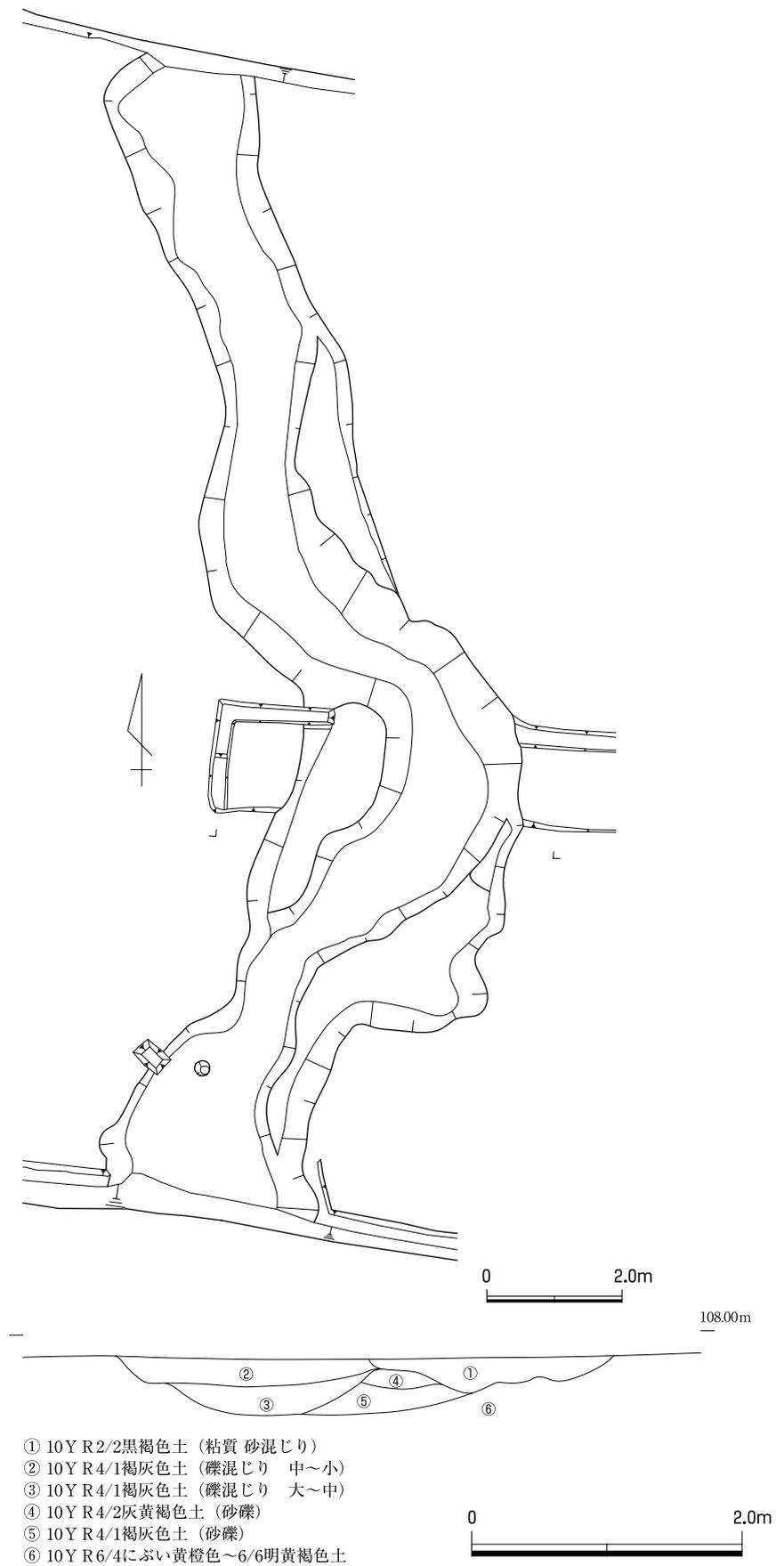
### ・溝01（SD01）

溝01は調査区東寄りを、蛇行しながら南北に縦断する溝。幅は狭いところで約1.6m、屈曲する広い部分で約3.3mをはかる。溝底は屈曲部では2段となっており、深さは50～60cmをはかる。土層の堆積をみると、最上層を除き、砂礫質土層の堆積を中心としており、比較的流れが強い状態にあったことが伺える。最終段階の最上層は粘質系の土層堆積がみられ、いくぶん澱んだ緩やかな流れであったことが伺える。溝埋土最上層からは中世期の須恵器小片が出土している

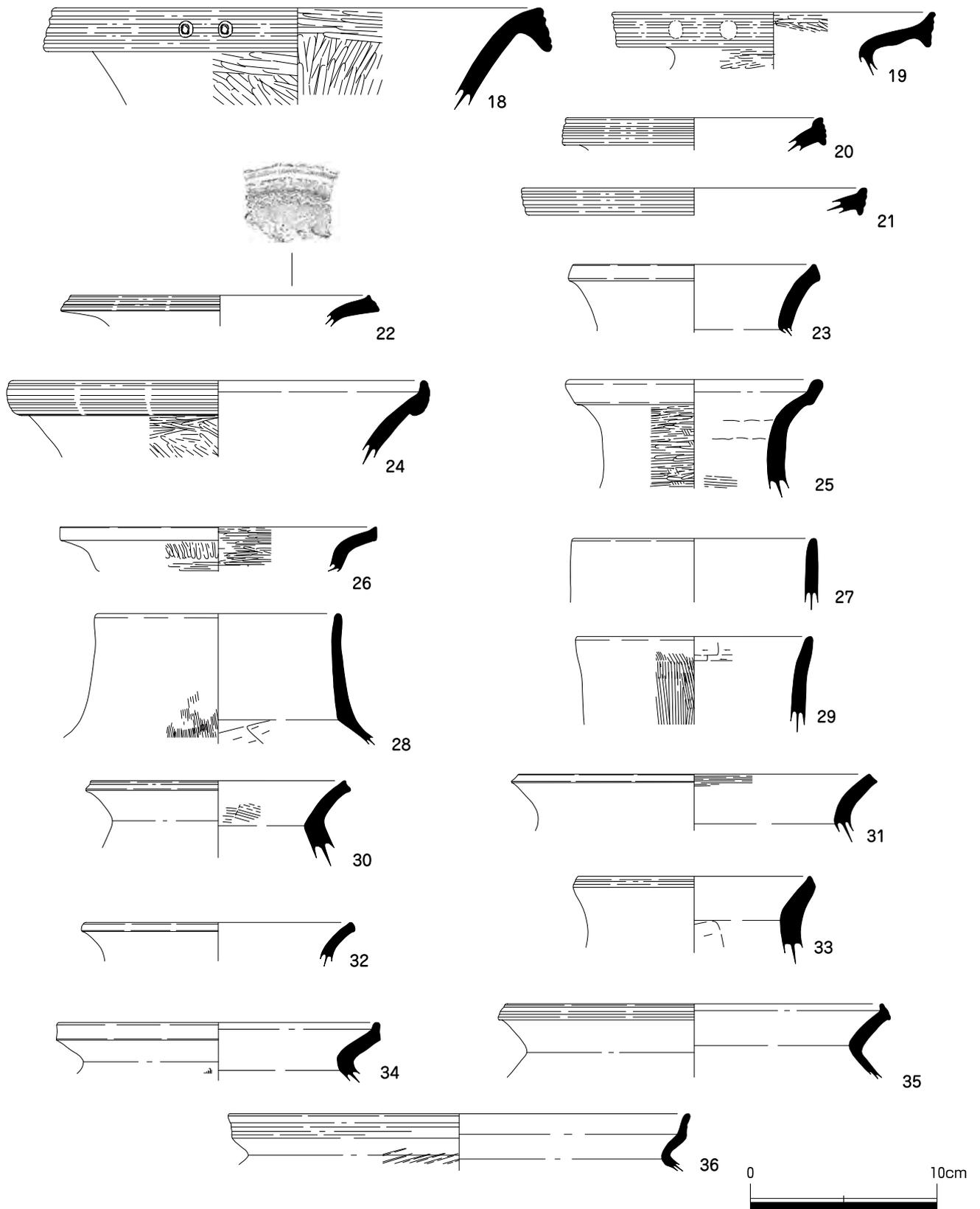
が、第2層以下からは弥生時代終末～庄内期の土器が多く出土している。

〈出土遺物〉(18)～(22)は口縁部を肥厚し、凹線もしくは擬凹線を施した広口壺。(18)は、いわゆるチョコレート色の胎土を有する生駒西麓産の土器。斜め外方に立ち上がる頸部と、斜め下方に肥厚する垂下口縁を持ち、口縁端面には4条の弱い凹線文と2個1対の円形竹管浮文をもつ。垂下部の剥離状態の観察から、垂下部は1次口縁で一端、調整を行った後に下方への拡張のため粘土紐を貼り付けた状態が明瞭に観察される。

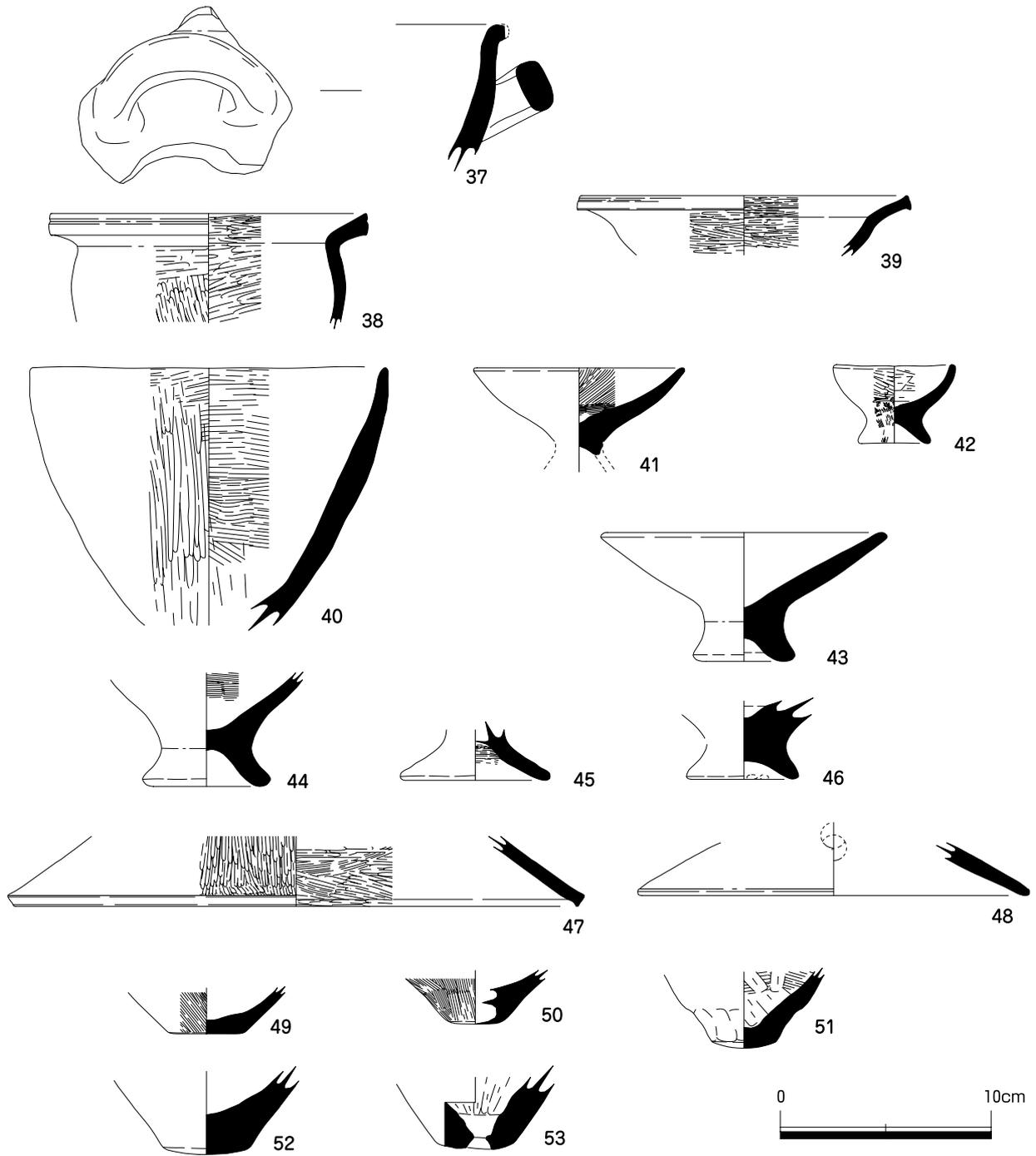
同タイプの生駒西麓産の胎土を持つ広口壺は、高岸・コブサン遺跡で出土している。(19)は頸部で屈曲して大きく開く口縁部で、端部を上下に肥厚し、端面に4条の凹線と円形浮文をもつ。(20)・(21)は口縁端部を上下に肥厚し、4条の擬凹線をもつ。器台口縁部の可能性もある。(22)は口縁部を若干上下に肥厚させ、端面に2条の弱い凹線、口縁



第14図 溝O1



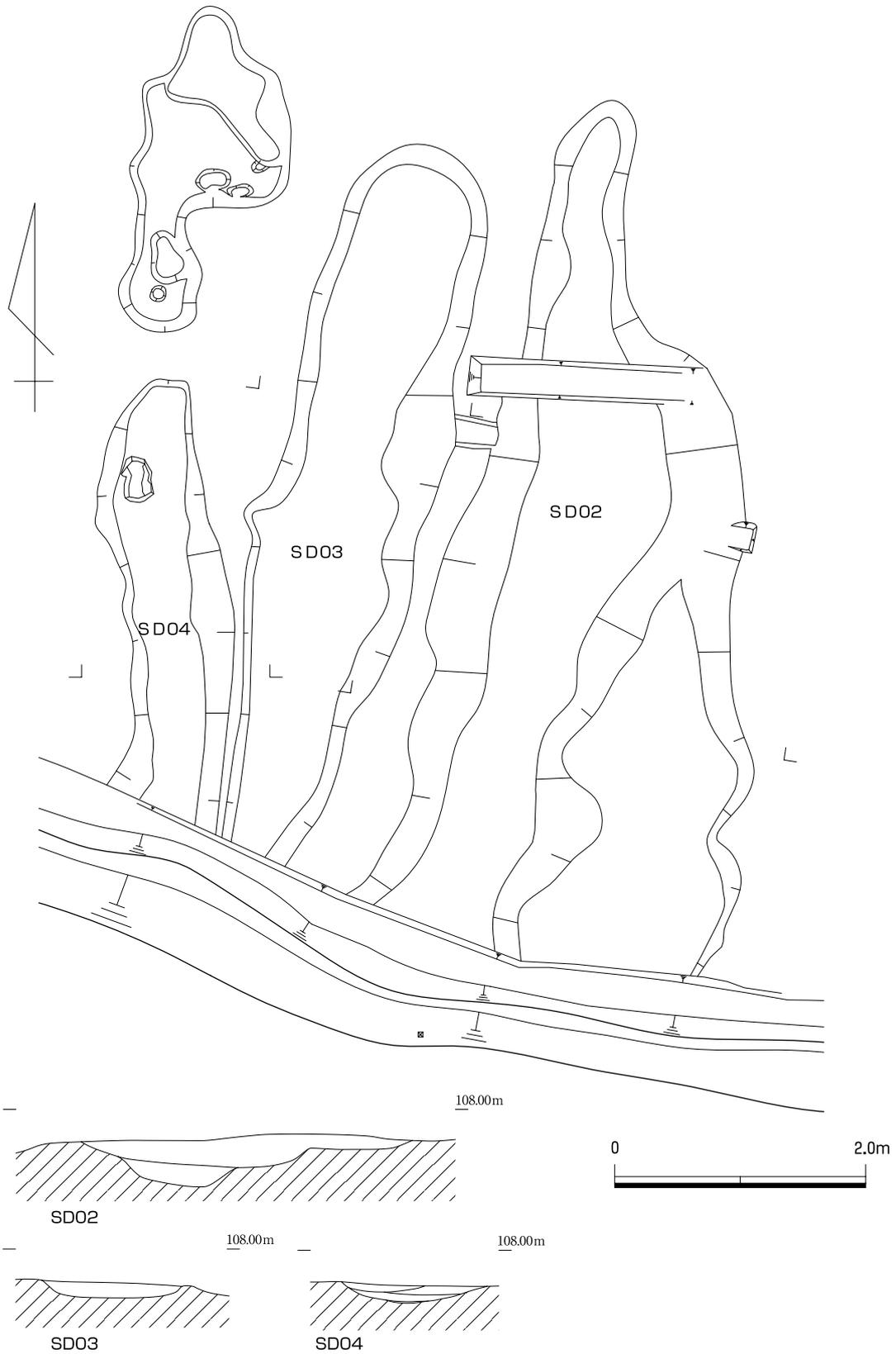
第15図 溝01 出土遺物①



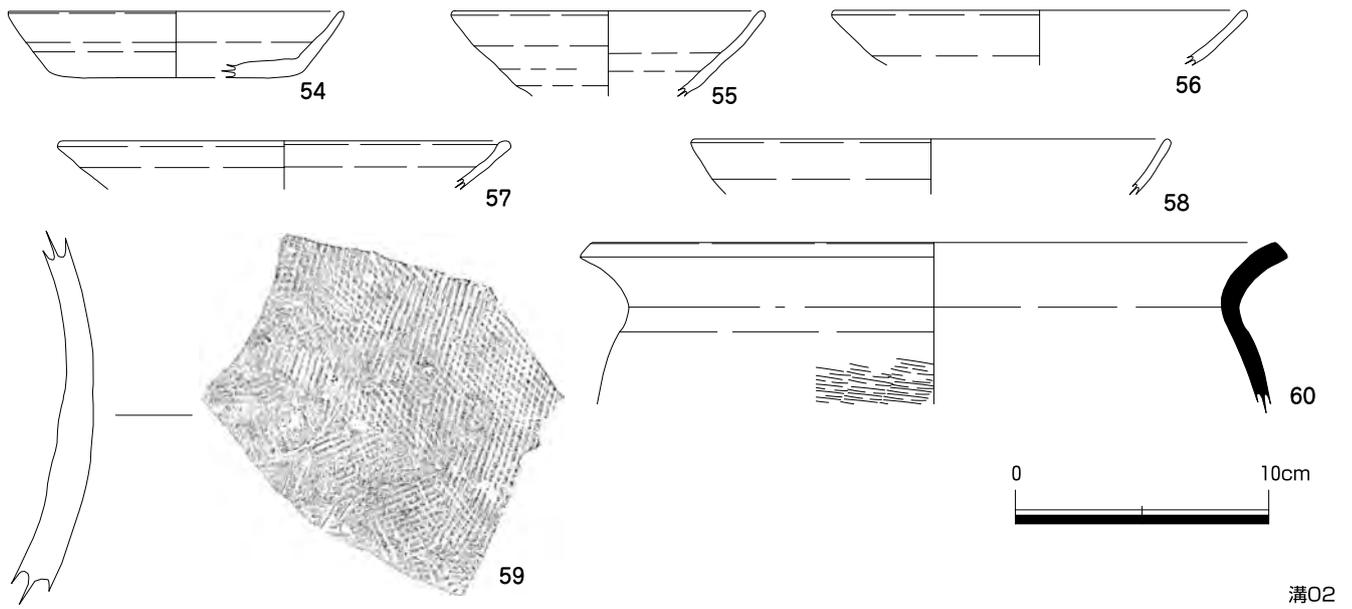
第16図 溝01 出土遺物②

部内面に波状文が施される。(24)・(25)は受け口状口縁部をもつ壺。(24)は端部を玉縁状に肥厚し端部内面の強いナデにより、内湾気味の口縁部を呈し、端部外面に5条の擬凹線を施す。内面ナデ、外面はヘラミガキによる。(25)は口縁端部のナデにより、屈曲して外反気味に立ち上がる2次口縁をつくりだす。外面はハケの後、細かいヘラミガキ調整、内面はナデ調整される。(26)は二重口縁の壺で、外面には暗文状のヘラミガキが施される。(27)～(29)は直口壺で頸部が内

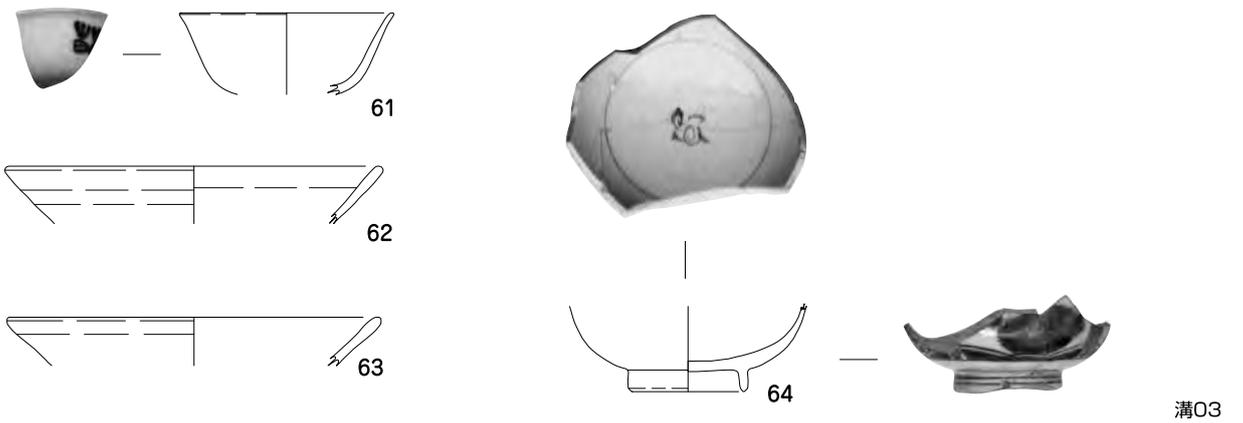
傾するもの、直立気味のもの、外反気味のものがある。甕には、口縁端面を持つ伝統的V様式系の(30)～(32)、丹波、丹後系の(33)～(36)がある。(37)は把手付の大型鉢と思われる



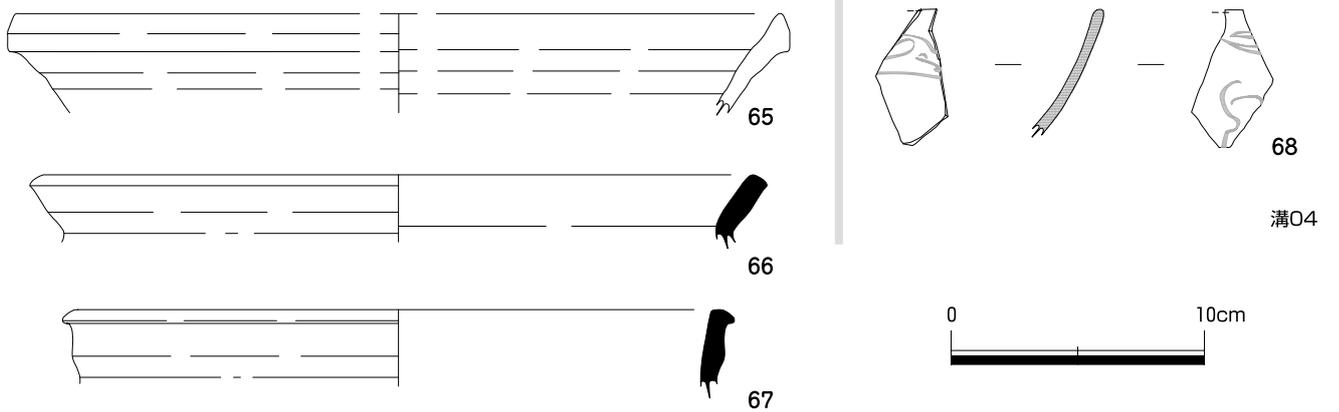
第17図 溝02・03・04



溝02



溝03



溝04

第18図 溝02・03・04 出土遺物

が、内面ヘラケズリが施されており、他器種になる可能性がある。その他、外反する口縁部をもつ (38) ~ (39)、直口の (40)、脚台を持つ (41) ~ (43) がある。

#### ・溝02 (SD02)

SD02は南北にのびる溝。北側が削平されているため、調査区南半部でのみ検出できた。検出長は約6.8 m、幅2.7 m、深さは約40 cmをはかり、南端は若干南西に流れを変える部分に当たるとみられ、溝底は、西側が深く、カーブ外側に当たる東側は1段高い溝底となり、溝幅が広がる。溝埋土は褐色の砂礫層が中心。埋土からは8世紀後半～9世紀前半の坏A (54) や土師器甕 (60) の他、13～14世紀代の遺物 (55～59) などが出土している。

#### ・溝03 (SD03)

SD03はSD02西側で南北に流れる溝。同様に北側が削平されているため、調査区南半部でのみ検出できた。検出長は約5.8 m、幅1.3 m、深さ約14.0 cmをはかる。埋土は砂礫層と黒褐色土が互層となっており、最上層はSD04と重複している可能性があり、近世期の遺物が混じる。第2層以下からは、13～14世紀代の須恵器、土師器が出土している。

#### ・溝04 (SD04)

SD04はSD03西側で南北に流れる溝。同様に北側が削平されているため、調査区南半部でのみ検出できたが、南端はSD02と重複している。検出長は約3.5 m、幅約80 cm、深さは約12 cmをはかる。埋土は砂混じりの暗褐色土で、埋土より近世期の遺物が出土している。

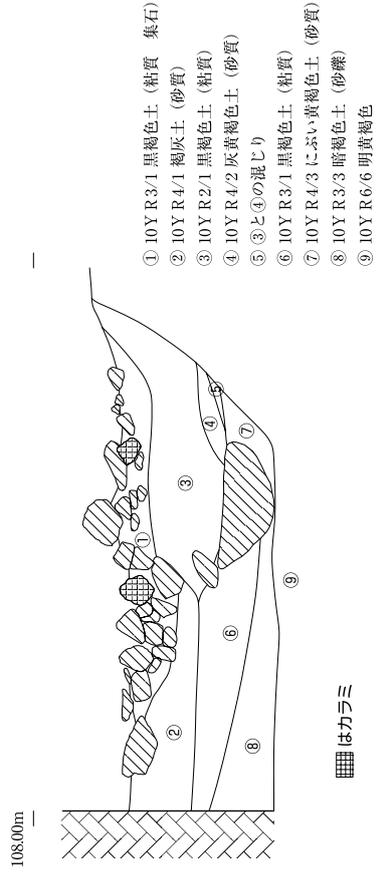
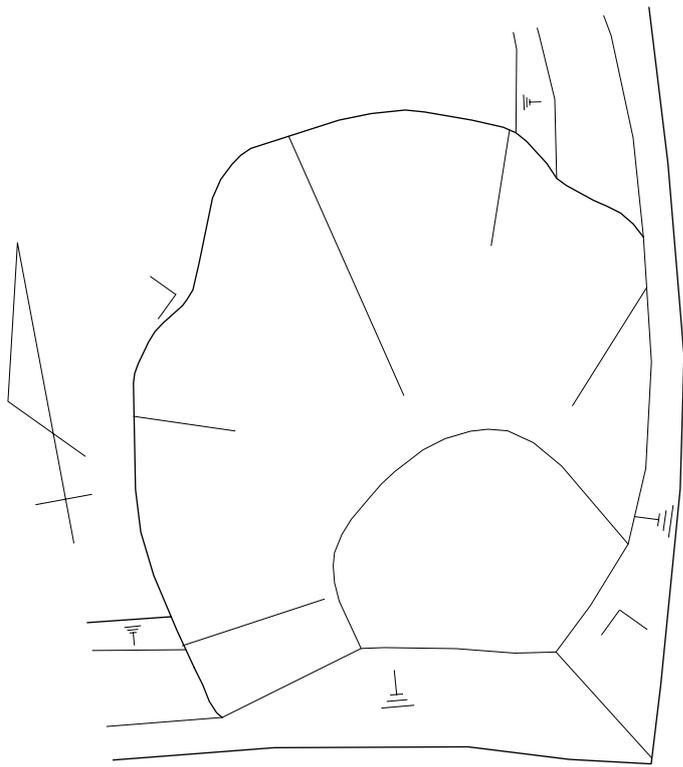
(68)は14～15世紀代の青磁碗。

### 3. 土 坑

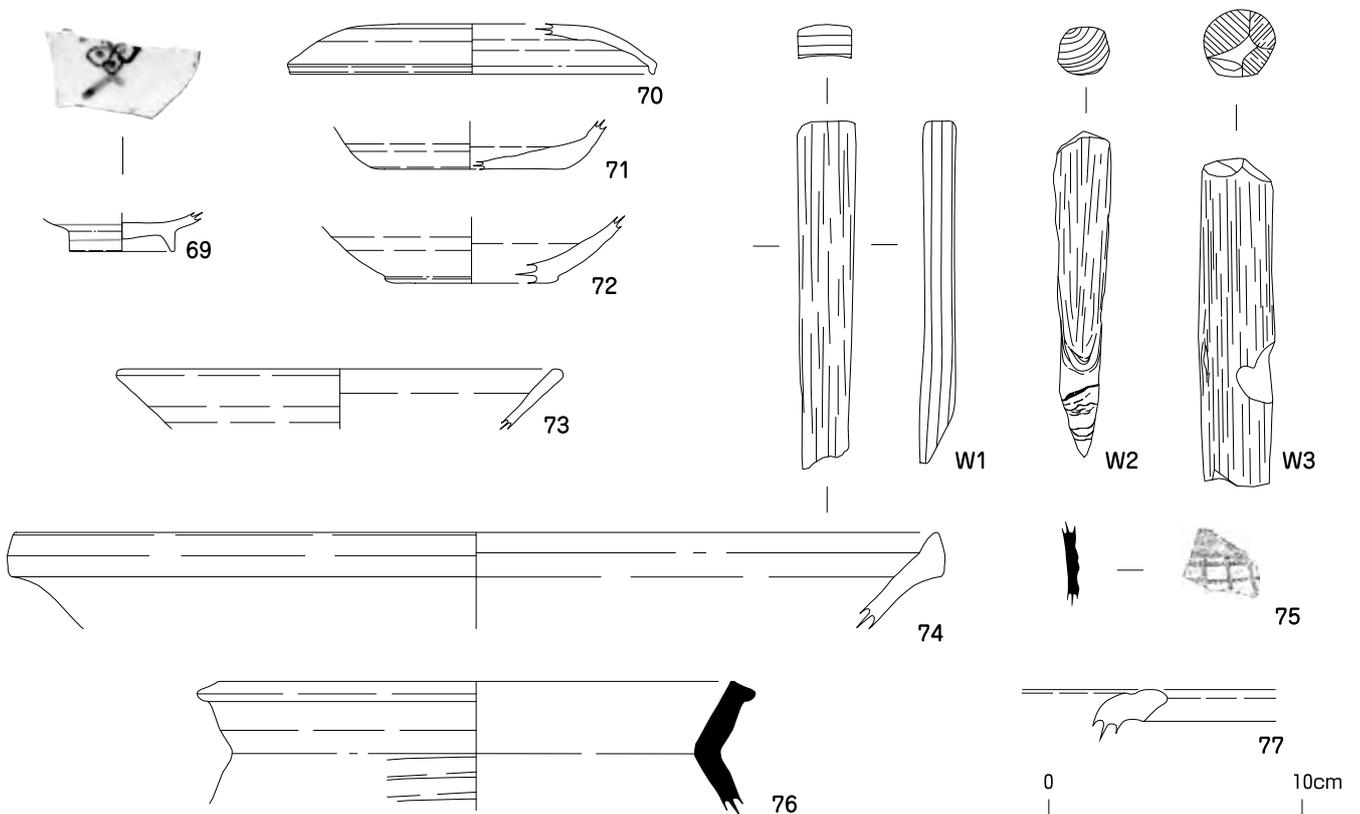
#### ・土坑01 (SK01)

調査区東端で、半分が調査区にかかるかたちで検出された不整形の土坑。直径約2.0～2.5 m (推定)、深さ約67 cmをはかる。土坑内は、上層に10～20 cm前後の礫が集中して集石しており、下層には黒褐色の粘質土と砂礫層が互層に堆積している。

埋土内からは大量のカラミのほか、炉壁片が数点出土しており、総重量で24.6 kgをはかる。これらのカラミの目視による表面観察では銅の成分は観察されず、表面に亜鉛華がみられること、カラミの比重が比較的軽いことなどから金、銀、銅等の鉱物資源ではなく、鉛の製錬に伴うものである可能性が強い。炉壁片の出土は数点であるが、その一部から炉の規模を復元すると径20 cm前後、深さ約4 cm前後の皿状の炉が復元される。その他、製錬の際に生まれる黒鉛化木炭が3点出土している。カラミ以外の出土遺物としては、上層では16世紀後半～17世紀前半のものを含み、中層以下では8世紀代～13世紀代の遺物が出土している。しかしながら、小片が多く、遺構の時期を決定する遺物としては弱いものの、鉛の製錬が、16世紀後半～17世紀前半に増加することから、最も新しい時期の遺物である上層出土遺物が遺構の時期であると考えられる。そ



第19図 土坑01



第20図 土坑01 出土遺物

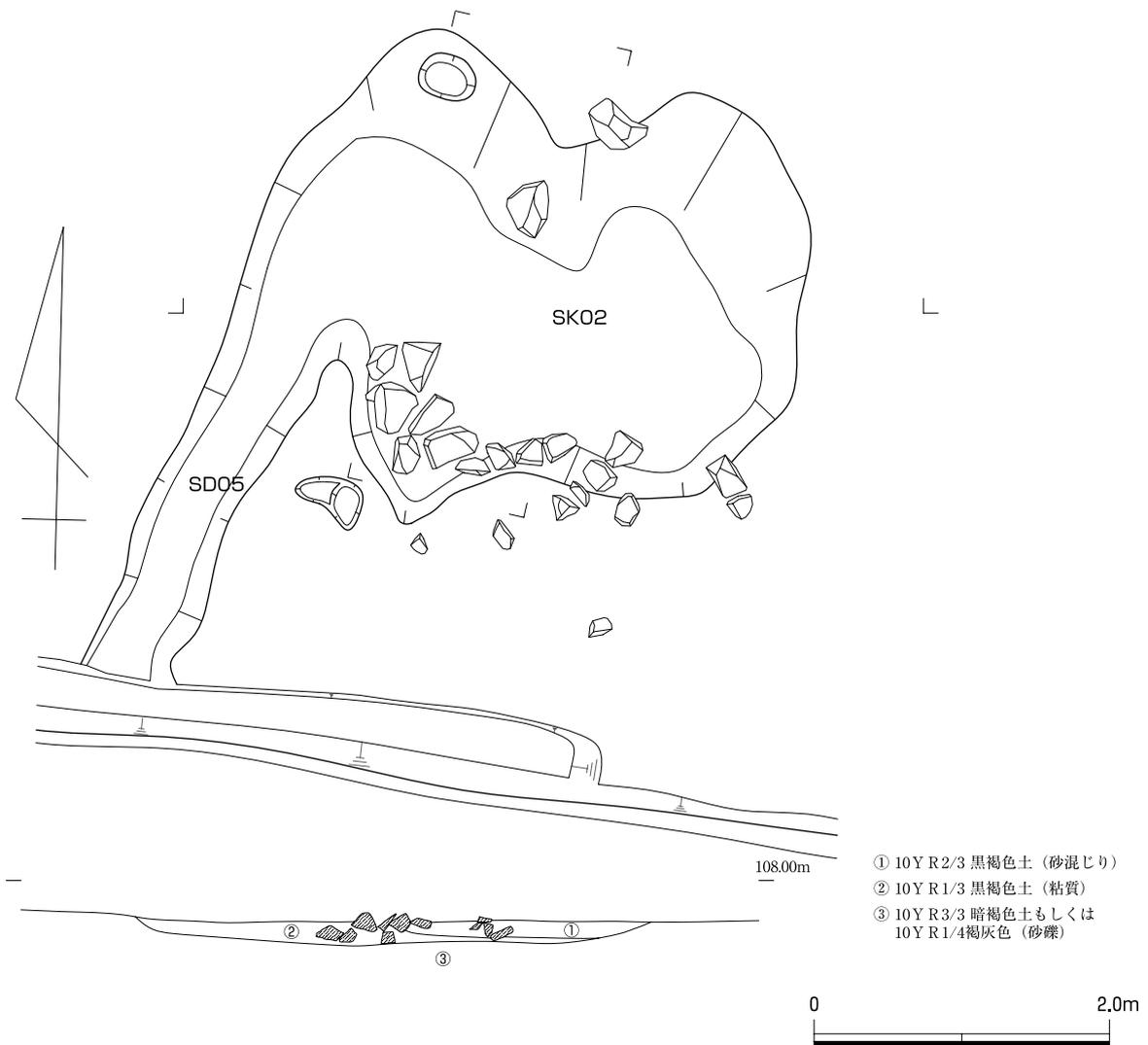
のほか、柄もしくは杭状の用途不明の木製品が出土している。

土坑の機能としては、砂礫層を中心とする堆積状況から、製錬等の生産関係ではなく井戸もしくは水溜等の性格を持つ遺構と考えられ、カラミ、炉壁等が埋没時に投棄されたものと考えられる。

#### ・土坑02 (SK02) と溝05 (SD05)

SK02はSB01の西側に位置する不整形な瓢形の土坑で、土坑西端より南西へのびるSD05と連結している。土坑の規模は、長径約3.8m、短径は広い部分で約3.3m、狭い部分で2.2m、深さは約16cmをはかる。

埋土は2層に分かれ、上層に砂混じりの黒褐色土、下層に粘質の黒褐色土が堆積し、埋土内には15～20cm前後の多くの石が含まれており、土坑のやや中央よりに集石している。これらは、土坑廃棄時に投棄されたものと見られるが、面を持つものが多く、土坑の周囲に区画として使われていた石列であった可能性が考えられる。この投棄された石に混在して、丹波焼の甕1個体分



第21図 土坑02・溝05

の破片が集中して出土した。

SD05はSK02西端から南西方向へのびる、幅約60cm、検出長2.8m、深さ約10cmの溝。SK02への給排水機能を持っていたものと思われる。

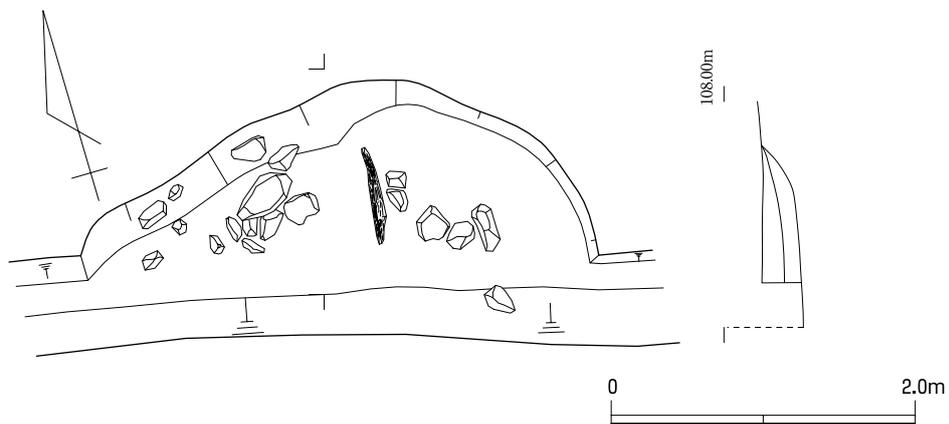
埋土からは須恵器、土師器、中世陶器が出土している。(78)・(79)は須恵器山茶碗。(80)～(82)は土師器埴で、羽釜タイプの播磨型と鉄かぶと形がある。羽釜タイプは断面三角形の短い鏝部をもつ。(83)・(84)は、手捏ね調整の土師器小皿。(85)～(88)は陶器。(86)は瀬戸・美濃産の卸皿で、底部は回転糸切が施される。(87)・(88)は丹波焼甕で、焼歪が大きく、完形に復元し得なかったが、同一固体と思われる。口縁部が屈曲して外側に折れ、端部は尖り気味にナデ調整され、内面には凹線状の段を持つ。胴部上半には指摺り痕跡が残る。(85)は体部にロクロ痕を明瞭に残し、『T』字形の口縁部を有する唐津焼模倣の播鉢。(85)は岩座神神光寺遺跡に類例がみられ、17世紀前半に比定されるが、それ以外の出土遺物は14世紀後半～15世紀前半の時期に比定される。



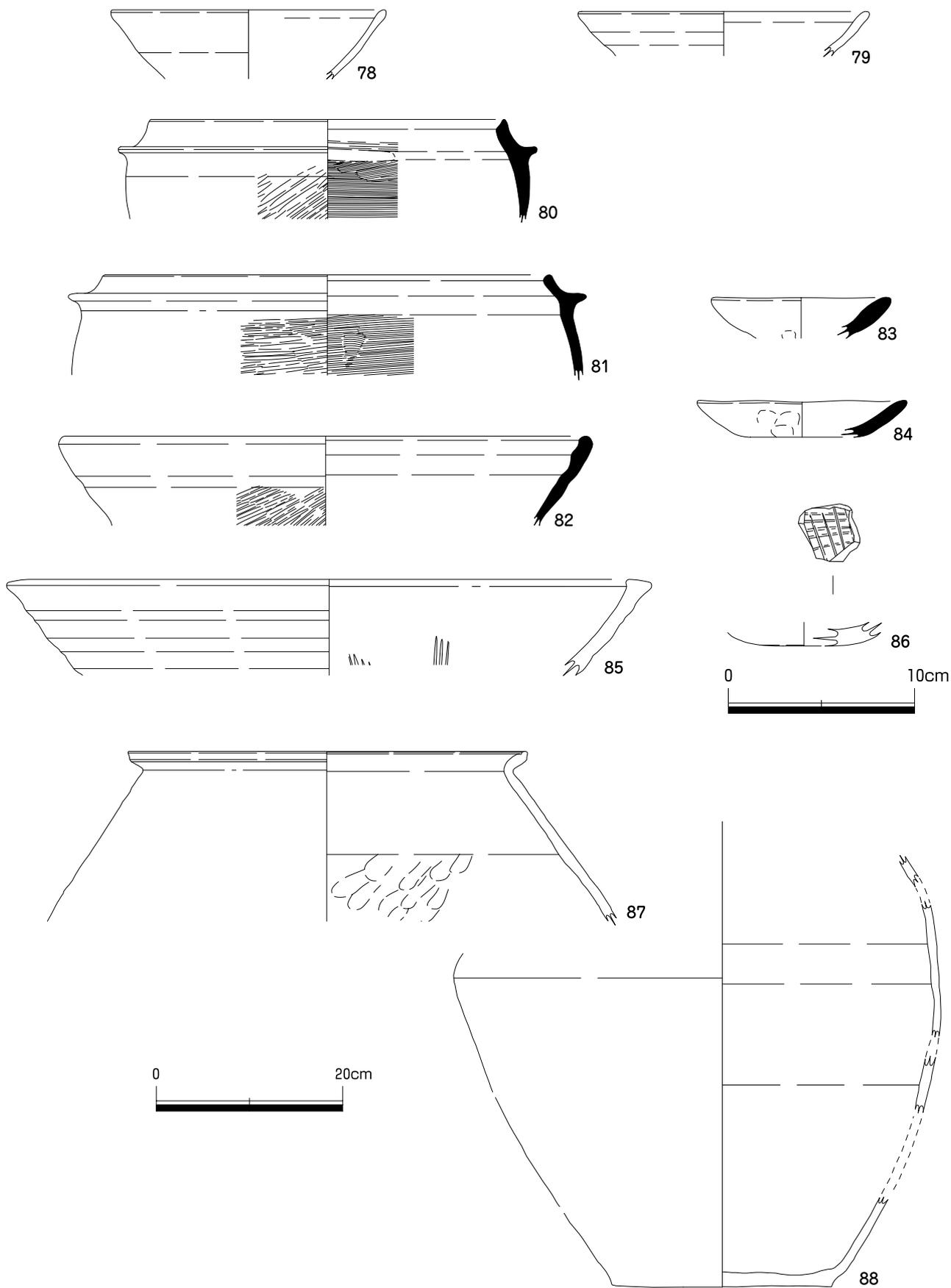
第22図 土坑02 遺物出土状況

#### ・土坑03 (SK03)

調査区南端で一部を検出した。不正円形の土坑で深さは約26.0cmをはかる。埋土は上層に褐灰色の砂礫、下層に黒褐色粘質土が堆積しており、10～40cm大の石が落ち込んでいる。出土遺物は中世須恵器、土師器小片が出土しているが、図化できるものはなかった。



第23図 土坑03



第24図 土坑02・溝05 出土遺物

#### 4. その他の遺構

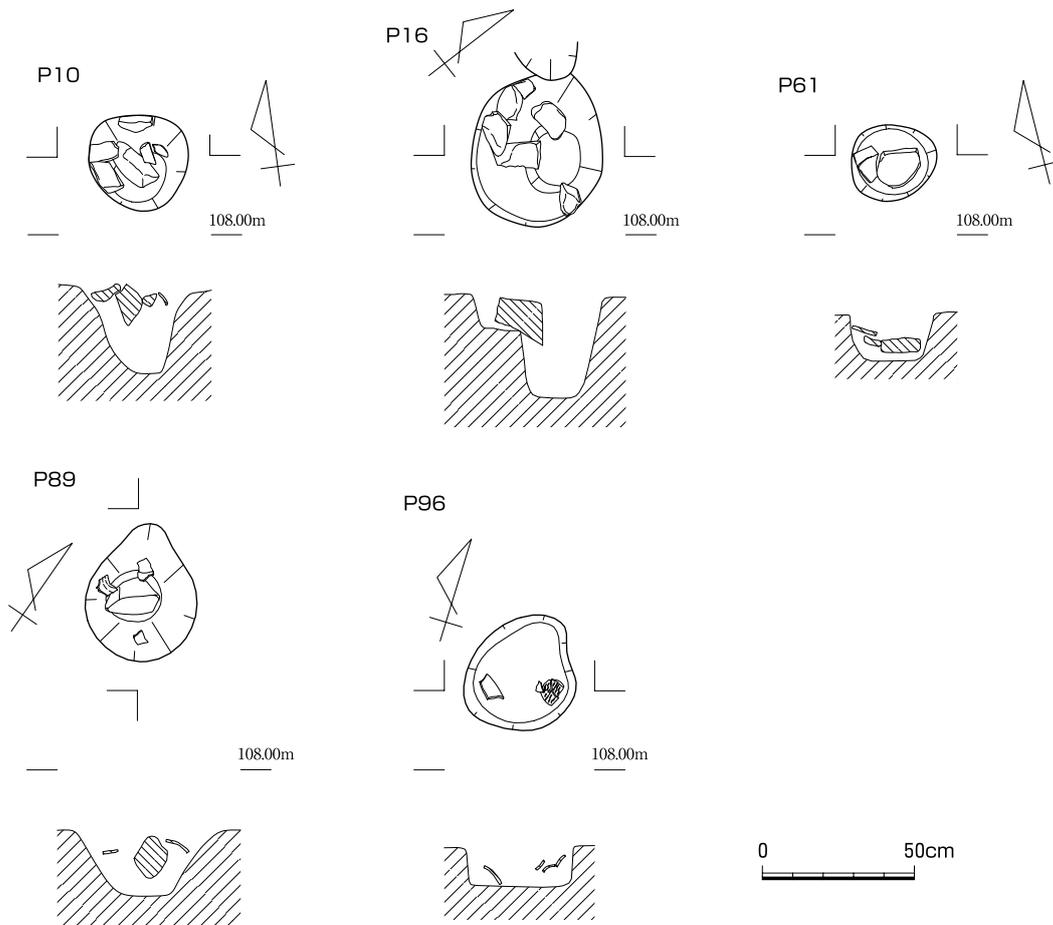
##### ・ピット状遺構

P10 径約 33 cm、深さ約 29.0 cmのピット。上面には 15 cm前後の礫が埋め込まれており、埋土からは土師器皿（89）が出土した。

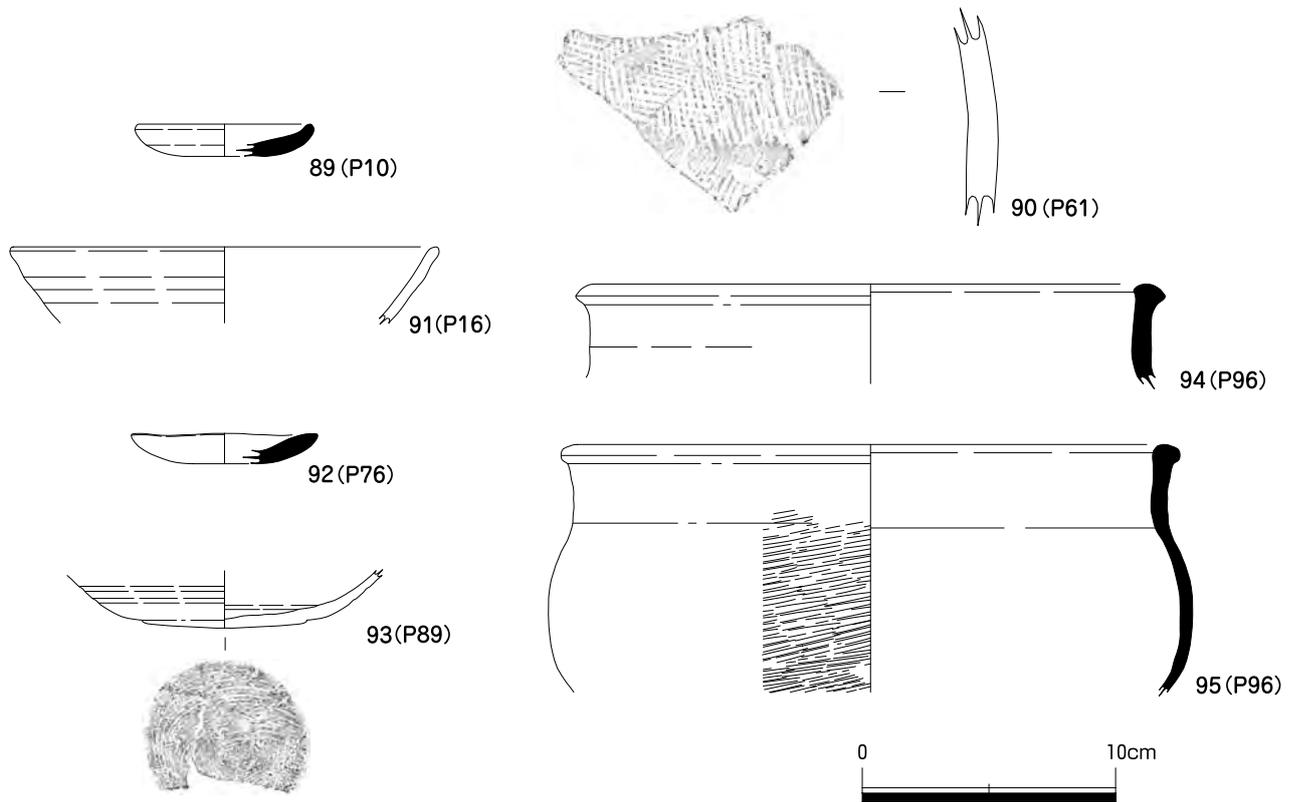
P16 径約 43 cm、深さ約 34.0 cmのピットで、2段掘りとなっており、内径は約 25 cmをはかる。内部には 13 cm前後の礫が落ち込んでおり、埋土から土師器、須恵器の小片が出土しているが、図化できたのは（91）のみである。

P61 径 28 cm、深さ約 16 cmのピット。内部には長径約 14 cm、厚さ 5 cmの平石が底部より少し浮いた状態で出土している。埋土から須恵器甕の胴部片（90）が出土している。

P76 径 40 cm、深さ約 23 cmのピット。埋土より土師器小皿（92）が出土している。



第25図 P10・16・61・89・96



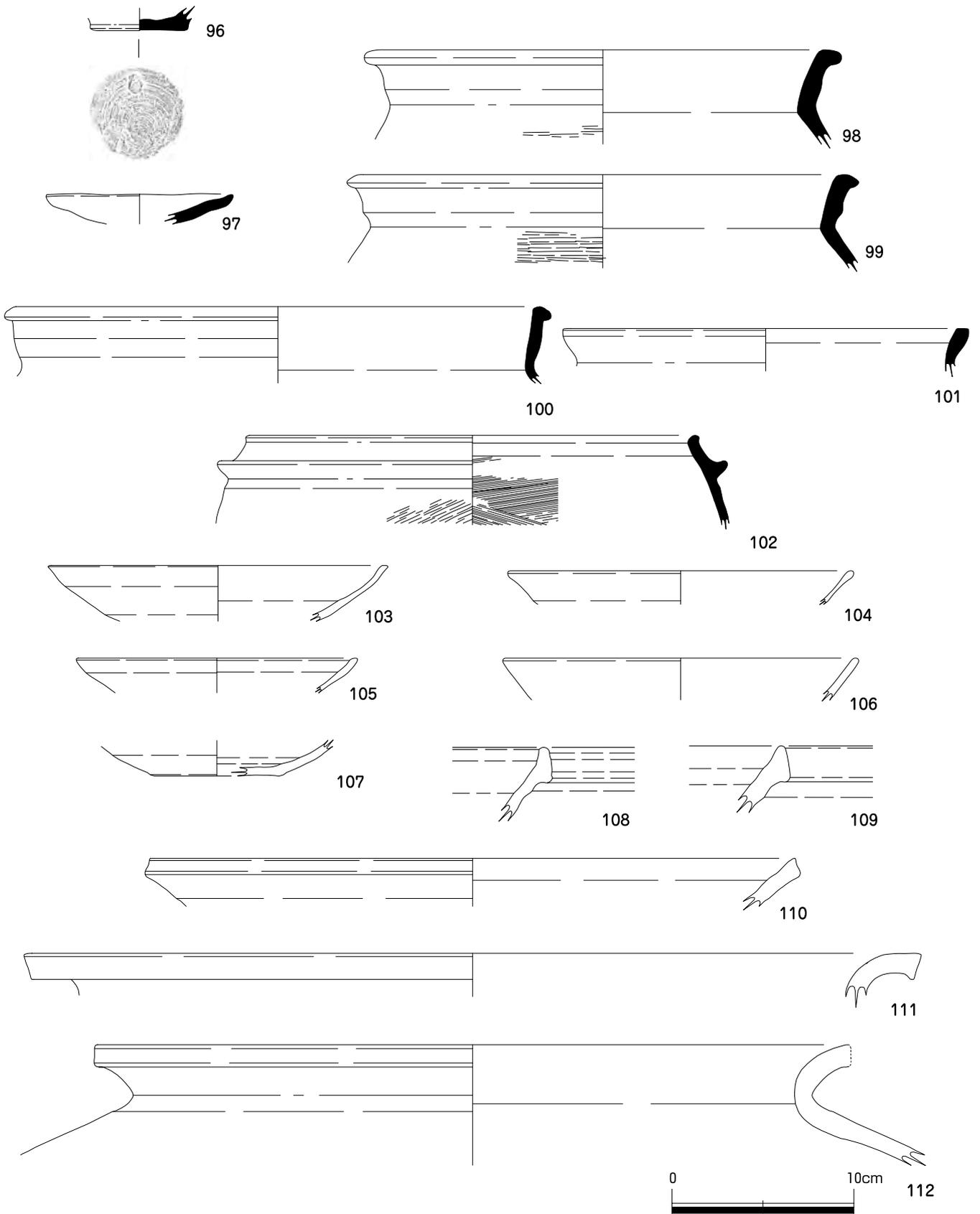
第26図 P10・16・61・76・89・96出土遺物

P89 径約 37 cm、深さ約 22 cm ののピット。埋土内には 16 cm 前後の礫と須恵器山茶碗（93）が出土した。（93）はわずかに内面見込み部や、底部の痕跡を残す段階で 12 世紀末～13 世紀前半に比定される。外面には墨書が施されているが判読は不明。

P96 径約 37 cm、深さ約 13 cm のピット。埋土から土師器土埴が出土している。（95）は良く焼き締まった硬質の土埴で、比較的直立気味にのびる口縁部で、端部は玉縁状におさめる。15 世紀前半にあてられる。

#### ・その他包含層出土遺物

（96）は底部回転糸きりを施した碗底部で 12 世紀代のものであろう。（98）～（102）は土師器土埴で、播丹型で、『く』字形に屈曲して外方に開く口縁部を持ち、端部を外側につまみ出し、端部に面を持つ 13 世紀代の（98）・（99）や、15 世紀代に下ると思われる口縁部が直立気味に立ち上がる（100）、短い口縁部をもつ（101）等の播丹型のほか、羽釜（102）がある。（103）～（107）は須恵器山茶碗。鉢では口縁部の肥厚の弱い（110）、上下に肥厚させる（108）・（109）がある。（111）・（112）は甕で、13 世紀代に比定される。



第27図 その他の出土遺物

### Ⅲ ま と め

田野口・宮ノ下遺跡は、平成19年度中町東線・西線建設事業に伴い発見された遺跡である。

中町東線建設にあたっては、平成2年度より発掘調査が行われており、思い出遺跡群、牧野・大日遺跡、牧野・町西遺跡、田野口・篔町遺跡、今回の田野口・宮ノ下遺跡と沿線沿いに隣接して遺跡が連なって存在していることが明らかとなった。これらの調査により、弥生時代～中世期にかけての多可町中区北部平野の遺跡の様相が少しずつ明らかになりつつある。

今回の調査では、弥生時代終末～庄内期の溝、中世期の掘立柱建物跡6棟、土坑1基、中世末～近世初頭の土坑1基が確認された。

弥生時代後期後半～庄内期の遺構は、隣接する田野口・篔町遺跡第6区の調査において、北近畿系土器様式の特徴を持つ大量の土器を出土した溝、竪穴式住居跡等が検出されている。今回検出された溝からも、弥生時代終末～庄内期の擬凹線をもつ北近畿系の特徴のものを含む土器を出土している。しかしながら、SD01出土のもののうち、生駒西麓産の胎土を有する広口壺の存在は、畿内中央部との交流の一端も示すものといえる。

中世期の建物跡は、田野口・篔町遺跡では平安時代後半～中世前半期を中心とする建物跡が検出されているが、田野口・宮ノ下遺跡では中世後半期を中心とするもので、若干位地をずらしながら集落が営まれてきたことが伺える。

土坑01から出土したカラミは、妙見山麓遺跡調査会 神崎勝氏の目視による教示では、鉛の製錬に伴うものである可能性が強いとされた。これらのカラミは、土坑埋没時の投棄等によるものであるが、出土遺物から16世紀後半～17世紀前半の時期が当てられる。この時期は銀輸出の盛行した時期に当たり、銀製錬に必要な鉛の需要が高まった時期でもある。鉛製錬跡は、類例が少なく、広島県加計町寺尾遺跡、兵庫県朝来市生野口銀谷遺跡で確認されているのみであり、当遺跡では遺構は確認できなかったが、表面観察においては、鉛製錬に伴うカラミである可能性が強く、今後、蛍光X線元素分析による詳細な分析を行い検討していきたい。

中町東線の建設に伴う調査は、平成19年度工区をもって終了となる。いずれも記録保存のための調査であり、調査後の遺跡が消滅していったことは残念であるが、中町北部平野を縦断する工区に伴う調査であったことから、北部平野の遺跡の状況が少しずつ明らかになってきた。

北部平野の遺跡の大まかな分布を概観してみる。東線建設に伴い調査が行われた遺跡で、遺構が確認されている主な時代としては、弥生時代中期後半～庄内期、奈良～平安時代前半、平安時代後半～中世前期、中世後期があげられる。

弥生時代では、思い出遺跡群～牧野・町西遺跡で中期後半～後期前半、田野口・篔町遺跡～田野口・宮ノ下遺跡において後期末～庄内期の遺構、遺物が確認されており、北部平野にあつては

中央部から、田野口・窺町、田野口・宮下遺跡周辺の標高の高い場所への集落の移動があった可能性が考えられる。このことは、中央部を流れる杉原川の流路の変化（環境変化も関係？）が関係していたのではないかと推察される。

奈良～平安時代前半にかけては、思い出遺跡群 1 区～9 区、牧野大日遺跡、牧野・町西遺跡、田野口・窺町遺跡第 1 区 2 区にかけて官衙的色彩のきわめて強い遺構、遺物が検出されており、北部平野中央部に位置する思い出遺跡群、多哥寺遺跡を囲むかたちで律令期の遺跡が位置しており、多可町の律令期を考える上で重要なエリアを構成している。また、田野口・窺町遺跡以西では、田野口宮ノ上遺跡・田野口・観音西遺跡、田野口・北遺跡で奈良時代の遺物の散布が見られ、中町東線沿線より一段上がった場所に奈良～平安時代前半の遺跡が存在している可能性が強く律令期の北部平野での展開はさらに広がる可能性を秘めている。一方、田野口・窺町遺跡以西の中町東線沿線沿いでは、律令期の遺構は確認されず、遺物量も少なくなり、田野口・窺町遺跡 3 区～6 区が中世前半期、田野口・宮ノ下遺跡は中世後半期を中心とする集落の広がりを確認することが出来た。

中区平野部は、中央を蛇行して南流する杉原川によって、大きく北部平野、中央平野、安田平野に分かれるが、今後更なる調査、検討を加えることによって、各平野の遺跡の分布、特質の異同を明らかにしていくことにより、多可町中区平野部の人々の営みを解明していくことへつなげていきたい。



作業風景



建設中の中町東線

# 土器観察表

- ・法量は（ ）現存高、－は不明である。
- ・成形・調整等の（ / ）は（本数/cm）である。

報告書 No.	実測 No.	出土場所	器 種		法 量 (cm)			色 調	成 形 ・ 調 整 等		残 存	備 考
			種 類	器 種	口径	底径	高さ		外 面	内 面		
001	0004	P81(SB01)	備前焼	掃鉢	28.6	-	-	10R3/4暗赤	ヨコナデ、接合痕残	10本1単位のクシ描卸日、ヨコナデ	口縁部1/12	
002	0048	P81(SB01)	土師器	小皿	8.5	4.0	1.7	7.5YR7/4	未調整	ナデ	口縁部1/3	
003	0005	P81(SB01)	土師器	小皿	10.0	-	2.8	10YR7/2 濃い黄橙	ナデ、スス付着	ナデ、スス付着	口縁部1/3強	
004	0009	P81(SB01)	瓦	丸瓦	-	-	-	N8/灰白	ケズリ→ナデ	布目		
005	0046	P43(SB01)	須恵器	甕	-	-	-	N7/灰白	羽状タタキ	ハケ+ナデ	-	
006	0047	P57(SB01)	須恵器	鉢	31.3	-	-	N6/	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/24	
007	0049	P111(SB01)	土師器	小皿	8.4	-	-	10YR8/2	未調整	ナデ	口縁部1/6	
008	0050	P97(SB02)	土師器	土壺	20.1	-	-	7.5YR7/4 濃い黄橙	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	口縁部1/12	
009	0052	P88(SB03)	須恵器	山茶碗	13.0	-	-	N6/灰	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12	
010	0051	P88(SB03)	須恵器	鉢	37.3	-	-	N7/灰白	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12	
011	0014	P32(SB04)	須恵器	山茶碗	15.4	6.7	3.6	N5/灰	ヨコナデ、底部回転系切り	ヨコナデ	口縁部1/12	
012	0015	P32(SB04)	須恵器	山茶碗	18.4	-	2.9	N6/灰	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12	
013	0008	P33(SB04)	須恵器	山茶碗	15.8	6.3	4.6	5PB6/1	ヨコナデ、底部回転系切り	ヨコナデ、底部仕上げナデ	口縁部・1/2	
014	0013	P27(SB06)	須恵器	山茶碗	15.3	-	-	N8/灰白	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/3	
015	0010	P8 (SB06)	須恵器	山茶碗	13.2	-	-	N5/灰	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/24	
016	0108	P27(SB05)	須恵器	甕	-	-	-	N7/灰白	タタキ横→縦	青海波・ハケ→ナデ	-	
017	0054	P22(SB06)	土師器	小皿	10.8	5.9	2.0	10YR8/2灰白	口縁部ナデ、底部未調整	ナデ	体部1/12	
018	0078	SD01	弥生土器	広口壺	25.9	-	-	5YR5/4 濃い赤褐	口縁部ヨコナデ 凹線4条 円形浮文、頸部以下ヘラミガキ、口縁下方への肥厚部接合痕明瞭に残る	ヘラミガキ	口縁部1/6	河内産の胎土
019	0089	SD01	弥生土器	壺	17.1	-	-	7.5YR8/3浅黄橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	口縁部1/4	
020	0101	SD01	弥生土器	甕	13.6	-	-	7.5YR7/4 濃い黄橙	ヨコナデ 擬凹線文4条	ヨコナデ	口縁部1/12	
021	0100	SD01	弥生土器	甕	18.3	-	-	7.5YR7/4 濃い黄橙	ヨコナデ 擬凹線文3条	ヨコナデ	口縁部1/12	
022	0105	SD01	弥生土器	壺	15.9	-	-	10YR7/3 濃い黄橙	荒れて不明、口縁部擬凹線2条	荒れて不明、口縁部波状文	口縁部1/12	
023	0103	SD01	弥生土器	壺	12.9	-	-	10Y R8/3	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/6	
024	0091	SD01	弥生土器	壺	22.0	-	-	7.5YR7/4 濃い黄橙	口縁部ヨコナデ 擬凹線文5条 頸部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ	口縁部1/12	丹波丹後系
025	0090	SD01	弥生土器	壺	13.3	-	-	7.5YR7/4 濃い黄橙	口縁部板ナデ、頸部ハケ→ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、頸部ハケ・板ナデ	口縁部1/6	丹波丹後系
026	0109	SD01	弥生土器	複合口縁壺	15.8	-	-	7.5YR7/6橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	口縁部1/12	
027	0097	SD01	弥生土器	直口壺	12.9	-	-	10YR8/1灰白	ナデ	ナデ	口縁部1/6	
028	0092	SD01	弥生土器	直口壺	12.9	-	-	7.5YR7/3 濃い黄橙	口縁部ヨコナデ、頸部ナデ、体部ハケ	口縁部ヨコナデ、頸部ナデ、体部ヘラケズリ	口縁部1/6	
029	0096	SD01	弥生土器	直口壺	12.4	-	-	10YR8/1灰白	口縁部ヨコナデ、頸部ハケ	口縁部ヨコナデ、頸部板ナデ+ナデ	口縁部1/6	
030	0093	SD01	弥生土器	甕	13.6	-	-	7.5YR7/4 濃い黄橙	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ハケ→ヨコナデ、体部ナデ	口縁部1/12	
031	0099	SD01	弥生土器	甕	18.8	-	-	10Y R8/1灰白	ヨコナデ	口縁部ハケ→ヨコナデ	口縁部1/12	
032	0106	SD01	弥生土器	甕	14.2	-	-	10Y R8/4浅黄橙	ヨコナデ、スス付着	ヨコナデ	口縁部1/12	
033	0094	SD01	弥生土器	直口壺	12.4	-	-	7.5YR7/4 濃い黄橙	口縁部ヨコナデ、ナデ	口縁部ヨコナデ、体部板ナデ	口縁部1/6	
034	0098	SD01	弥生土器	甕	17.1	-	-	7.5YR7/4 濃い黄橙	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	頸部径1/6	
035	0095	SD01	弥生土器	甕	20.1	-	-	7.5YR7/3 濃い黄橙	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	口縁部1/6	
036	0102	SD01	弥生土器	甕	24.5	-	-	7.5YR6/4 濃い黄橙	口縁部ヨコナデ、体部タタキ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	口縁部1/12	
037	0085	SD01	弥生土器	鉢	-	-	-	5YR7/6橙	荒れて不明	ヘラケズリ	-	
038	0104	SD01	弥生土器	鉢	14.8	-	-	10YR8/3	口縁部ヨコナデ 1条擬凹線、体部ヘラミガキ	口縁部・体部ヘラミガキ	口縁部1/6	
039	0107	SD01	弥生土器	鉢	15.5	-	-	5YR6/6橙	ヘラミガキ、口縁部擬凹線1条	ヘラミガキ	1/4	
040	0072	SD01	弥生土器	鉢	17.8	-	-	外面10YR7/2鈍い黄橙、内面10YR2/1黒	タタキ→ヘラミガキ	ヘラケズリ→ハケ、スス付着	口縁部1/12	
041	0081	SD01	弥生土器	鉢	9.8	-	-	7.5YR6/4 濃い黄橙	ナデ	ハケ	1/4	
042	0084	SD01	弥生土器	鉢	5.5	3.5	3.6	5YR6/6橙	ハケ→ヘラミガキ	ヘラケズリ→ナデ	口縁部1/2	
043	0086	SD01	弥生土器	鉢	13.0	4.8	6.2	10YR [8/3]浅黄橙	ナデ	ナデ	底部完存 口縁部1/6	
044	0087	SD01	弥生土器	鉢	-	6.0	-	10YR8/3浅黄橙	ナデ	ハケ	底部2/3	
045	0082	SD01	弥生土器	脚部	-	7.1	-	7.5YR7/3 濃い黄橙	ナデ	ハケ→ナデ	底部1/4	
046	0083	SD01	弥生土器	脚部	-	5.3	-	7.5YR7/3 濃い黄橙	ナデ	ナデ、脚部内面指頭圧痕	底部完存	
047	0080	SD01	弥生土器	脚部	-	26.6	-	10YR8/3浅黄橙	ヘラミガキ、黒斑	ハケ→ヘラミガキ	底部1/12	
048	0079	SD01	弥生土器	脚部	-	18.5	-	7.5YR6/4 濃い黄橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ		
049	0077	SD01	弥生土器	底部	-	3.5	-	10YR6/2灰黄褐	ハケ	ヘラケズリ	底部1/2	
050	0076	SD01	弥生土器	底部	-	2.5	-	2.5YR5/6明赤褐	ハケ	ヘラケズリ	底部1/2	
051	0075	SD01	弥生土器	底部	-	3.0	-	10YR7/3 濃い黄橙	ナデ、指頭圧痕、底面スス	ハケ→ヘラケズリ	底部2/3	
052	0074	SD01	弥生土器	底部	-	4.1	-	10YR7/2 濃い黄橙	ナデ	ヘラケズリ	底部2/3	
053	0073	SD01	弥生土器	底部	-	3.7	-	10YR8/1 灰白	ナデ、底部穿孔（径4~11mm）、黒斑あり	ヘラケズリ	底部完存	
054	0042	SD02	須恵器	坏	13.1	9.5	2.6	N7/灰白	口縁部ヨコナデ、底部回転ヘラ切	口縁部ヨコナデ	口縁部1/12	
055	0043	SD02	須恵器	山茶碗	12.2	-	-	N6/	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12	
056	0041	SD02	須恵器	山茶碗	16.1	-	-	N6/灰	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12	
057	0044	SD02	須恵器	山茶碗	17.5	-	-	N6/灰	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12	

報告書 No.	実測 No.	出土場所	器 種		法 量 (cm)			色 調	成 形 ・ 調 整 等		残 存	備 考	
			種 類	器 種	口径	底径	高さ		外 面				内 面
058	0045	SD02	須恵器	山茶碗	18.6	-	-	N7/灰白	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12		
059	0110	SD02	須恵器	甕	-	-	-	N6/灰	タタキ	ナデ	-		
060	0040	SD02	土師器	土鍋	26.9	-	-	5YR6/6橙	口縁部ヨコナデ、体部タタキ、 全面スス付着	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部1/6		
061	0039	SD03	磁器	小坏	8.3	-	-	N8/灰白	輪宝文	口縁端部口錆	口縁部1/6		
062	0033	SD03	須恵器	山茶碗	14.6	-	-	N5/灰	ヨコナデ	ヨコナデ			
063	0034	SD03	須恵器	山茶碗	14.5	-	-	N6/灰	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12		
064	0038	SD03	磁器	碗	-	4.4	-	10Y8/1灰白	体部 草花文(牡丹)、腰部 1条園 線、高台 2条園線、壺付 露胎	底部 1条園線 渦福文	底部1/2		
065	0036	SD03	須恵器	鉢	-	-	-	N6/灰	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12以下		
066	0032	SD03	土師器	土鍋	28.0	-	-	5YR6/4にぶい褐	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12		
067	0035	SD03	土師器	土鍋	25.3	-	-	7.5YR6/4にぶい橙	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12		
068	0037	SD04	青磁	碗	-	-	-	10 G Y 明緑灰	草花文?	草花文?			
069	0017	SK01	磁器	柴付碗?	-	4.1	-	N8/灰白	腰部、高台外に面直線文	草花文?	底部1/2		
070	0019	SK01	須恵器	蓋	14.3	-	-	N8/灰	天井部回転ヘラ削り→ナデ、口 縁部ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/4		
071	0021	SK01	須恵器	碗	-	7.8	-	N7/灰白	ヨコナデ、底部回転ヘラ切	ヨコナデ	1/6		
072	0022	SK01	須恵器	山茶碗	-	6.8	-	N5/灰	ヨコナデ、底部回転糸切	ヨコナデ	底部1/12		
073	0018	SK01	須恵器	山茶碗	17.1	-	-	N6/灰	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12		
074	0020	SK01	須恵器	鉢	36.4	-	-	N6/灰、口縁部外 面N3/暗灰	ヨコナデ	ヨコナデ			
075	117	SK01	土師器	土鍋	-	-	-	2.5YR5/6赤褐	格子タタキ	ナデ	-		
076	0016	SK01	土師器	土鍋	20.3	-	-	外面2.5YR6/4にぶ い橙、内面7.5YR 6/4にぶい橙	口縁部ヨコナデ、体部タタキ	ヨコナデ	口縁部1/6		
077	118	SK01	丹波焼	甕	-	-	-	7.5YR4/3褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	-		
078	0029	SD05	須恵器	山茶碗	14.5	-	-	N6/灰	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12		
079	0030	SK02	須恵器	山茶碗	15.4	-	-	N7/灰白	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12		
080	0024	SK02	土師器	羽釜	19.0	-	-	7.5YR7/4にぶい橙	口縁部ヨコナデ、体部タタキ	口縁部ヨコナデ、体部ハケ8本/1cm	口縁部1/6		
081	0028	SD5-SK02	土師器	羽釜	23.8	-	-	7.5YR7/6橙	口縁部ヨコナデ、体部タタキ	口縁部ヨコナデ、体部ハケ (11本/1cm)	口縁部1/4		
082	0025	SK02	土師器	土鍋	27.9	-	-	10YR5/4にぶい黄褐	口縁部ヨコナデ、体部タタキ、 スス付着	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部1/12		
083	0023	SK02	土師器	小皿	9.3	-	-	7.5YR7/3にぶい橙	ナデ	ナデ	口縁部1/4		
084	0031	SD05	土師器	小皿	11.0	6.1	-	7.5YR6/3鈍い褐	ナデ、指頭圧痕	ナデ	口縁部1/6		
085	0026	SD5-SK02	丹波焼	播鉢	32.7	-	-	2.5YR4/3にぶい 赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ、播日	口縁部1/12	唐津模倣	
086	0027	SK02	瀬戸美野焼	卸皿	-	4.7	-	N7/灰白	底部回転糸切	卸日	底部1/4		
087	0111	SK02	丹波焼	甕	42.6	-	-	5/6明赤褐色	ナデ	指頭圧痕 (指摺り)	口縁部1/3	0112と同一個体 ひずみのため接合不可	
088	0112	SK02	丹波焼	甕	-	23.6	-	5/6明赤褐色	ナデ	ナデ	底部完形	0111と同一個体 ひずみのため接合不可	
089	0011	P10	土師器	小皿	6.8	4.0	2.9	10YR7/3鈍い黄橙	未調整もしくは弱いナデ	ナデ	口縁部1/4		
090	0113	P61	須恵器	甕	-	-	-	N8/灰白～N4/灰	タタキ	ナデ 青海波残る	-		
091	0012	P16	須恵器	山茶碗	16.7	-	-	N6/灰	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12		
092	0001	P76	土師器	小皿	7.2	3.3	1.2		未調整	ナデ	4/1		
093	0007	P89	須恵器	山茶碗	-	6.4	-	5PB6/1青灰	ヨコナデ、底部回転糸切り、体 部墨書あり (判読不明)	ヨコナデ+仕上げナデ	底部3/4		
094	0006	P96	土師器	土鍋	21.7	-	-	外面 10YR7/4 鈍い黄橙 内面 5YR7/6橙	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12		
095	0003	P96	土師器	土鍋	23.1	-	-	7.5YR5/1褐灰	口縁部ヨコナデ、体部タタキ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ 青 海波のあて具痕	口縁部1/6	硬質	
096	0060	包含層	須恵器	山茶碗	-	5.3	-	10Y8/1灰白	回転糸切	ヨコナデ	底部完存		
097	0059	包含層	土師器	小皿	10.2	-	-	5YR6/4にぶい橙	未調整	ナデ	口縁部1/12		
098	0065	包含層	土師器	土鍋	24.5	-	-	外面5PB7/1明青灰、 内面7.5YR7/3にぶ い橙	口縁部ヨコナデ、体部タタキ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部1/12		
099	0057	包含層	土師器	土鍋	26.2	-	-	5YR6/6橙	口縁部ヨコナデ、体部タタキ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部1/12		
100	0055	包含層	土師器	土鍋	28.8	-	-	2.5YR6/6	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12		
101	0056	包含層	土師器	甕	21.5	-	-	10YR7/4にぶい橙	ヨコナデ、スス付着	ヨコナデ	口縁部1/12		
102	0058	包含層	土師器	羽釜	24.6	-	-	7.5YR7/6橙	口縁部ヨコナデ、体部タタキ	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	口縁部1/12		
103	0066	包含層	須恵器	山茶碗	18.4	-	-	N6/灰	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12		
104	0068	包含層	須恵器	山茶碗	18.8	-	-	5PB4/1暗青灰	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12		
105	0067	包含層	須恵器	山茶碗	15.2	-	-	5B6/1青灰	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12		
106	0070	包含層	須恵器	山茶碗	19.3	-	-	N6/灰	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12		
107	0069	包含層	須恵器	山茶碗	-	7.0	-	N7/灰白	底部回転ヘラケズリ	ヨコナデ	底部1/6		
108	0063	包含層	須恵器	鉢	-	-	-	N5/灰	ヨコナデ	ヨコナデ	-		
109	0064	包含層	須恵器	鉢	-	-	-	N6/灰	ヨコナデ	ヨコナデ			
110	0061	包含層	須恵器	鉢	35.4	-	-	N6/灰	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/24		
111	0062	包含層	須恵器	甕	49.0	-	-	N6/灰	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部1/12		
112	0071	包含層	須恵器	甕	41.4	-	-	10YR4/3にぶい黄褐	口縁部ヨコナデ、体部格子タタキ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部1/12		

## Ⅳ 付章 安坂・城の堀遺跡Ⅴの発掘調査概要

### 1. はじめに

安坂・城の堀遺跡第3区、第5区B・Cの発掘調査は、中町南線建設に伴う事前調査として実施した。この第3区と第5区B調査区の間は、東西に約450m離れている。

なお、安坂・城の堀遺跡については圃場整備事業や道路建設に係る事前調査として、数次の発掘調査が実施されている。本会報告以外の調査成果については、下記の報告書が刊行されている。参照していただきたい。

- ・『安坂・城の堀遺跡』（中町文化財報告16）第1～5区の調査概要
- ・『安坂・城の堀遺跡Ⅱ』（中町文化財報告23）第4区B・第6区・第7区の調査成果
- ・『安坂・城の堀遺跡Ⅲ』（中町文化財報告34）第2区・第4区・第5区Aの調査成果
- ・『安坂・城の堀遺跡Ⅳ』（多可町文化財報告3）圃場整備事業に係る第1区及び確認調査成果

### 1) 調査方法及び調査体制

#### 調査方法

安坂・城の堀遺跡については、確認調査の結果をふまえ事業担当課との協議の結果、遺構の保存に困難が伴う部分について、記録保存のための本発掘調査を実施した。

安坂・城の堀遺跡第3区本調査 1994（平成6）年1月31日～3月4日

安坂・城の堀遺跡第5区本調査 1996（平成8）年2月13日～4月22日

#### 調査体制

発掘・整理調査ともに、多可町教育委員会（旧中町教育委員会）が主体となり実施した。

《発掘・整理作業》発掘・整理担当 宮原文隆

補 助 員 笹倉崇司、早崎喜代美、藤浦 薫、藤原 敏

《発掘・整理作業従事者》

秋田武俊、浦川和宏、大江淳子、奥村五十子、荻野浩三、神月さやか、越川芳明、小林千代美、笹倉道昭、篠原宏幸、高田健史、高田好幸、玉田 真、土田昌二、徳原 巖、中山林次、橋本京子、橋本裕司、橋本英俊、福井順子、藤井公仁子、藤井進二、藤井豊次、藤田侑子、藤森竹二、藤原慶一、松田優子、丸岡栄一、迎山耕三、安平幸司、山本 学、吉川定次、吉田衣里、吉田志津雄、吉田修二、吉田秀信、吉田正雄、吉田幸正

《調査・整理作業協力者、協力機関》（敬称略）

小川真理子、岸本一郎、絹川和明、立花 聡、永井信弘、西田 猛、藤本嘉信、森 幸三、  
森下大輔、安平勝利、渡辺 昇

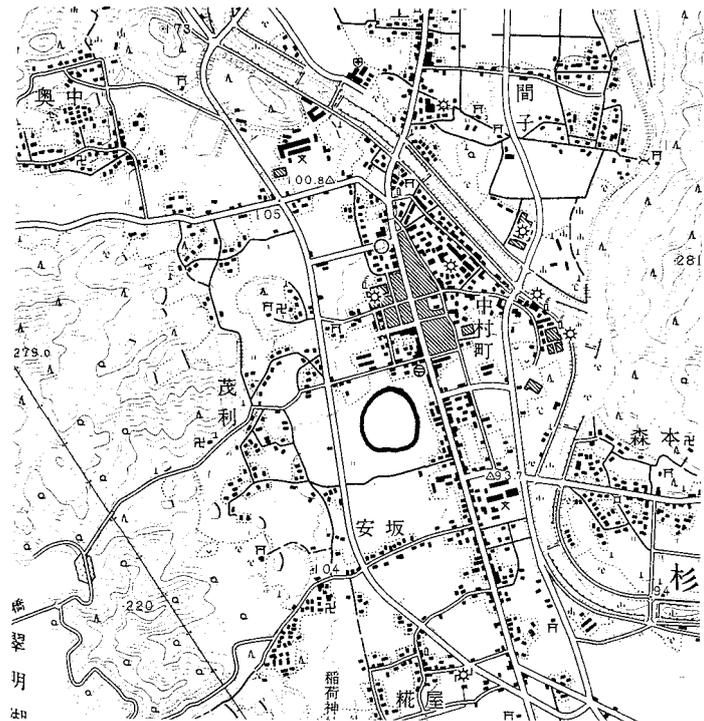
兵庫県教育委員会文化財室、多可町（旧中町役場建設課）

## 2) 立地

安坂・城の堀遺跡は、中区中央平野のほぼ中央に位置している。この中央平野の西側には、高岸村の標高 402.6m から南方へ奥中・茂利・安坂・糞屋村の標高 262.0m へ徐々に低下させる山列が続いている。この山列の裾部は、緩斜面となり比較的緩やかに中央平野に至っている。

安坂・茂利村から糞屋・坂本村に繋がるこのような緩斜面には、火山岩の流紋岩が風化して長石等が粘土化し堆積したとされる灰白～淡青白色粘土の分布が広く見受けられる。この粘土は第三紀に形成されたものと考えられている。

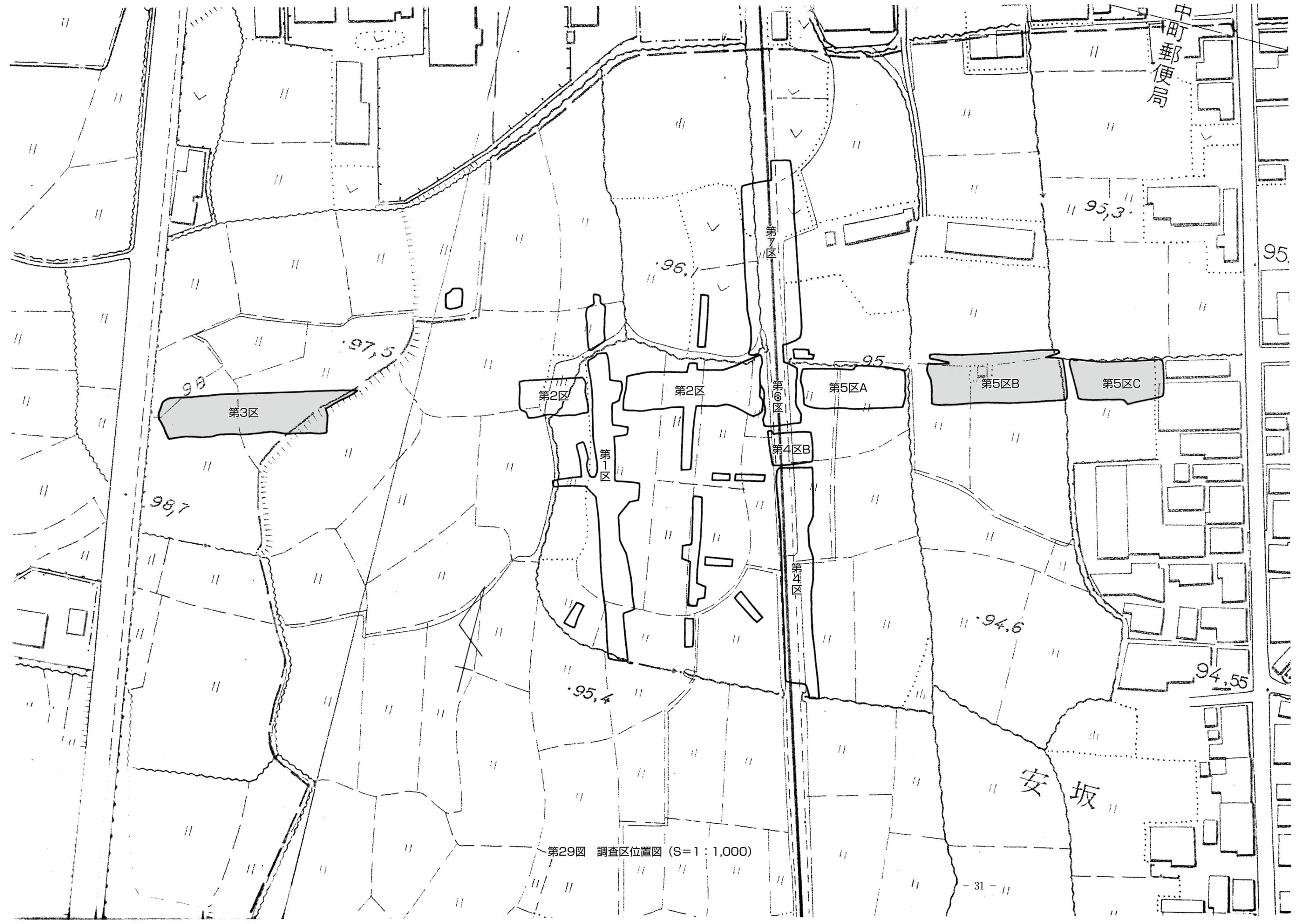
第3区は西から延びる緩斜面内に位置し、西端の標高約 97m、東端約 96m を測る。第5区 B・C は報告済みの第5区 A 地区が南北に伸びる杉原川旧河道内の自然堤防上に位置すると考えられ、標高は 94.2～94.3 m を測る。



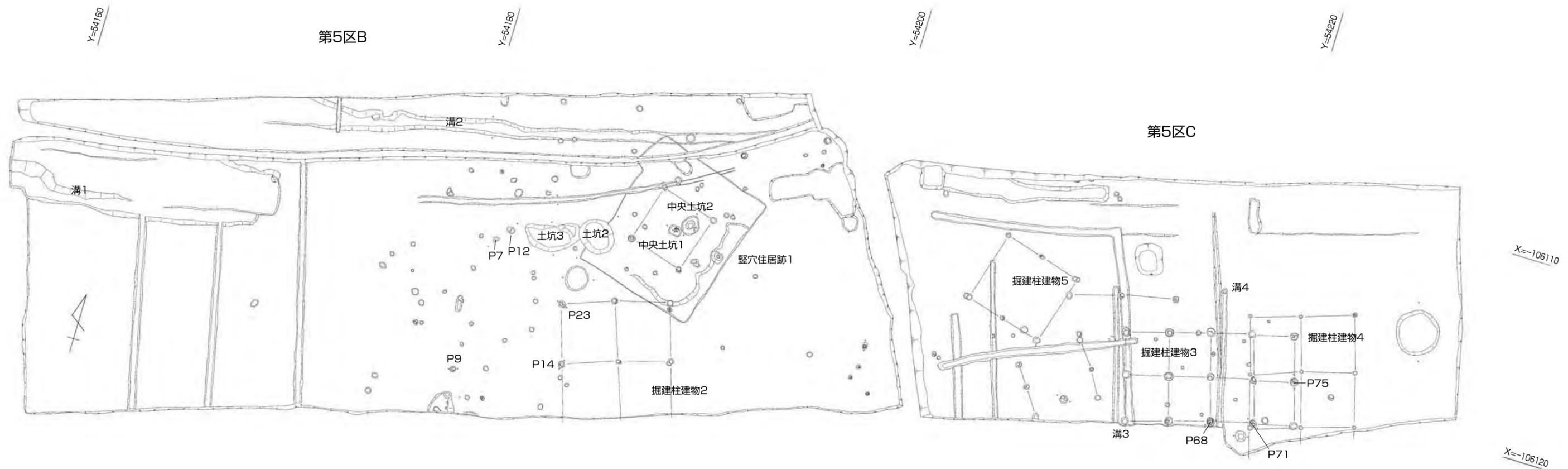
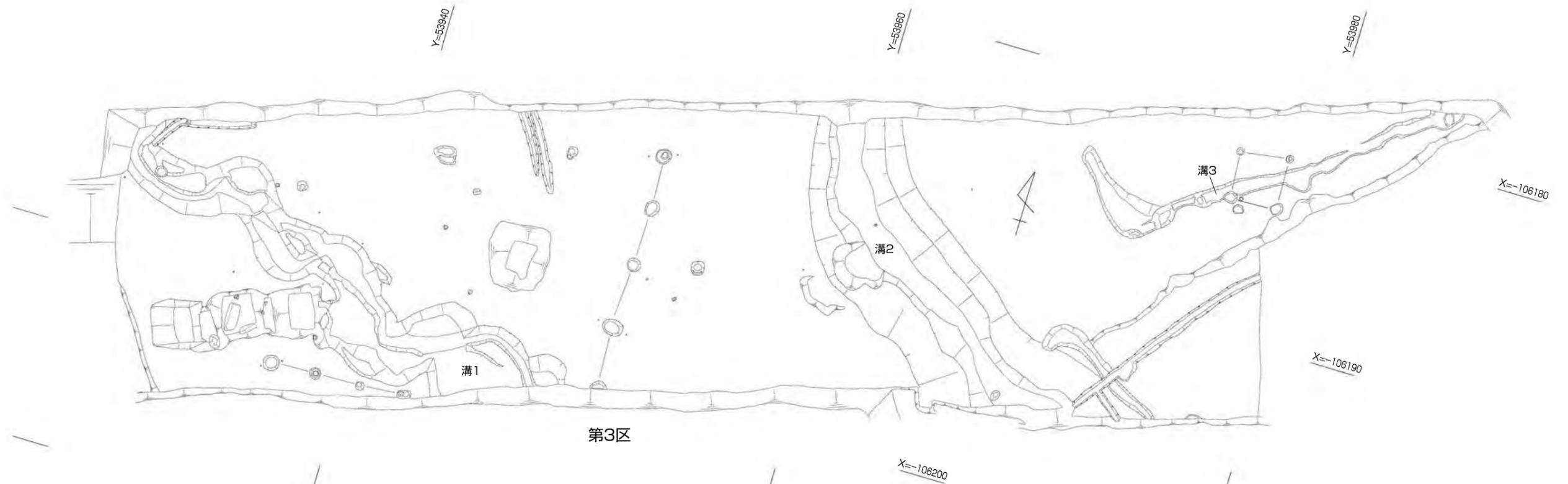
第28図 位置図 (S=1:25,000)

### 《参考文献》

- ・『中町誌』1954 中町役場
- ・『中町史』1991 中町役場



第29図 調査区位置図 (S=1 : 1,000)



第30图 遺構配置図

## 2. 安坂・城の堀遺跡第3区調査区の概要

第3区調査区は、最大長約60m、幅約14mを測る。当調査区で検出された遺構は、溝がほとんどを占め、他にピット列が確認されたにすぎない。

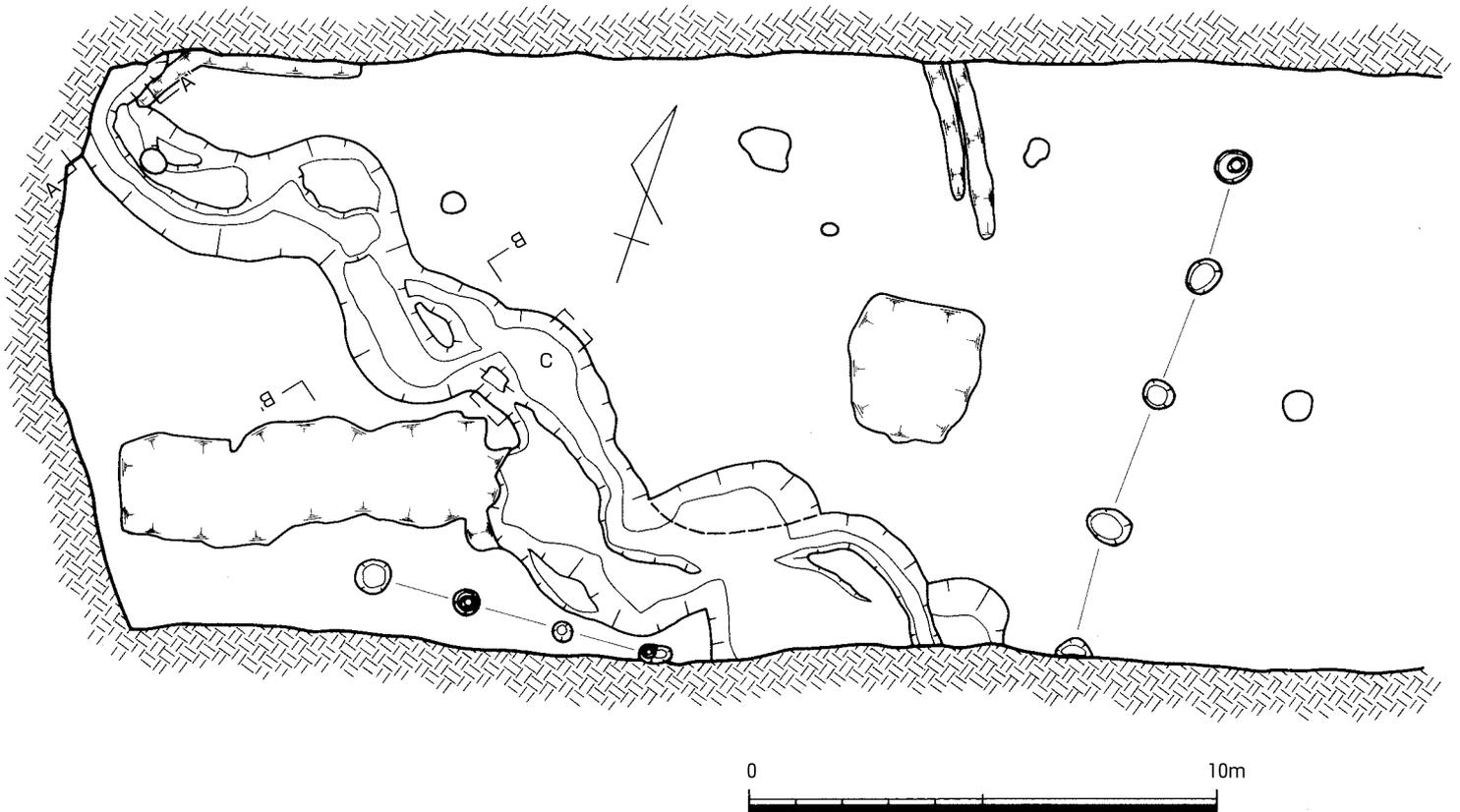
### 1) 溝

#### 溝1

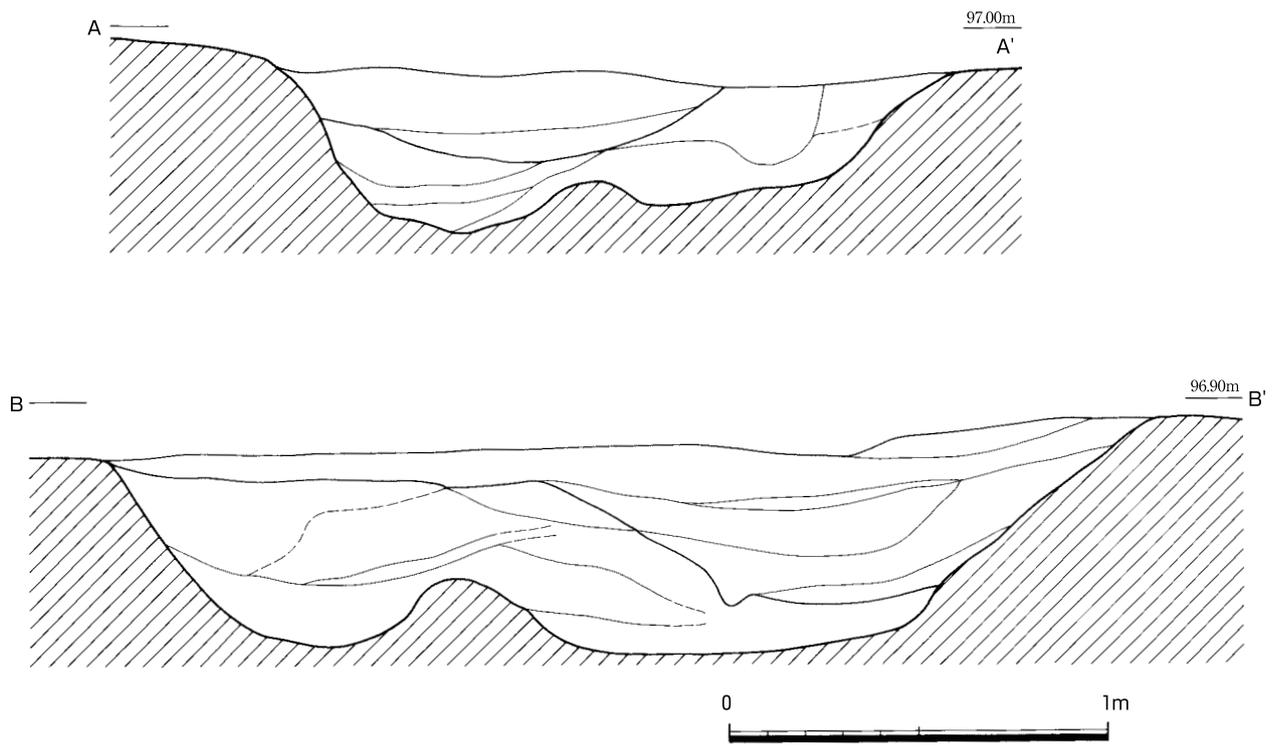
溝1は調査区北西隅から南東に蛇行しつつ流れる溝で、幅2～3m、深さ0.5～0.8mを測る。埋土は上層が褐灰色砂質土と掘り直し部の炭等を含む黒褐色粘質土である。下層は灰黄色砂層を中心としたラミナ状を呈している。また溝の法面及び底面の状況は凹凸が顕著で平滑でなく、埋土の状況を含めて鑑みると、比較的多くの水の流れたことを示している。

出土遺物を見ると、上層では若干の奈良時代～平安時代後期の土器(3-41・42)を含むものの、ほとんどが弥生時代後期後半を中心とする遺物である。下層の出土土器も弥生時代後期後半頃のものであり、上層と大きく変わらない。

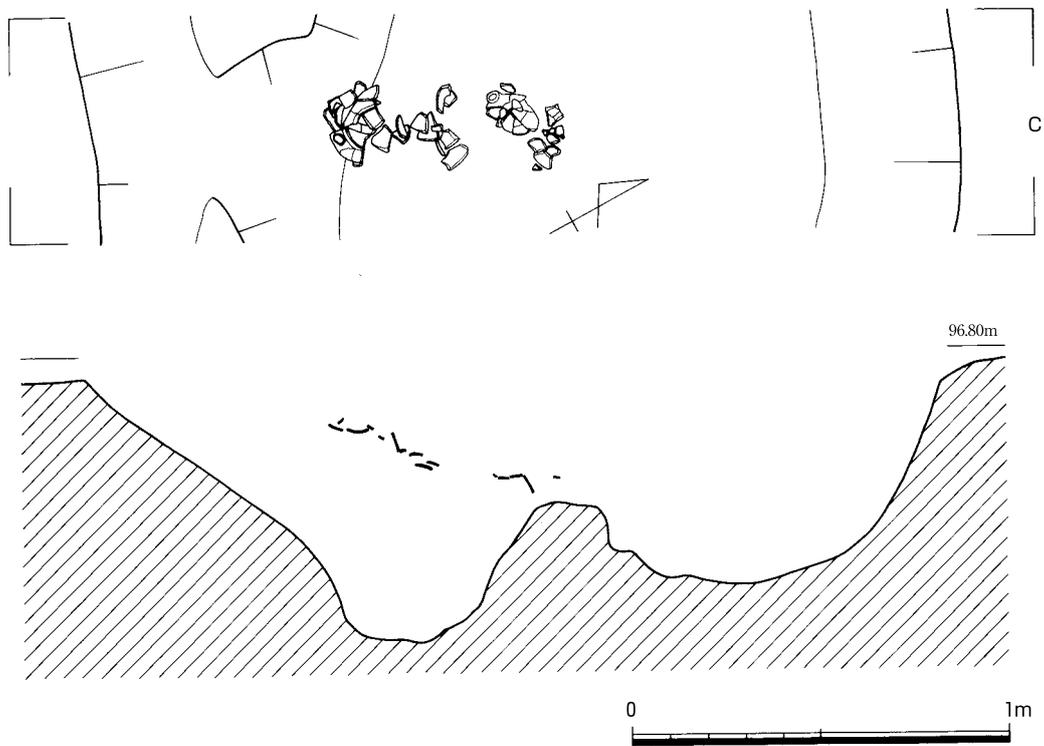
(3-22)は内外面を丁寧に鏡磨きを施し、頸部との境界に数条の沈線を巡らせている。この形状からは、北陸地方との関わりを窺わせる。(3-S1)の砥石は凝灰岩製で破損が著しい。(3-S2)の砥石は細粒砂岩製で下部を欠損するが、広端面は細かい条痕が看取できよく使用されている。弥生時代後期の所産と考えられるが、どのようなものを対象として研磨したのか興味を持たれる。



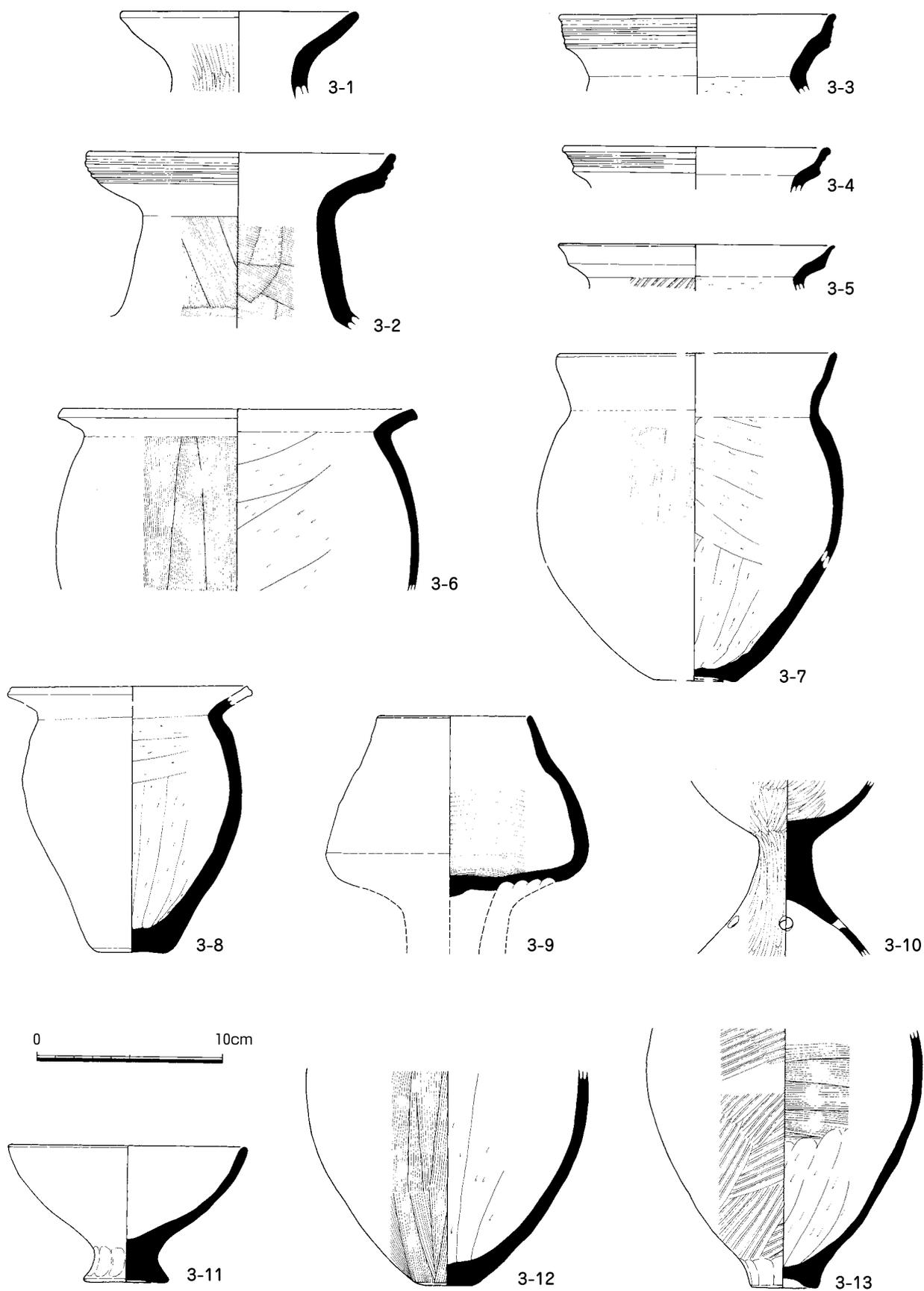
第31図 溝1



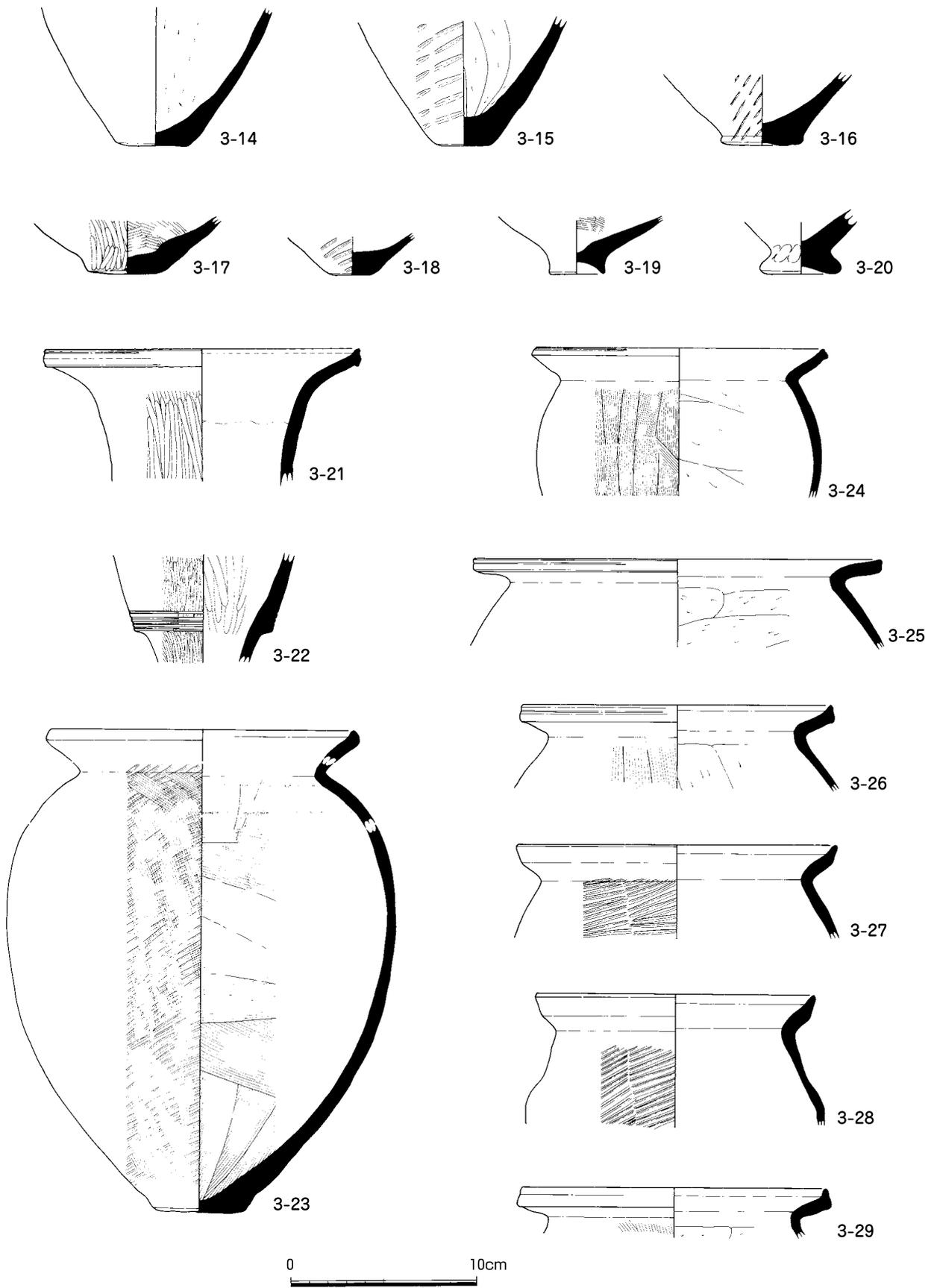
第32图 沟1 断面图



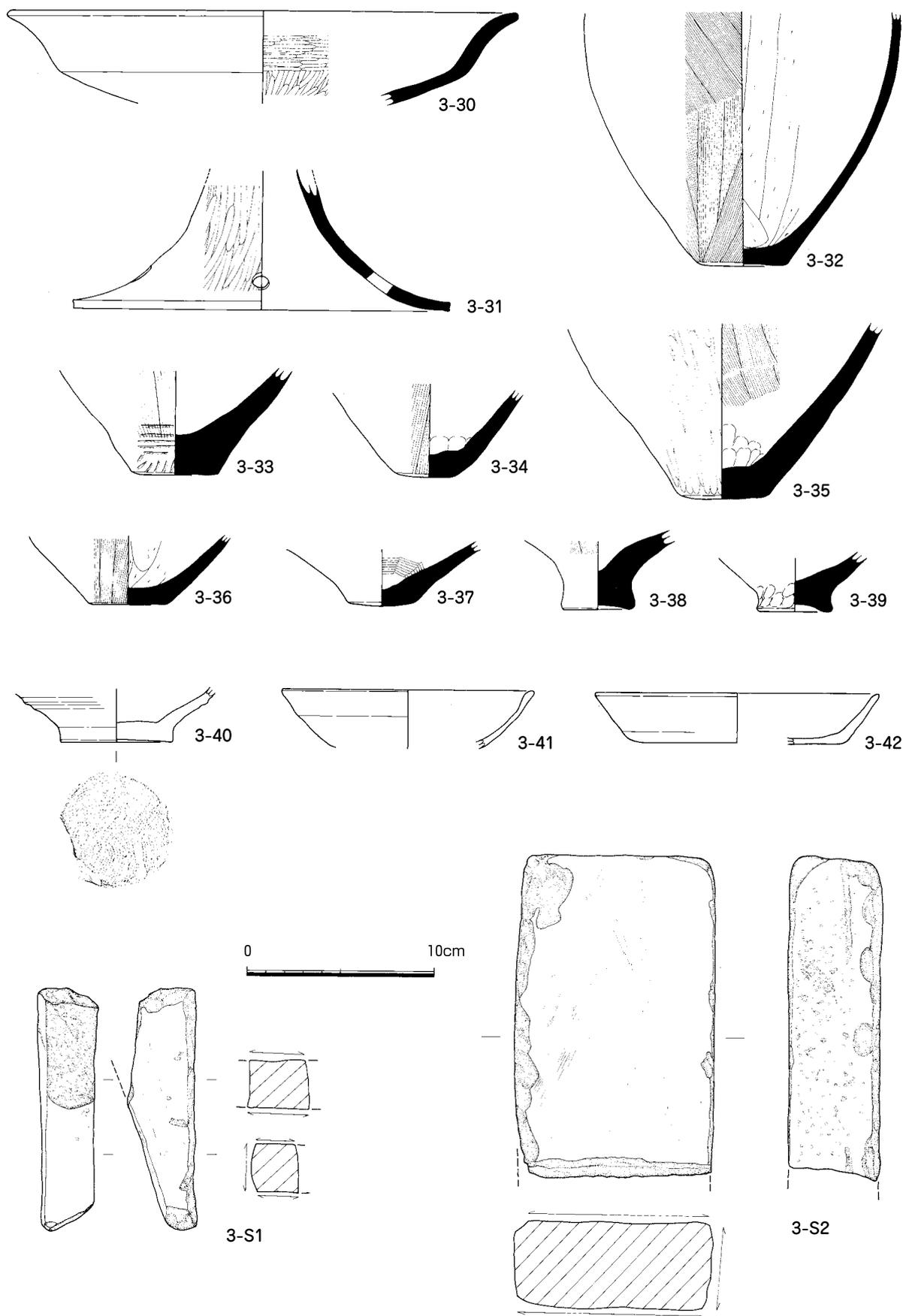
第33图 沟1 土器出土状况



第34図 溝1 出土遺物①



第35図 溝1 出土遺物②



第36図 溝1 出土遺物③

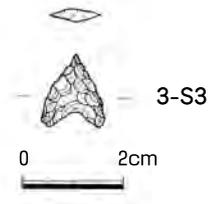
### 溝2

溝2は調査区やや東よりに位置し、北から南東に流路を有する溝で、幅4～5m、深さ0.4～0.6mを測る。埋土は大きく3層に分層でき、上層-黒褐色粘質土、中層-オリーブ黒色～黒粘質土、下層-灰黄褐色砂層である。

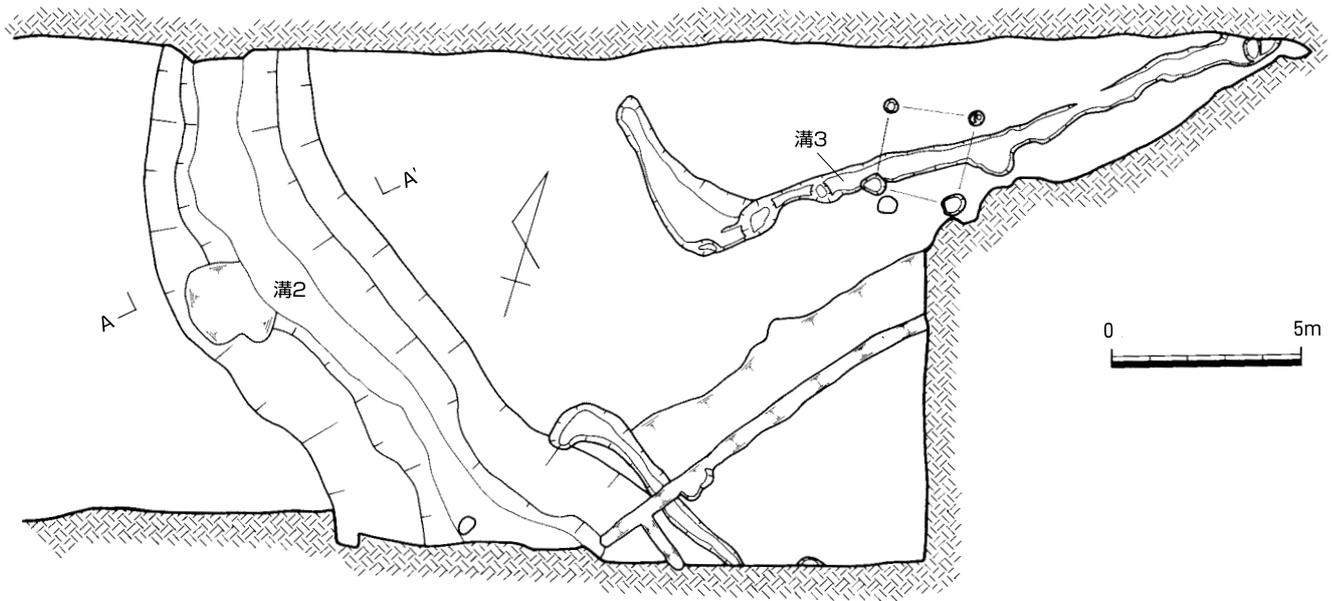
出土遺物は上層では弥生時代後期～平安時代末頃の土器が混在するが、中層以下においては弥生時代後期頃の土器に限られる。このような状況からこの溝2は、溝1とほぼ同時期の弥生時代後期後半頃の所産と考えられる。

### 溝3

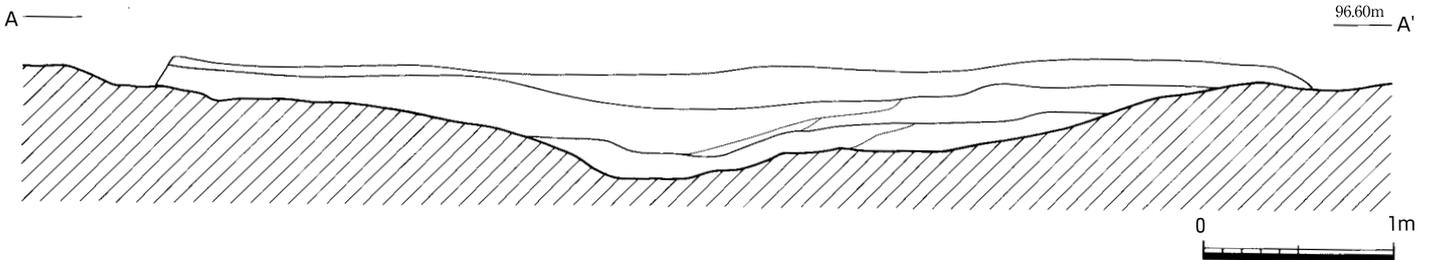
溝3は調査区北東隅から南西に延びる溝で、長さ約8m、幅0.4～0.6m、深さ約0.1mを測る。溝内からは弥生時代後期～中世の土器小片とサヌカイト製石鏃(3-S3)が出土している。この石鏃は、小型の凹基式であることから縄文時代に属する可能性がある。



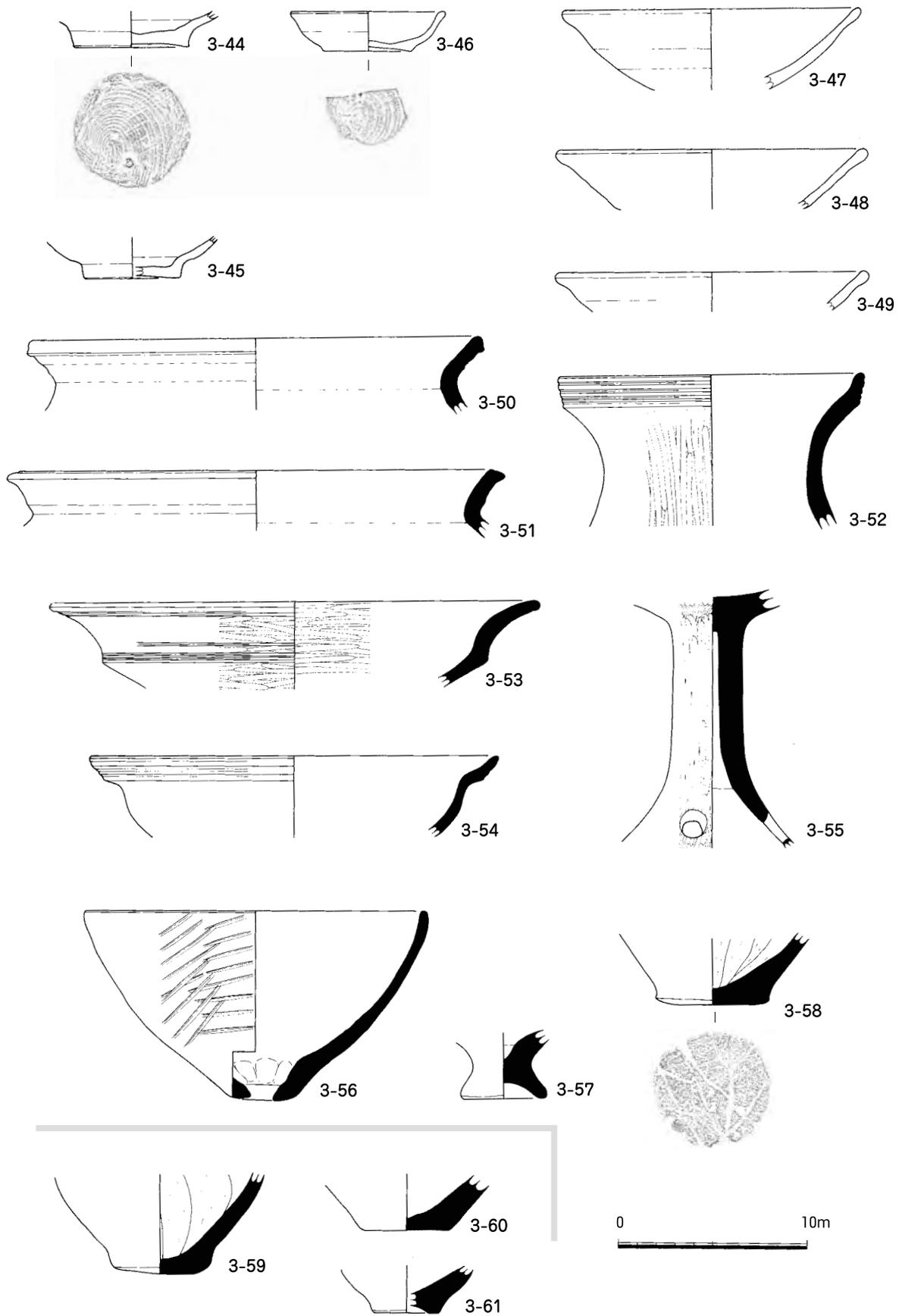
第37図 溝3 出土石器



第38図 溝2・3



第39図 溝2 断面図



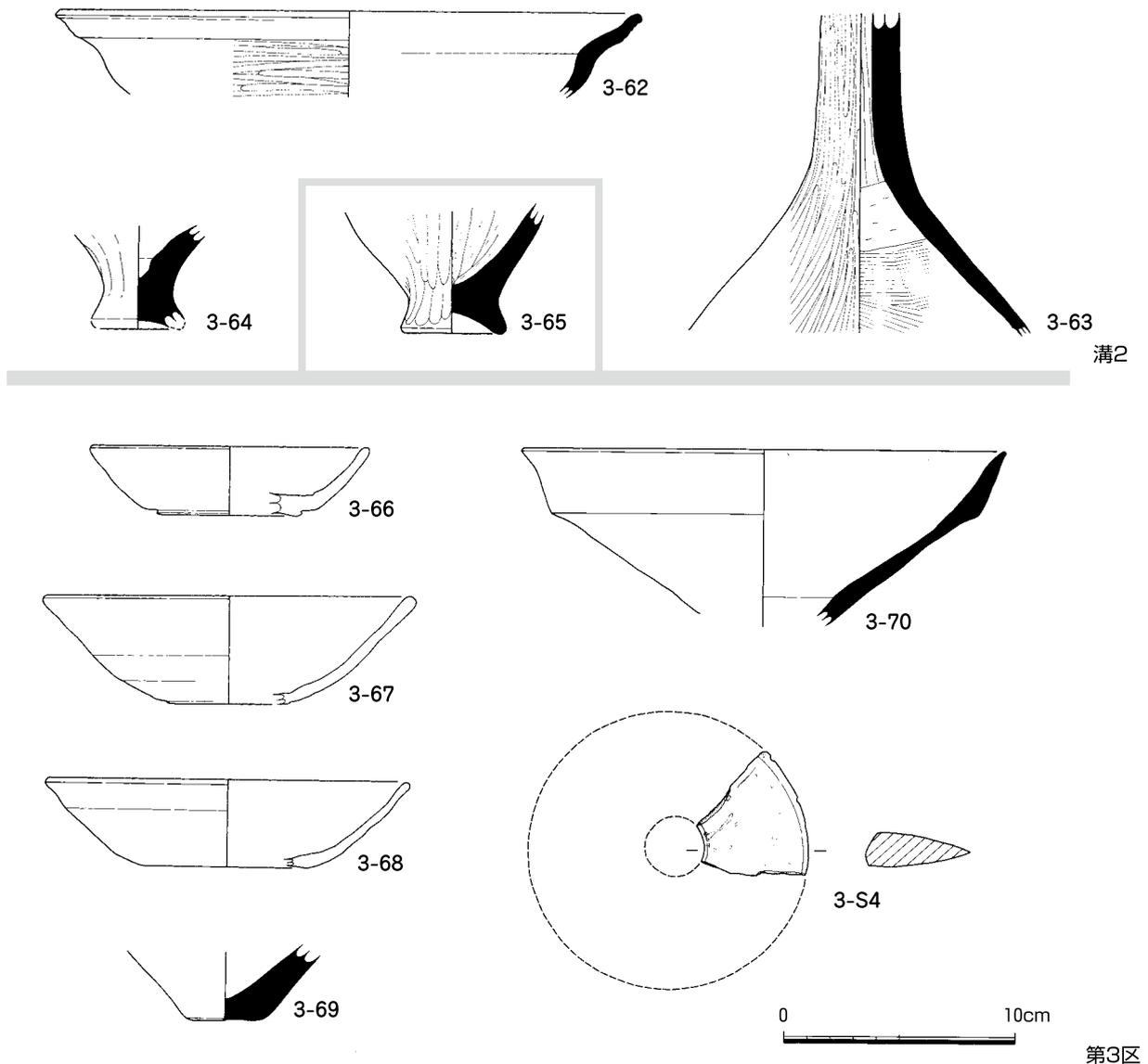
第40図 溝2 出土遺物

## 2) その他の遺構と遺物

溝以外の遺構では、L字形柱穴群（第30図上）がある。調査区ほぼ中央を南北に、柱間約2.6mを有して5基の柱穴が並んでいる。この南北柱穴列と直交するように東西に並ぶ柱穴群が、柱間約2.2mで4基が並列する。これらがコーナーを有して直交するのは、調査区外に位置するため、明らかでない。また、現状で確認できたのはこのL字状を呈する柱穴列のみであり、これらが建物を構成するものとするのは難しく、柵列等を考慮すべきであろう。

これらの柱穴の規模は、径40～90cm、深さ20～30cmを測る。埋土は黒色粘質土と灰白色砂層が混じるブロック層が基本で、人為的に埋め戻した可能性がある。出土した遺物は、小片のため明確な時期の決め手がないが、一部の紛れ込みと推定されるものを除けば、古代以前の所産と考えられる。

他に溝3と交差する1×1間（1.8×2.5m）の柱穴群（第30図上）がある。柱穴の規模は35



第41図 溝2及び第3区出土遺物

～ 50 cm、深さ 15 ～ 40 cmを測る。出土した遺物は、古代以前と考えられる土器小片のみである。

遺構に伴わない出土遺物では、環状石斧（3-S4）がある。刃部には緩やかな稜が確認できる。色調は灰オリーブ色を呈し、泥岩製で全体を丁寧に研磨している。特に、木材等を差し込んだとされる内径部には、擦れによる研磨が顕著で光沢を帯びている。最大厚 1.4 cmを測り、外径約 12 cm、内径 2.5 cmの環状に復元できる。

### 3) 安坂・城の堀遺跡第3区小結

安坂・城の堀遺跡第3区の調査地区は、地区としては茂利・大將軍遺跡地区内に該当するが、これまでの調査経緯から安坂・城の堀遺跡の第3区とした。平成3年度の圃場整備に係る調査<sup>1)</sup>では、茂利・大將軍遺跡の T-3 において弥生時代後期後半頃の遺物を包含する溝 1 が検出されており、当調査第3区の溝 1 の出土遺物及び堆積状況とも通じることから、同一の溝である可能性が高い。

今回の調査では、検出されたのは溝と柱穴群のみで、弥生時代後期を中心とする時期であることから、時代的にやや偏りがあるように見受けられる。しかしながら圃場整備に係る調査成果でも明らかなおり、中世の遺構・遺物が多量に確認されていることから、構居跡としての安坂・城の堀遺跡との関連をもって、この地区の歴史を考えなければならないと思われる。

1) 「坂本・丁田遺跡の調査」『安坂・北山田遺跡、坂本・丁田遺跡』中町文化財報告 8 中町教育委員会 1995

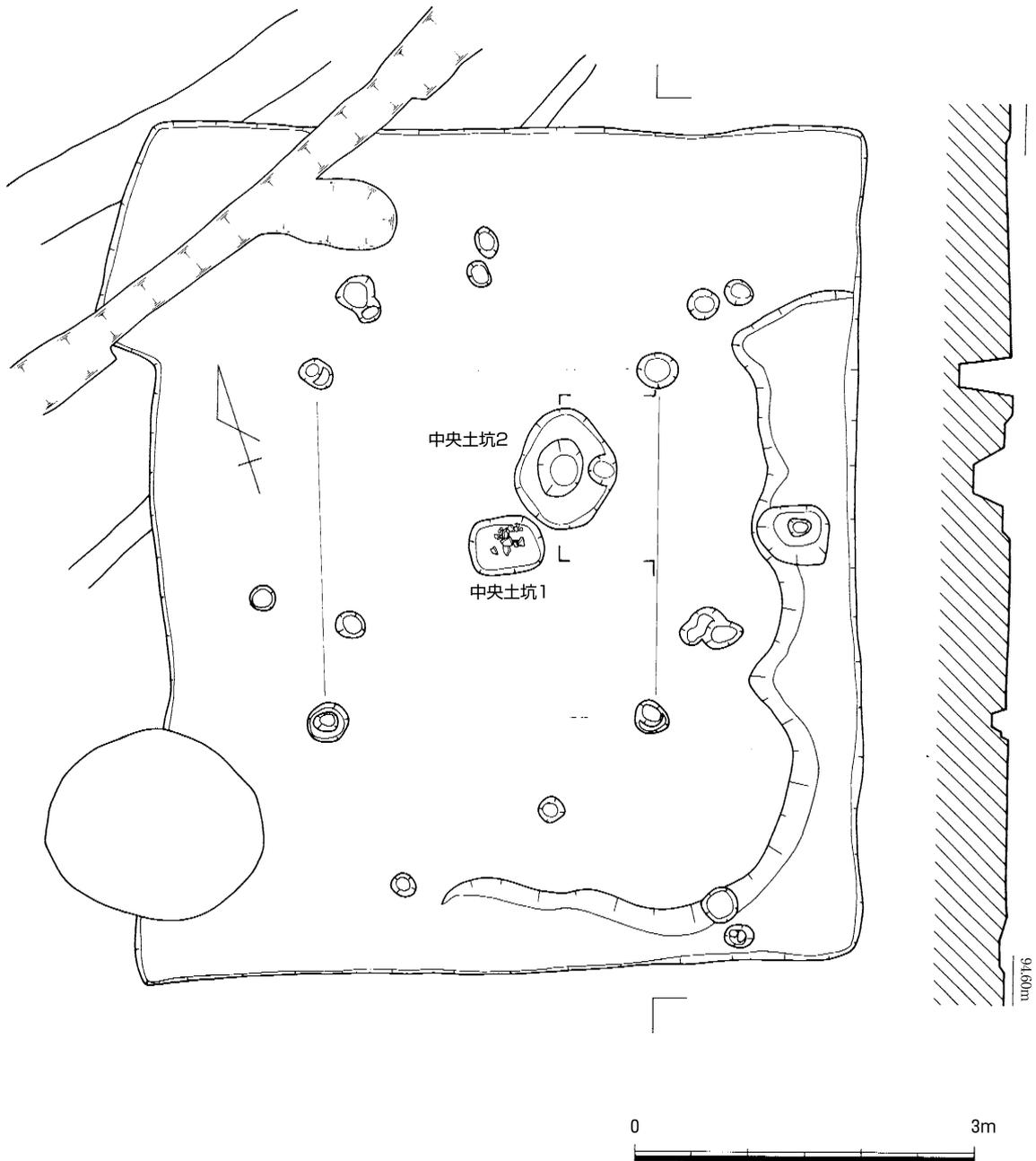
### 3. 安坂・城の堀遺跡第5区B・C調査区の概要

安坂・城の堀遺跡第5区は、町道中町南線と町道中町中央線とが交差した東側の中町南線側に該当する。なお、第5区Aの調査成果については『安坂・城の堀遺跡Ⅲ』で報告済である。ここではこの第5区A調査区の東側に続く第5区B・C調査区の調査成果について報告する。

第5区B調査区は幅約16m、長さ約44m、第5区C調査区は幅約13m、長さ約27mを測り、調査面積は約1,050㎡である。以下、主要な遺構について概述する。

#### 1) 竪穴住居跡1

第5区B調査区東よりで、1棟の方形竪穴住居跡が検出された。一辺が南北約7.5m、東西約



第42図 竪穴住居跡1

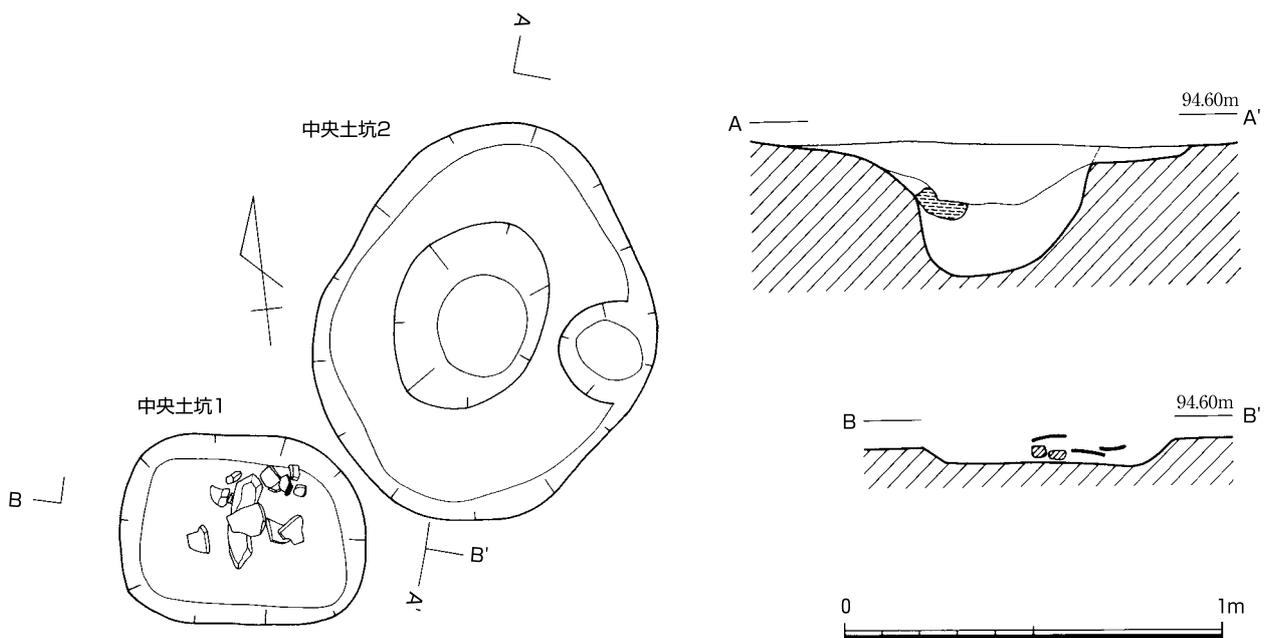
6.0mを測り、北西隅は張り出し部が存在し、出入口状を呈する。遺構検出面と竪穴住居跡床面の高低差は5cm以下と浅い。確実な周壁溝は検出できなかった。

一方東辺～南辺にかけては、幅約70cm、深さ20cmを測るL字状の溝が竪穴住居跡周壁に沿って存在している。この溝の底面のあり方は、小さな凹凸の起伏に富んでいることから、住居掘削時の状況を示しているものと考えられる。また、溝の埋土は地山の白色系粘土と汚れた黒色粘質土がブロック状に混じることから、住居の床面を平滑にするために意図的に埋め込まれたと考えられる。

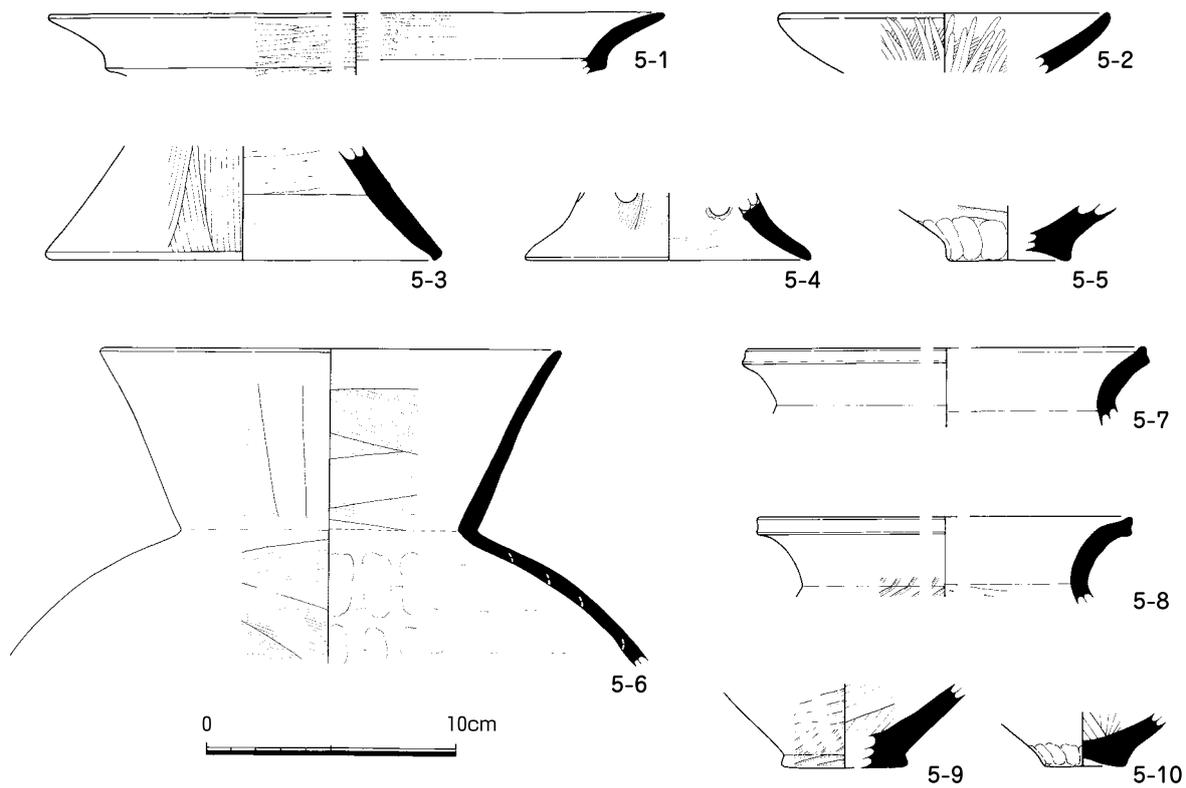
このような竪穴住居跡の床面に細かい凹凸の痕跡が見受けられた例は、坂本・丁田遺跡 T-6で検出された7世紀代の竪穴住居跡でも同様に確認されている<sup>1)</sup>。これらの痕跡は竪穴住居を建設する際に使用された鋤等の耕具による掘削痕と推定され、特に地山面が粘土質の場合に遺存しやすい傾向にあると言えよう。

竪穴住居跡の主柱穴は4本で構成される。径は25～35cmであるが、深さは45～60cmと深く掘り込まれている。この住居跡のほぼ中央には隅丸方形で50×65cm、深さ約5cm測る中央土坑1が位置し、その東に隣接するように85×110cm、深さ約35cm測る二段掘りを呈する不整形の中央土坑2が存在している。中央土坑2の埋土は上層が黒色粘質土、下層が地山の白色系粘土と褐灰色粘質土のブロック層で焼土塊が混じっている。

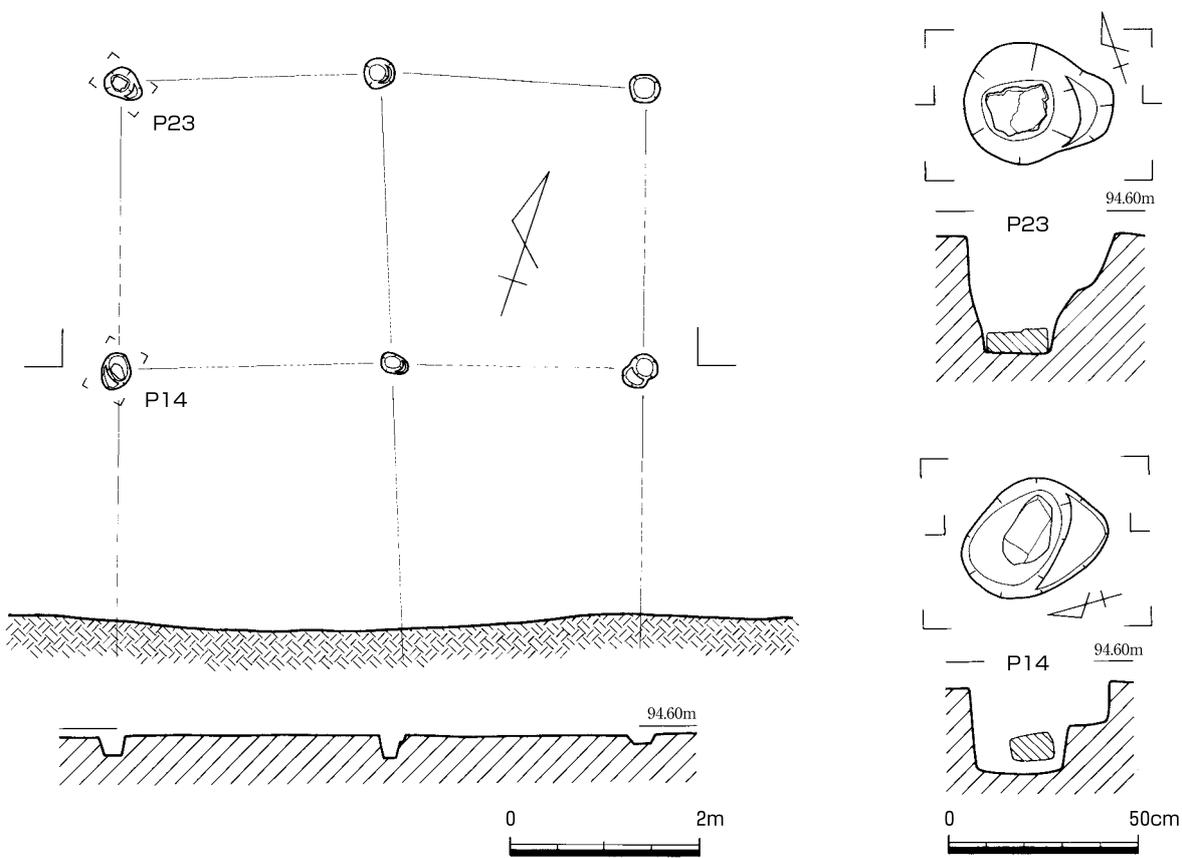
住居跡自体の遺存状況が良くないことから、埋土より出土した遺物は少なく、図化できたのは高坏や甕等の破片の5点(5-1～5)である。また、中央土坑1では壺(5-6)、中央土坑2では甕(5-7～10)が出土している。若干の時期差を包含していると思われる、弥生時代後期後半～古墳時代前半の所産である。壺(5-6)は最も新しい傾向を示す。



第43図 中央土坑1・2



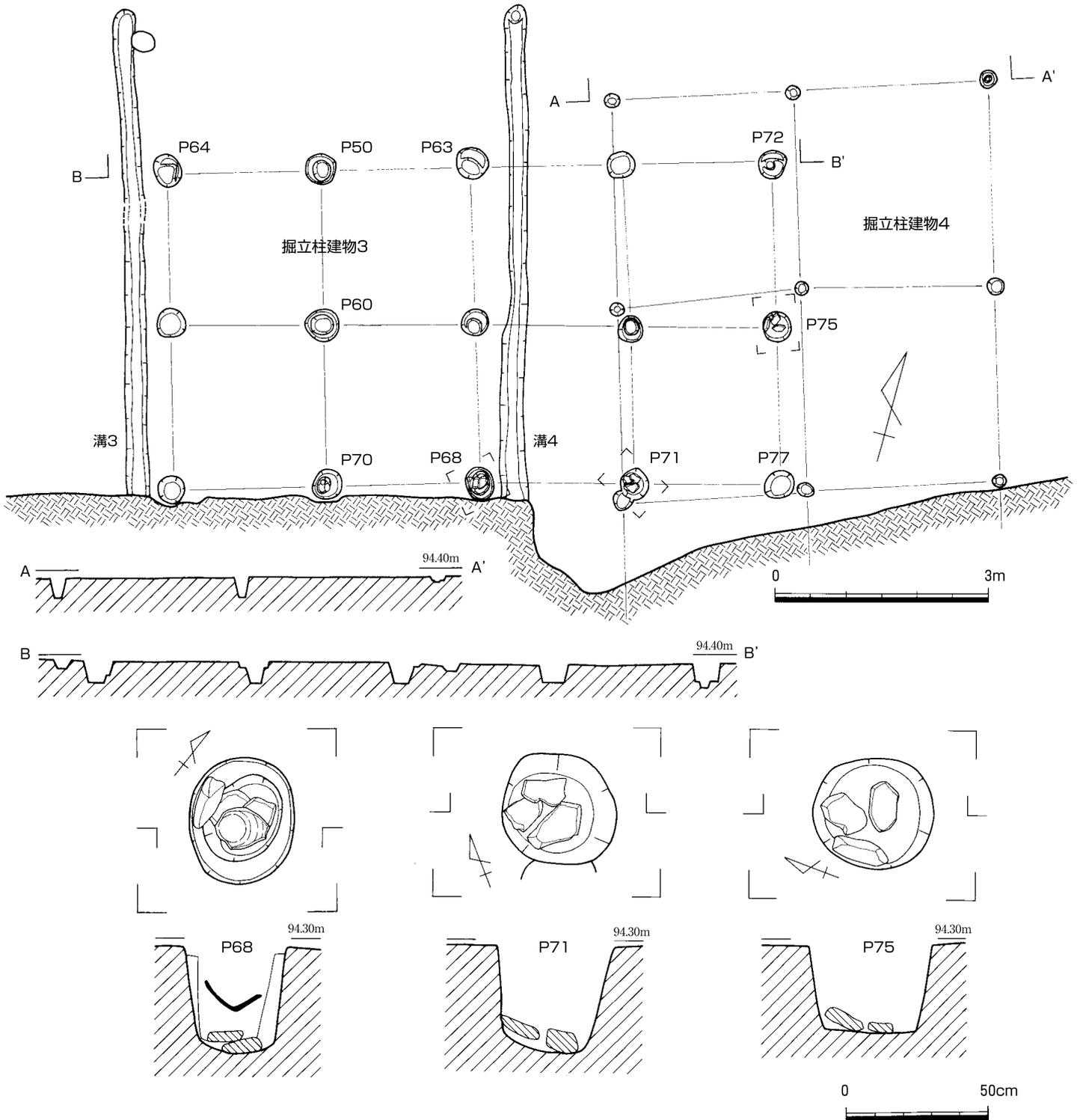
第44图 竖穴住居跡1 出土遺物



第45图 掘立柱建物2

## 2) 掘立柱建物

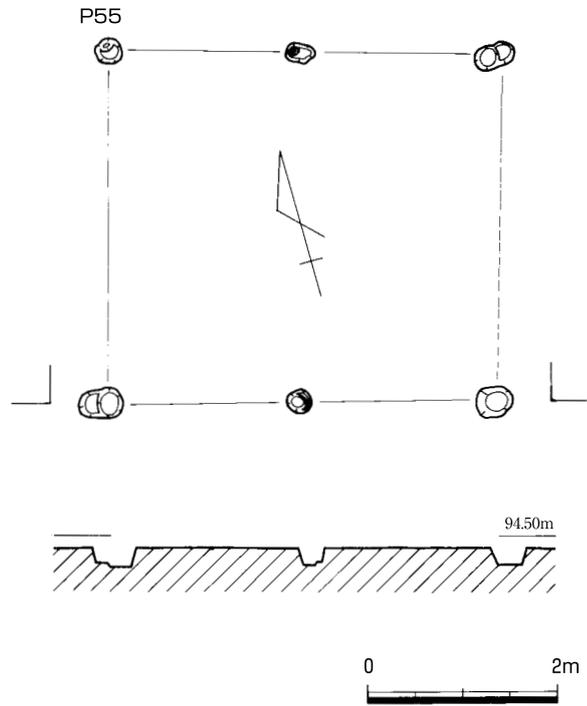
掘立柱建物2は総柱建物で、第5調査区Bに位置し、竪穴住居跡1の南東隅で重複する。1×2間(3.0×5.4m)以上の規模を有し、調査区外南側に伸びている。柱穴は径30～40cm、深さ25～30cmを測る。柱穴P14とP23の底面には扁平な川原石を据え、柱の沈下を防いでいる。柱穴埋土から奈良時代後半頃の暗文系土師器や製塩土器が出土しているが、図化できたものはない。



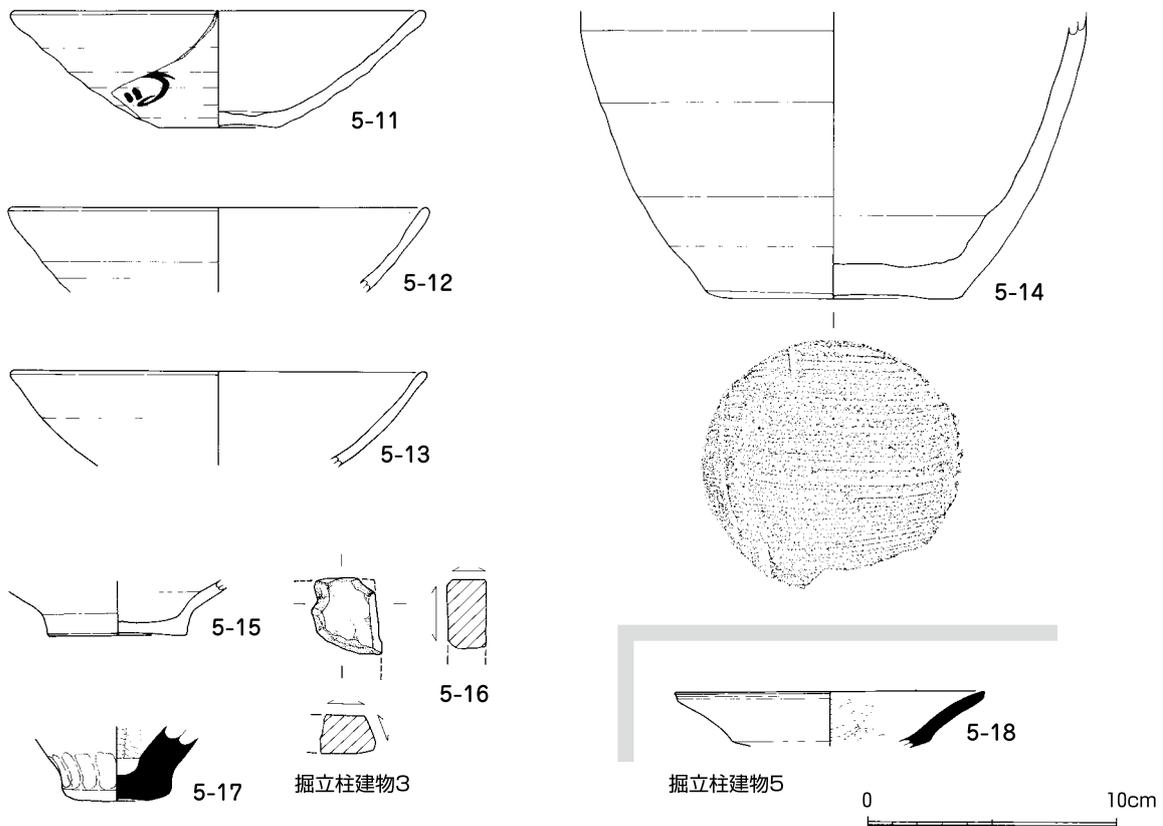
第46図 掘立柱建物3・4

掘立柱建物3は総柱建物で、第5調査区Cに位置する。2×4間(4.6×8.6m)の規模を有し、調査区外の南側に伸びる可能性もある。柱穴は径35～45cm、深さ30～40cmを測る。柱穴P68・P71・P75の底面には据石が認められる。P68では壺底部(5-14)が出土しており、その底面には静止糸切りの痕跡が認められる。他の柱穴埋土からは、弥生時代後期～平安時代末頃の時期幅のある土器が出土している。須恵器山茶碗(5-11)の外面体部には、墨書が看取できるが判読できない。(5-16)は用途不明の土製品で、厚さは約15mmを測り側面及び表面が平滑である

掘立柱建物4は総柱建物で第5調査区Cに位置し、掘立柱建物3の東側で重複する。2×2間(5.3×5.6m)以上の規模を有し、調査区外南側に伸びる。柱穴は径20～25cm、深さ10～



第47図 掘立柱建物跡5



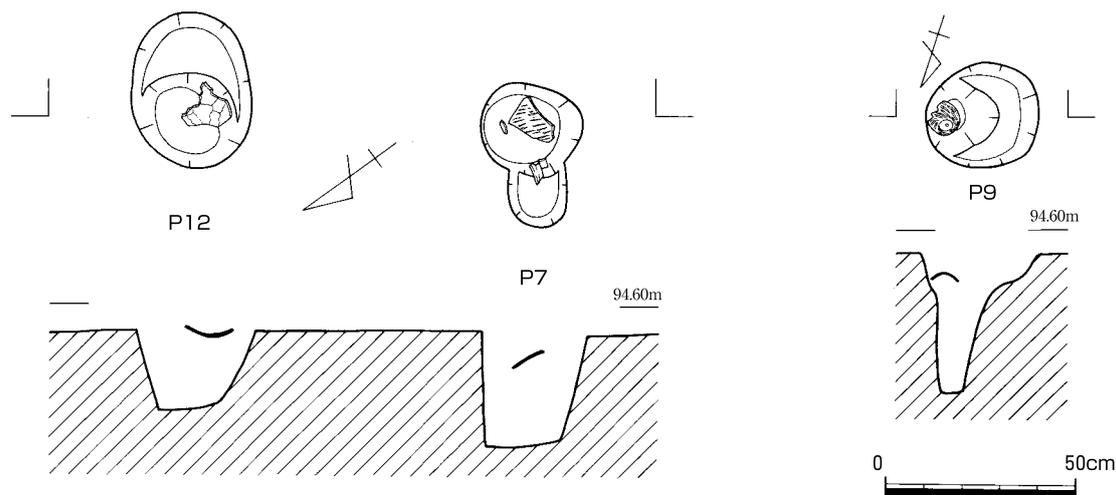
第48図 掘立柱建物3・5 出土遺物

28 cmを測る。掘立柱建物3との切り合い関係から、掘立柱建物3よりも古いことが明らかとなっている。柱穴からは土器小片が出土しているものの、図化できたものはないが、須恵器蓋の存在から掘立柱建物2とほぼ同時期頃の奈良時代後半頃の所産と推定される。

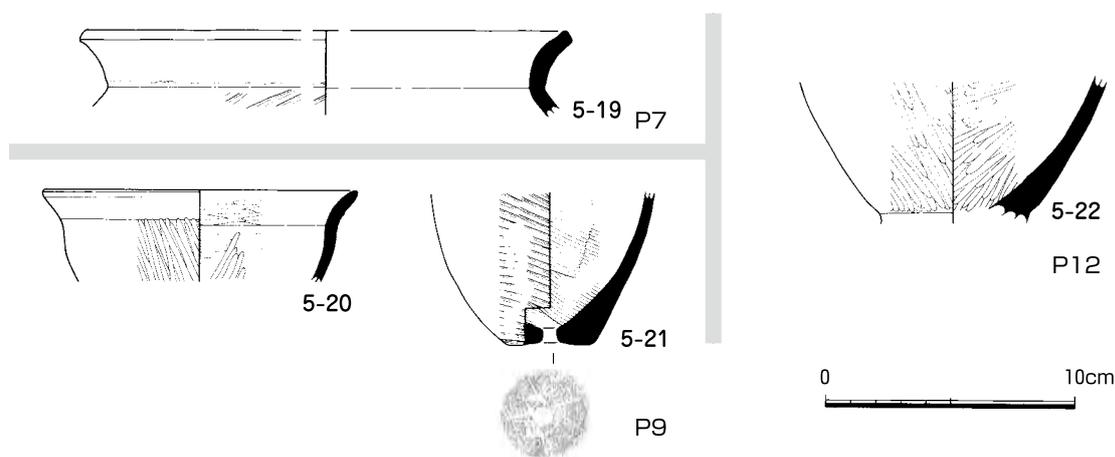
掘立柱建物5は第5調査区Cで掘立柱建物3の北西に位置する。2×1間(4.2×3.5m)の規模を有し、柱穴は径20～30 cm、深さ10～20 cmを測る。柱穴埋土から出土した遺物で図化できたのは、弥生時代末～古墳時代前半頃の高坏(5-18)のみである。出土土器には、当期の所産であることを否定するものはない。

これらの4棟の掘立柱建物以外に、建物跡でなく柱穴列として取り上げることができる柱穴群が、掘立柱建物3の北側から西側に存在している(第30図下)。これらの柱穴群からは弥生時代後期を中心とする遺物が出土しているが、他の遺構との関係は明確でない。

また、そのほかに柱穴状遺構として、P7・P9・P12を取り上げておく。これらの柱穴状遺構は第5区Bの中央付近に位置し、埋土内から弥生時代後期～庄内併行期の土器(5-19～5-22)が出土している。これらの柱穴状遺構は、東側に位置する竪穴住居跡1との密接な関係が問われるが、明らかでない。



第49図 P7・9・12



第50図 P7・9・12出土遺物

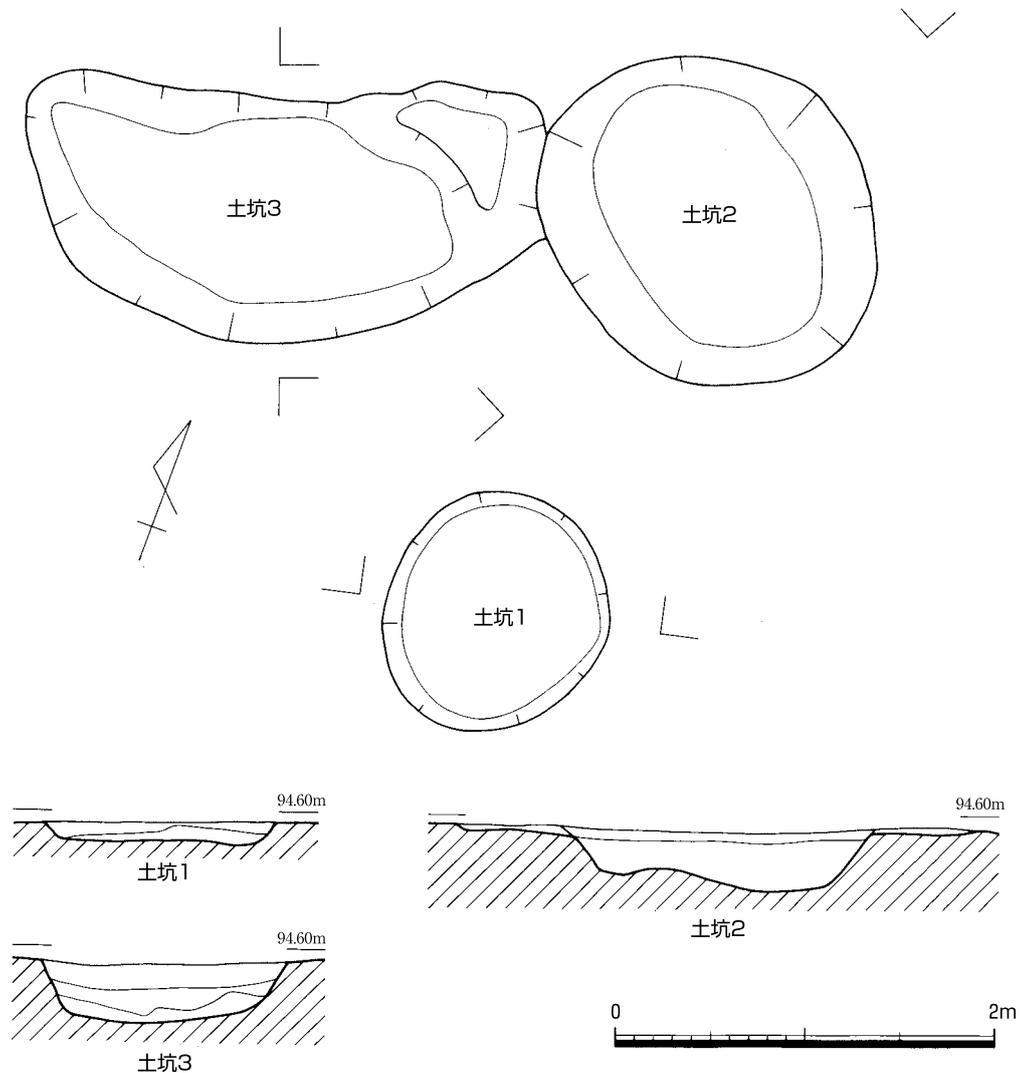
### 3) 土坑

土坑は10基程度検出されている。これらの中で3基の土坑について、概観しておく。

土坑1～3は竪穴住居跡1の西隅に位置し、土坑2は竪穴住居跡と重複している。土坑1は径115×130cm、深さ約10cmを測る。上層が褐灰色土、下層が褐灰色土と地山の白色系粘土のブロック層の埋土で、土器は細片のため図化できなかったが、弥生時代後期～奈良時代の土器が出土している。

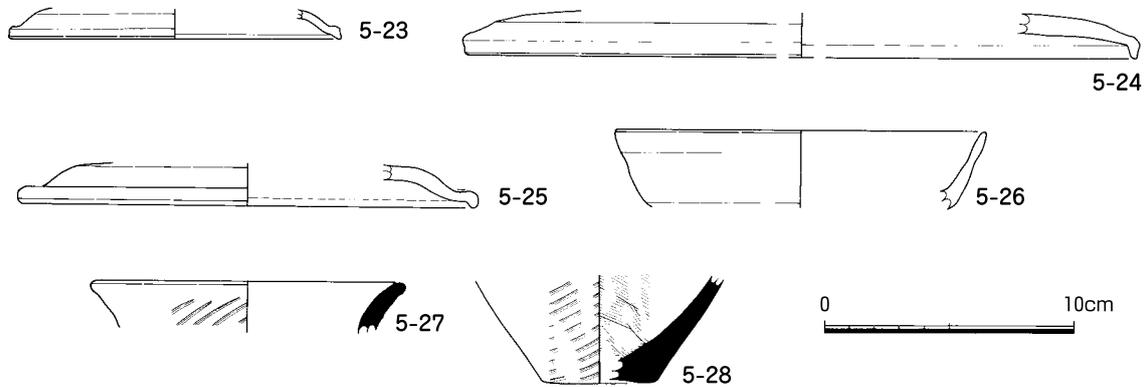
土坑2は径170×180cm、深さ約30cmを測り、西側で土坑3東側で竪穴住居跡1と重複している。上層が褐灰色砂質土、下層が褐灰色粘質土の埋土で、弥生時代後期～奈良時代の土器が出土している。図化できたのは須恵器蓋(5-23)のみであるが、ほかに小片であるが製塩土器の存在が目立つ。

土坑3は径130×270cmの不整形で、深さ約35cmを測る。上層が黒褐色粘質土層、中層が黒



第51図 土坑1・2・3

褐色粘土、下層が黄灰色粘土と地山白色系粘土のブロック層の埋土で、弥生時代後期～奈良時代の土器が出土している。奈良時代の須恵器（5-24～26）、弥生時代後期の甕（5-27・28）が図化できた。土坑2と同様に製塩土器の存在が目立つ。



第52図 土坑2・3 出土遺物

#### 4) 溝

溝は近現代の暗渠を含め 20 条以上検出されており、主要な溝について概述する。

溝1は第5区Bの西端を東西に流れる溝で、幅1～2m、検出長12.5mを測る。西端では深さは約30cmを測るが、東方へ漸移的に浅くなる。埋土には黒褐色粘質土層が堆積し、紛れ込みの中世遺物を除くと、弥生時代後期～奈良時代の土器が出土している。図化できたのは奈良時代頃の須恵器（5-29～31）である。

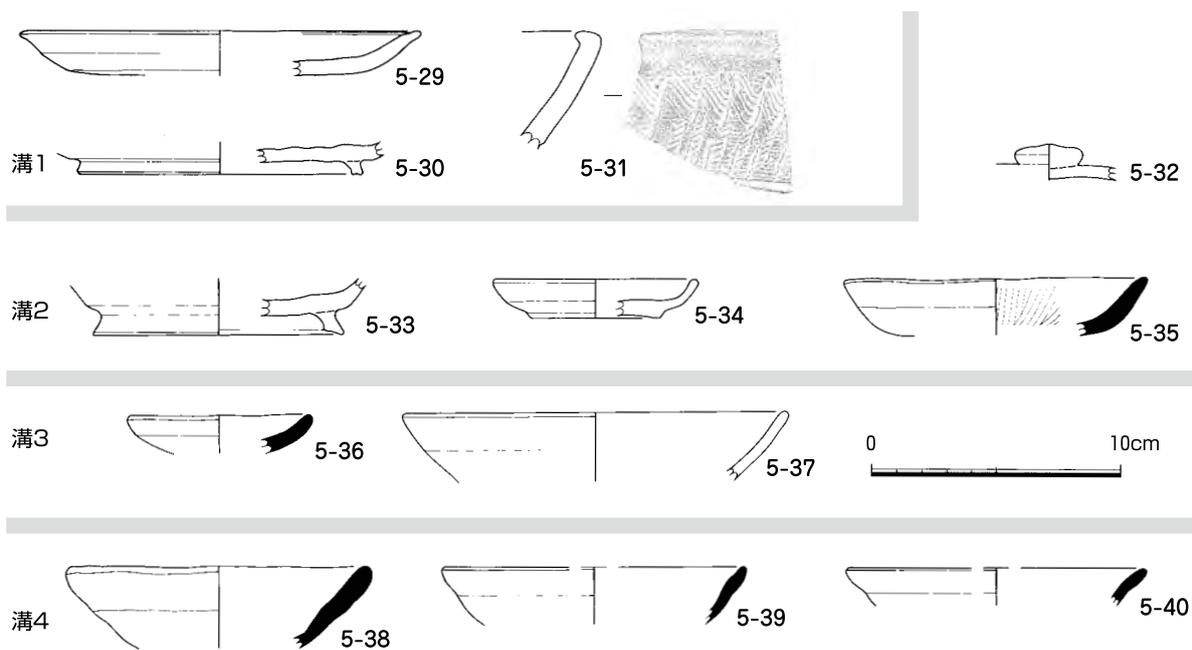
溝2は、第5区B北東隅付近から西に流路を有する溝である。幅0.6～0.9m、深さ約10cm、検出長22m以上を測る。埋土は上層が褐灰色土、下層が褐灰色砂混じり土でラミナ状堆積が看取でき、水流が存在したことを窺い知ることができる。出土土器は平安時代後期～中世の土器を中心とし、土師器皿（5-35）のほか須恵器（5-32～34）が図化できた。

溝3と溝4は第5区Cの中央付近を南北に流路を有する溝で、ほぼ平行して存在している。西側に位置する溝が溝3で、東側が溝4である。双方の溝も幅25～30cm、深さ約15cm、検出長約7mを測る。溝3の出土土器で図化できたのは土師器小皿（5-36）と須恵器山茶碗（5-37）、溝4での図化できたのは土師器皿（5-38～40）である。このうち土師器皿（5-39・40）は小片であるが、その形態や胎土や器壁の薄さが、京都系土師器に類似する。

#### 5) その他の出土遺物

上記において紹介できなかった遺物について、概観しておきたい。

須恵器杯（5-50～52）は、古墳時代の6～7世紀の遺物で、安坂・城の堀遺跡おけては比較的地出土例の少ない時期の遺物に該当する。それ以降の遺物では奈良時代後半頃の土器（5-53～



第53図 溝 出土遺物

85) が主体となっている。坏 (5-82) の底部外面には、墨書が看取できる。

土錘 (5-95) は土師質で硬質に焼き上がっている。平瓦 (5-96) は凹面に布目痕が明瞭に残り、厚さ 15 mm 以下と比較的薄い。砥石 (5-S1) は泥岩製、砥石 (5-S2) は凝灰岩製である。

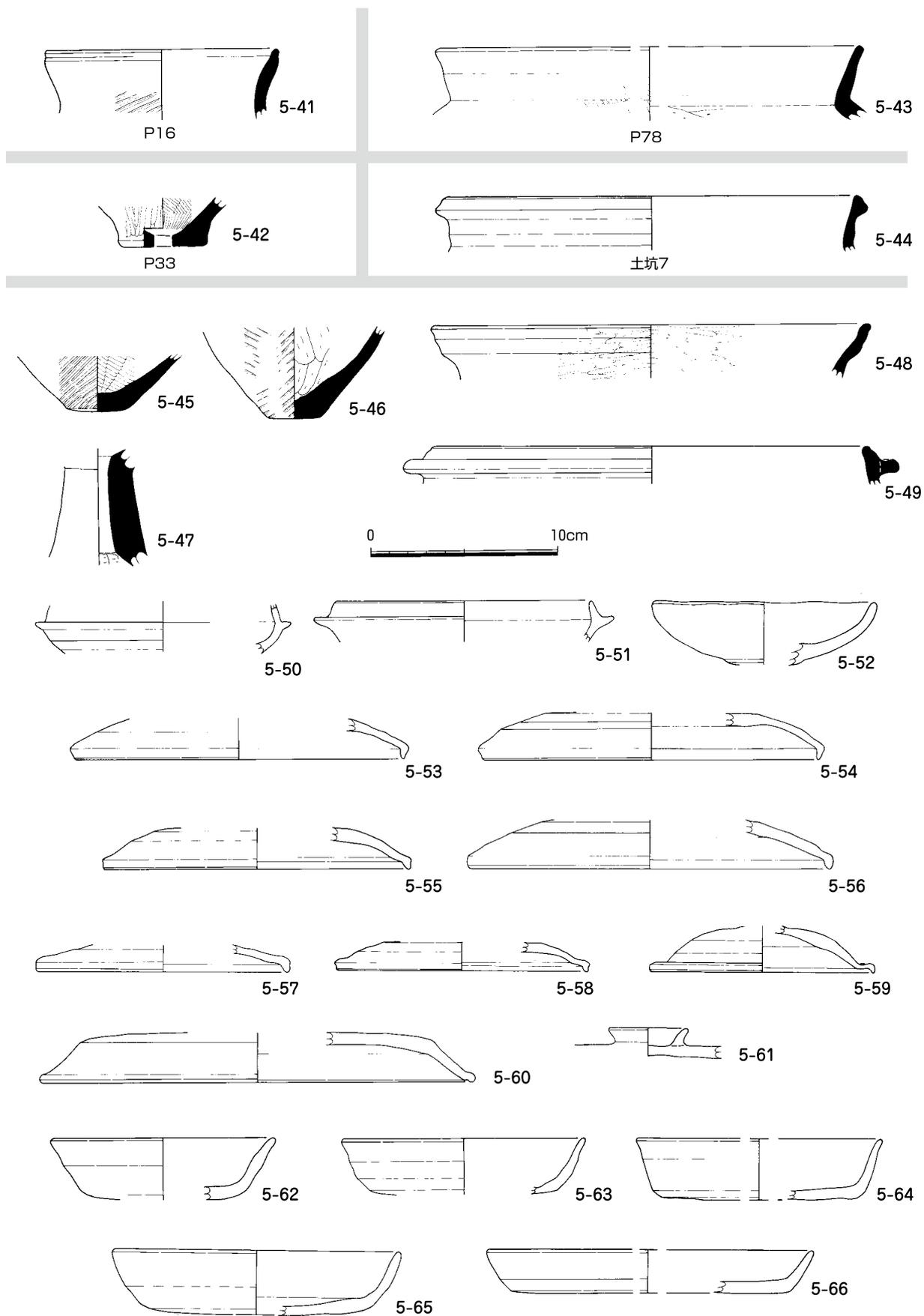
#### 6) 安坂・城の堀遺跡第5区B・C調査区小結

安坂・城の堀遺跡では、建物跡の検出は比較的少なかったが、今回の調査地区では竪穴住居跡 1 棟と掘立柱建物 4 棟が確認されている。

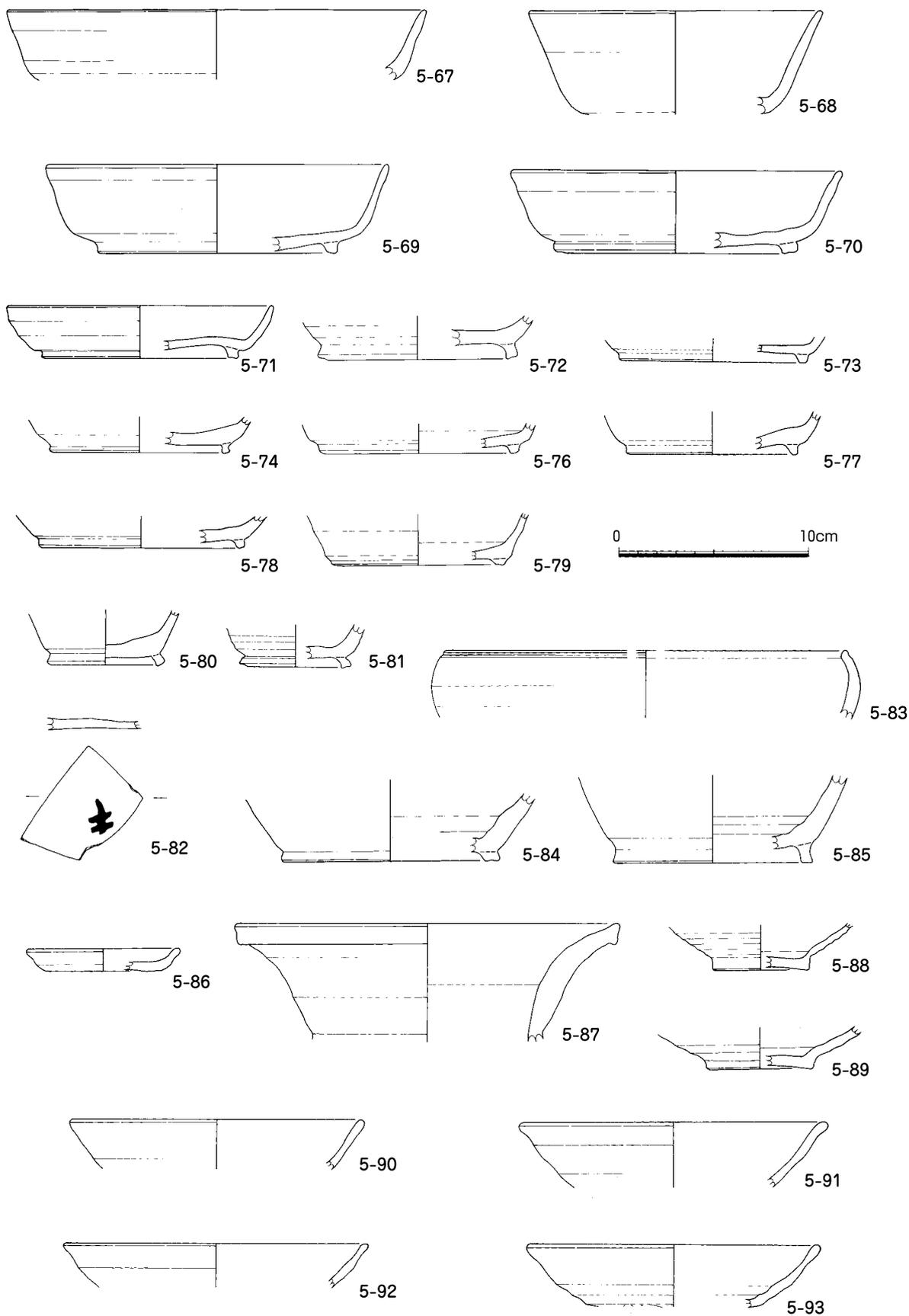
竪穴住居跡は、古墳時代前半の布留期の所産と考えられ、第4区・第4区B・第6区等で多量に出土していた当該期の土器の供出元の集落が、溝の東側に存在することを示している。今後の調査ではこの地域に集落跡が確認されることが期待される。

掘立柱建物は、弥生時代末～古墳時代前半頃の掘立柱建物 1 棟、奈良時代後半の掘立柱建物 2 棟、平安時代末頃の掘立柱建物 1 棟である。弥生時代末～古墳時代前半頃の掘立柱建物については竪穴住居跡と有機的な関連を有する可能性がある。奈良時代の建物は柱穴の規模・形態等からは、官衙的な要素は看取できない。

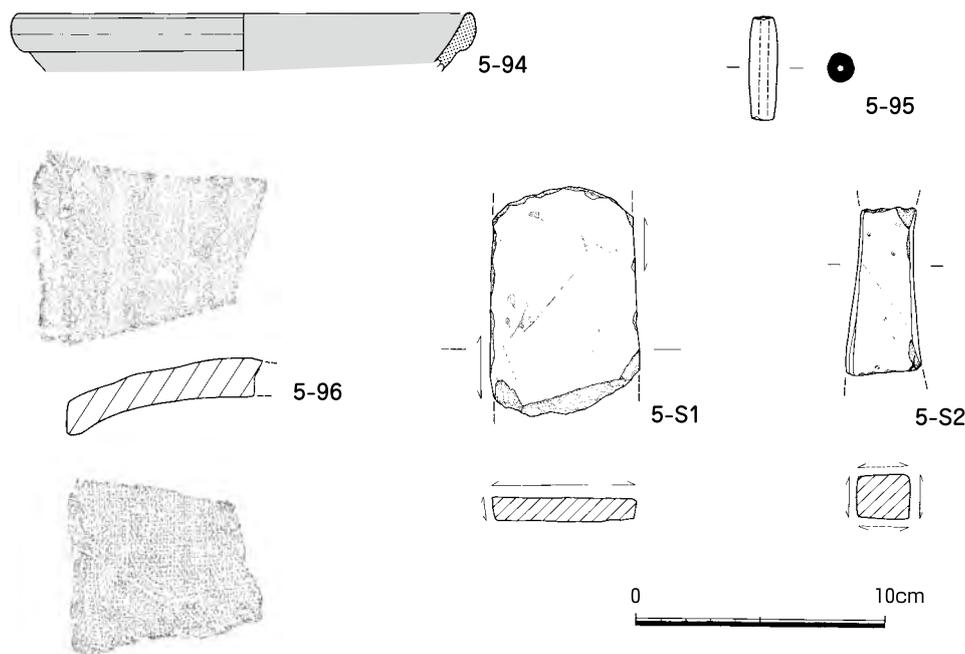
1) 「坂本・丁田遺跡の調査」『安坂・北山田遺跡、坂本・丁田遺跡』中町文化財報告 8 中町教育委員会 1995



第54图 第5区B·C 出土遺物①



第55图 第5区B·C 出土遺物②



第56図第5区B・C 出土遺物③

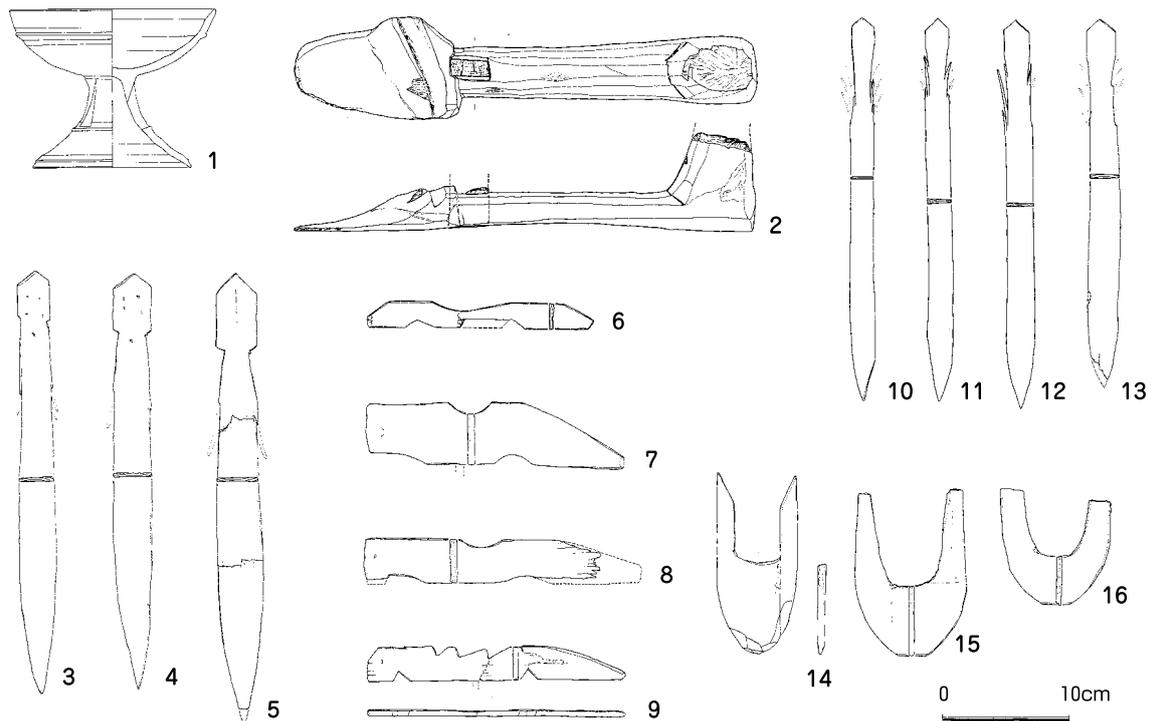
#### 4. おわりに

平成20年(2008)までに残されていた安坂・城の堀遺跡の整理作業は、当報告によって完了する。ここで本来報告者が安坂・城の堀遺跡のまとめをなすべきあるが、先の『安坂・城の堀遺跡Ⅳ』において小川真理子氏によって「安坂・城の堀遺跡の推移」としてまとめられた成果<sup>1)</sup>に大きな変更を加えることはない。このため、詳細は各報告書<sup>2)</sup>と小川氏のまとめに譲り、安坂・城の堀遺跡について調査担当者としてトピックス的に簡単にまとめ、総括としておく。

安坂・城の堀遺跡は、弥生時代中期後半から中世の15世紀代まで間濃淡があるが、この地での先人の生活痕跡が確認できる。

まず、安坂・城の堀遺跡第7区土坑1の出土遺物は、弥生時代後期前半の一括資料としての資料価値は大きい。当町中区鍛冶屋・下川遺跡の竪穴住居跡2の出土資料<sup>3)</sup>とともに、北播磨地方北部の弥生時代後期前半の土器様相が、丹波・但馬地方との関連の中で変遷していくことの見通しを明らかにした。

同じく第7区の溝2では、馬歯が出土している。溝の出土資料なので断言はできないが、古墳時代前期の資料である可能性が高い。当時この地域での馬の存在を考えると、渡来人との関わりが非常に強いものと考えられる。またほぼ相前後する資料として第4区溝18で出土した高坏の全体の器形、坏部と脚部の突線の存在、三角形透かしなどは、朝鮮半島の加耶系土器の影響を強く匂わせるものである。これと類似する高坏が加古川市砂部遺跡<sup>4)</sup>からも出土しており、加古川流域内での首長層との関連を考慮する上で、非常に興味深い。



第57図 古代の特殊遺物<sup>9)</sup>

(2のみS = 1 : 12)

こうした当地域の首長の動向を示す出土遺物として、第4区溝18で出土した農具の犁がある。この犁は供伴の出土遺物から7世紀後半の所産と考えられ、首長層による当期の先進技術の導入による開発を示すものであろう。この犁の存在は北方の妙見山山麓に位置する東山古墳群<sup>5)</sup>・中区北部平野の郡評の関連遺跡の思い出遺跡<sup>6)</sup>、播磨最古級の古代寺院である多哥寺遺跡<sup>7)</sup>の生成に関わった首長層との有機的な関係を示す資料である。

安坂・城の堀遺跡の調査で最も印象に残ったのは、第2区溝3での多量の律令期の木製祭祀用具の出土である。平成5年(1993)の第2区発掘調査開始時には、近世～現代の瓦粘土採掘によって遺構面が掘削を受けた中で、中世の構居跡関連の遺構がどれだけ残されているだろうか、という危惧はみごとに裏切られた。

150点以上出土した木製祭祀用具は、斎串・人形・馬形・刀型・鋏先形の形代が確認された。この木製祭祀用具において、安坂・城の堀遺跡の特徴的な形代も見出すことができる。人形代は足部を尖らせた一本足タイプに限定され<sup>8)</sup>、U字形の鋏先形代は他地域においても類例がほとんどない。斎一的な律令的祭祀を執り行ないながらも、細かな部分に地域的な独自性を見出すことができる資料である。

中世の構居を巡る溝の調査で、第6区溝1で構居内の内櫛部と構居外をつなぐ橋脚を検出した。橋脚の検出も希有なものであるが、その付近から発見された呪符木簡や羽子板状木製品や斎串は、構居内の橋脚の位置が北東に該当することから、構居内の安寧と招福除災を祈念した遺物であることを示している。

以上雑駁であるが、調査担当者として安坂・城の堀遺跡の発掘調査で第一に思い浮かぶことを書き上げた。いずれにしても安坂・城の堀遺跡が多可町の中心的な遺跡の一つであることは疑いない。このような発掘調査・整理調査の成果を地域史の中にどう取り込んで、評価していくかが今後の課題となる。

註

- 1) 小川真理子「安坂・城の堀遺跡の推移」『安坂・城の堀遺跡Ⅳ』多可文化財報告3 多可教育委員会 2007
- 2) i. 『安坂・城の堀遺跡Ⅱ』中町文化財報告23 中町教育委員会 2000  
 ii. 『安坂・城の堀遺跡Ⅲ』中町文化財報告34 中町教育委員会 2005  
 iii. 『安坂・城の堀遺跡Ⅳ』多可文化財報告3 多可教育委員会 2007
- 3) 『鍛冶屋・下川遺跡』中町文化財報告6 中町教育委員会 1994
- 4) 『砂部遺跡』加古川市教育委員会 1978
- 5) 『東山古墳群Ⅰ』中町文化財報告20 中町教育委員会 京都府立大学文学部考古学研究室 1999  
 『東山古墳群Ⅱ』中町文化財報告25 中町教育委員会 京都府立大学文学部考古学研究室 2001
- 6) 『思い出遺跡群Ⅱ』中町文化財報告22 中町教育委員会 2000
- 7) 『多哥寺遺跡』中町文化財報告9 中町教育委員会 1995  
 『多哥寺遺跡Ⅱ』中町文化財報告15 中町教育委員会 奈良大学 1997
- 8) 曾我井・沢田遺跡において1本足タイプの人形が出土していることから、安坂・城の堀遺跡だけでなく、少なくとも多可地域の特徴と考えると良さそうである。「曾我井・沢田遺跡」『ひょうごの遺跡』第68号 2008  
 兵庫県立考古博物館
- 9) 当図の出典は、註2) iiからの転載である。なお、報告書番号は以下の通りである。

番 号	種 類	報告書 No
1	須恵器 高 環	4 - 81
2	犁	4 - W 9
3	人 形 代	2 - W66
4	人 形 代	2 - W67
5	人 形 代	2 - W68
6	馬 形 代	5 - W45
7	馬 形 代	2 - W90
8	馬 形 代	2 - W94

番 号	種 類	報告書 No
9	馬 形 代	2 - W96
10	斎 串	5 - W48
11	斎 串	5 - W49
12	斎 串	5 - W50
13	斎 串	5 - W51
14	鋤 先 形 代	2 - W45
15	鋤 先 形 代	2 - W46
16	鋤 先 形 代	2 - W47

# 土器観察表

- 法量は ( ) 現存高、- は不明である。
- 成形・調整等の ( / ) は (本数/cm) である。

遺物番号	実測番号	調査区	出土遺構	器種		法量 (cm)			色調	成形・調整等		備考
				種類	器種	口径	器高	底・脚径		成形・調整等		
										外面	内面	
3-1	17	第3区	溝1	弥生土器	壺	12.4	(4.4)	-	浅黄橙	口縁部不明、頸部磨き	不明	
3-2	64	〃	〃	〃	〃	16.4	(9.5)	-	淡黄～明褐	口縁部端部凹線、頸部刷毛(9/10)	頸部刷毛(9/10)	
3-3	30	〃	〃	〃	甕	14.6	(4.3)	-	にぶい黄褐	口縁部擬凹線、頸部横なで	体部磨削り	
3-4	29	〃	〃	〃	〃	14.2	(2.3)	-	褐灰	口縁部細い凹線3条	横なで	
3-5	44	〃	〃	〃	〃	14.6	(2.5)	-	にぶい橙	口縁部横なで、体部平行叩き	横なで	
3-6	32	〃	〃	〃	〃	18.8	(9.7)	-	灰黄褐	口縁部横なで、体部刷毛(10/10)	体部磨削り	
3-7	67	〃	〃	〃	〃	-	(17.7)	4.4	淡黄	口縁部横なで、体部刷毛	体部磨削り	
3-8	61	〃	〃	〃	〃	-	(14.3)	3.8	淡黄	不明	体部磨削り	
3-9	60	〃	〃	〃	脚台付鉢	8.1	(9.8)	-	灰白	不明	体部刷毛(5/10)	
3-10	54	〃	〃	〃	高坏	-	(9.5)	-	灰黄褐	磨き、円形透かし4方向	坏部磨き、脚部なで	
3-11	68	〃	〃	〃	鉢	12.8	7.4	4.6	浅黄橙	体部不明、脚台部指頭圧痕	不明	
3-12	23	〃	〃	〃	底部	-	(11.5)	3.3	にぶい黄橙	体部刷毛 (7/10)	体部磨削り	外面煤付着
3-13	41	〃	〃	〃	〃	-	(14.0)	3.5	灰黄褐	体部平行叩き (2/10)、底部側面指頭圧痕	刷毛 (6/10) 後、下部磨削り	外面煤付着
3-14	65	〃	〃	〃	〃	-	(7.5)	3.9	にぶい黄褐	不明	磨削り	
3-15	18	〃	〃	〃	〃	-	(6.7)	3.1	灰黄	平行叩き (2/10)	磨削り	
3-16	11	〃	〃	〃	〃	-	(3.8)	4.3	にぶい黄	平行叩き (3/10)	なで	
3-17	16	〃	〃	〃	〃	-	(2.8)	4.2	淡黄	磨き	刷毛 (6/10)	
3-18	26	〃	〃	〃	〃	-	(2.0)	2.5	にぶい橙	体部平行叩き (2.5/10)、底部平行叩き	磨削り	
3-19	34	〃	〃	〃	〃	-	(2.9)	3.1	淡黄	不明	刷毛 (8/10)	
3-20	31	〃	〃	〃	〃	-	(2.7)	4.2	灰白	体部なで、底部側面指頭圧痕	磨削り?	
3-21	13	〃	〃	〃	壺	16.8	(7.1)	-	淡黄	口縁部端部弱い凹線二条、頸部刷毛(6/10)後磨き	体部なで	
3-22	27	〃	〃	〃	細頸壺	-	(5.8)	-	淡黄	磨き後肩部細い沈線4条	磨き	
3-23	66	〃	〃	〃	甕	16.2	(26.2)	4.8	にぶい黄橙	口縁部横なで、体部平行叩き (3/10) 後刷毛 (8/10)	刷毛 (8/10) 後一部なで	外面煤付着
3-24	21	〃	〃	〃	〃	15.4	(8.0)	-	明黄褐	口縁部端部弱い凹線1条、体部刷毛(9/10)	体部磨削り	外面煤付着
3-25	20	〃	〃	〃	〃	21.7	(4.8)	-	淡黄	口縁部端部弱い凹線1条、体部不明	体部磨削り	
3-26	22	〃	〃	〃	〃	16.5	(4.4)	-	灰白	口縁部端部弱い凹線1条、体部刷毛(7/10)	体部磨削り	
3-27	19	〃	〃	〃	〃	17.1	(5.0)	-	淡黄	口縁部なで、体部平行叩き (3/10)	体部不明	
3-28	28	〃	〃	〃	〃	14.8	(7.1)	-	浅黄橙	口縁部横なで、体部平行叩き	体部磨削り?	外面煤付着
3-29	7	〃	〃	〃	〃	16.2	(2.7)	-	淡黄	口縁部横なで、体部刷毛	体部磨削り	
3-30	75	〃	〃	〃	高坏	26.8	(4.6)	-	淡黄	不明	磨き	
3-31	38	〃	〃	〃	〃	-	(7.5)	20.0	淡黄	磨き、円形透かし(径12mm)4方向	不明	
3-32	63	〃	〃	〃	甕	-	(13.6)	4.4	にぶい橙	体部刷毛 (10/10)、底部刷毛	磨削り	外面煤付着
3-33	12	〃	〃	〃	底部	-	(5.5)	4.6	にぶい黄	平行叩き (3/10) 後刷毛 (6/10)	磨削り?	
3-34	8	〃	〃	〃	〃	-	(5.0)	3.3	浅黄	刷毛 (7/10)	体部なで、底部指頭圧痕	
3-35	62	〃	〃	〃	〃	-	(9.4)	4.8	にぶい黄橙	磨き	体部刷毛 (9/10)、底部指頭圧痕	
3-36	10	〃	〃	〃	〃	-	(3.6)	4.1	黄灰	体部刷毛 (10/10)、底部刷毛	磨削り	
3-37	9	〃	〃	〃	〃	-	(3.0)	3.1	浅黄	なで?	刷毛 (6/10)	
3-38	14	〃	〃	〃	〃	-	(3.7)	3.8	淡黄	刷毛 (12/10)	なで?	
3-39	24	〃	〃	〃	〃	-	(2.9)	3.7	灰白	体部なで、底部側面指頭圧痕	なで?	体部不明
3-40	58	〃	溝1上面	須恵器	山茶碗	-	(2.9)	6.0	灰白	体部ロクロナデ、底部回転系切り	ロクロナデ	ロクロ回転時計回り
3-41	6	〃	溝1	〃	〃	13.3	(3.2)	-	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
3-42	56	〃	〃	〃	〃	15.0	2.7	11.2	灰白	口縁部ロクロナデ、底部磨削り	ロクロナデ	
3-43	欠番											
3-44	59	第3区	溝2、第層	須恵器	山茶碗	-	(1.5)	6.0	灰白	体部ロクロナデ、底部回転系切り	ロクロナデ	ロクロ回転時計回り
3-45	57	〃	〃	〃	〃	-	(2.0)	5.0	灰白	体部ロクロナデ、底部回転系切り	ロクロナデ	ロクロ回転時計回り
3-46	3	〃	〃	〃	〃	8.0	2.1	4.7	暗灰	口縁部ロクロナデ、底部回転系切り	ロクロナデ	ロクロ回転時計回り
3-47	69	〃	〃	〃	〃	15.8	(4.3)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり
3-48	5	〃	〃	〃	〃	16.0	(3.2)	-	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり
3-49	70	〃	〃	〃	〃	16.6	(2.1)	-	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり
3-50	36	〃	〃	土師器	土鍋	23.5	(3.8)	-	にぶい黄橙	横なで	横なで	外面煤付着
3-51	37	〃	〃	〃	〃	24.9	(3.2)	-	淡黄	横なで	横なで	
3-52	48	〃	〃	弥生土器	壺	15.9	(8.0)	-	暗灰黄～黄灰	口縁部端部擬凹線、頸部磨き	なで?	
3-53	42	〃	〃	〃	高坏	25.2	(4.5)	-	浅黄	磨き後口縁部直下及び肩部に沈線	磨き	
3-54	55	〃	〃	〃	〃	21.4	(4.3)	-	にぶい黄橙	口縁部端部擬凹線、体部不明	なで?	
3-55	53	〃	〃	〃	〃	-	(13.3)	-	灰白	刷毛 (8/10) 後磨き、円形透かし(径15mm)3方向	坏部不明、脚部なで	
3-56	35	〃	〃	〃	穿孔土器	17.9	10.1	-	黄灰	口縁部横なで、体部平行叩き (2/10) 後下部なで	体部なで、底部指頭圧痕	
3-57	40	〃	〃	〃	底部	-	(3.5)	4.3	浅黄	なで	なで	
3-58	39	〃	〃	〃	〃	-	(3.5)	6.0	灰白	体部なで、底部木葉痕	磨削り?	
3-59	46	〃	溝2、第層	〃	〃	-	(5.3)	4.8	黄灰	なで	磨削り	
3-60	45	〃	〃	〃	〃	-	(3.0)	4.4	にぶい黄	刷毛?	なで?	
3-61	43	〃	〃	〃	〃	-	(2.5)	3.4	灰白	なで	なで	

遺物番号	実測番号	調査区	出土遺構	器種		法量 (cm)			色調	成形・調整等		備考
				種類	器種	口径	器高	底・脚径		成形・調整等		
										外面	内面	
3-62	51	第3区	溝2、第層	弥生土器	鉢	24.9	(3.7)	-	灰黄	口縁部横なで、体部磨き	体部なで	外面煤付着
3-63	52	〃	〃	〃	高坏	-	(13.9)	-	淡黄	磨き	刷毛(6/10)後上部磨き	透かし不明
3-64	50	〃	〃	〃	底部	-	(4.5)	-	灰黄褐	指頭圧痕状なで	なで?	
3-65	49	〃	溝2、第層	〃	〃	-	(5.3)	4.0	灰白	磨き	なで	
3-66	1	〃	-	須恵器	坏	11.8	3.0	5.9	灰	口縁部ロクロナデ、底部回転系切り	ロクロナデ	ロクロ回転時計回り
3-67	4	〃	-	〃	山茶碗	15.6	(4.7)	-	灰	ロクロナデ、底部回転系切り	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり
3-68	2	〃	-	〃	〃	15.4	(3.8)	7.0	灰	ロクロナデ、底部回転系切り	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり
3-69	33	〃	-	弥生土器	底部	-	(2.9)	3.0	にぶい橙	不明	磨き?	
3-70	47	〃	-	〃	器台	20.6	(7.5)	-	浅黄橙	口縁部横なで、体部不明	不明	
5-1	10	第3区B	竪穴住居跡1	〃	壺	-	(2.5)	-	にぶい黄橙	磨き	磨き	
5-2	9	〃	〃	〃	高坏	13.2	(2.4)	-	にぶい黄橙	刷毛(8/10)後磨き	刷毛(8/10)後磨き	
5-3	11	〃	〃	〃	脚部	-	(4.6)	15.8	にぶい黄橙	刷毛(5/10)	客端部横なで、上部磨き	
5-4	8	〃	〃	〃	〃	-	(2.7)	11.4	黄橙	刷毛(8/10)後なで、円形透かし(径約10mm)6方向に穿つ	刷毛(8/10)	
5-5	7	〃	〃	〃	底部	-	(2.2)	5.0	にぶい褐	体部平行叩き(3/10)、底部側面指頭圧痕	なで	
5-6	4	〃	竪穴住居跡1内中央土坑1	〃	壺	18.0	(12.7)	-	にぶい黄橙	口縁部横なで、頸部・体部刷毛(10/10)	口頸部刷毛(10/10)、体部指頭圧痕	
5-7	6	〃	竪穴住居跡1内中央土坑2	〃	甕	-	(3.2)	-	浅黄橙	横なで	横なで	
5-8	5	〃	〃	〃	〃	-	(3.2)	-	灰黄褐	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部磨き	
5-9	2	〃	〃	〃	底部	-	(3.3)	5.0	黒褐	体部平行叩き(3/10)、底部平行叩き	刷毛(3/10)	
5-10	3	〃	〃	〃	〃	-	(2.1)	3.3	黄灰	底部側面指頭圧痕	刷毛(3.5/10)	
5-11	87	第5区C	掘立柱建物3.P77	須恵器	山茶碗	16.6	4.7	5.0	灰白	口縁部ロクロナデ、底部回転系切り	ロクロナデ	外面体部下部に墨書あり(判読不明)
5-12	85	〃	掘立柱建物3.P70	〃	〃	16.8	(3.4)	-	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり
5-13	80	〃	掘立柱建物3P50-P60	〃	〃	16.6	(3.8)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり、内面煤付着
5-14	84	〃	掘立柱建物3.P68	〃	底部	-	(11.6)	10.2	灰	体部ロクロナデ、底部静止系切り	体部ロクロナデ、底部仕上げなで	
5-15	82	〃	掘立柱建物3.P63	〃	山茶碗	-	(2.2)	5.6	灰白	体部ロクロナデ、底部回転系切り	ロクロナデ	ロクロ回転時計回り
5-16	86	〃	掘立柱建物3.P72	-	用途不明土製品	-	(3.0)	-	灰白	-	-	
5-17	83	〃	掘立柱建物3.P64	弥生土器	底部	-	(3.0)	4.0	にぶい橙	底部側面指頭圧痕	刷毛(5/10)	
5-18	81	〃	掘立柱建物5.P55	〃	高坏	12.4	(2.2)	-	橙	口縁部端部弱い沈線1条、体部横なで	磨き	
5-19	12	第5区B	P7	弥生土器	甕	-	(3.4)	-	暗灰黄	口縁部横なで、体部平行叩き(3/10)	体部なで?	
5-20	13	〃	P9	〃	鉢	12.4	(3.7)	-	橙	口縁部横なで、体部磨き	口縁部磨き、体部刷毛(5/10)後磨き	
5-21	14	〃	〃	〃	穿孔土器	-	(6.1)	3.6	灰黄	体部平行叩き(4/10)、底部木葉痕	刷毛(8/10)	
5-22	15	〃	P12	〃	体部	-	(5.7)	-	淡黄	磨き	磨き	
5-23	19	〃	土坑2	須恵器	蓋	13.3	(1.2)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
5-24	21	〃	土坑3	〃	〃	-	(1.8)	-	灰	口縁部ロクロナデ、天井部回転磨き	ロクロナデ	
5-25	20	〃	〃	〃	〃	18.4	(1.7)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
5-26	22	〃	〃	〃	坏	14.8	(3.1)	-	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
5-27	23	〃	〃	弥生土器	甕	12.1	(2.1)	-	浅黄橙	口縁部横なで、体部平行叩き(2.5/10)	横なで	
5-28	24	〃	〃	〃	底部	-	(4.3)	4.6	橙	体部平行叩き(3/10)底部木葉痕	刷毛(10/10)	
5-29	26	〃	溝1	須恵器	皿	16.0	(1.8)	-	灰	口縁部ロクロナデ、底部磨き?	ロクロナデ、底面研磨痕	転用硯か?
5-30	27	〃	〃	〃	坏	-	(1.3)	11.4	灰	体部ロクロナデ、底部磨き	底部仕上げなで	
5-31	28	〃	〃	〃	壺	-	(4.8)	-	灰	上部より櫛波波状文・櫛目文・沈線(櫛目数8本以上)	ロクロナデ	
5-32	18	〃	溝2	〃	蓋	-	(1.9)	-	灰白	つまみロクロナデ、天井部回転磨き	仕上げなで	
5-33	29	〃	〃	〃	坏	-	(2.3)	10.0	灰	底部磨き後ロクロナデ	仕上げなで	
5-34	30	〃	〃	〃	小皿	8.2	1.6	5.2	灰	口縁部ロクロナデ、底部回転系切り	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり
5-35	31	〃	〃	土師器	皿	12.2	(2.3)	-	浅黄橙	口縁部手なで、底部未調整	体部刷毛(5/10)	
5-36	75	第5区C	溝3	〃	小皿	7.4	(1.5)	-	橙	口縁部手なで、未調整	手なで	
5-37	76	〃	〃	須恵器	山茶碗	15.4	(2.8)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり
5-38	77	〃	溝4	土師器	皿	12.2	(3.3)	-	橙	口縁部手なで、未調整	手なで	
5-39	78	〃	〃	〃	〃	-	(2.3)	-	橙	口縁部手なで、未調整	手なで	
5-40	79	〃	〃	〃	〃	-	(1.5)	-	浅黄橙	口縁部手なで、未調整	手なで	
5-41	16	第5区B	P16	弥生土器	甕	12.2	(3.8)	-	橙	口縁部弱い凹線1条、体部平行叩き(3/10)	横なで	
5-42	17	〃	P33	〃	穿孔土器	-	(2.6)	4.6	橙	体部磨き、底部木葉痕	刷毛(8/10)	
5-43	88	第5区C	P78	〃	甕	-	(2.0)	-	橙	口縁部横なで、体部刷毛(5/10)	頸部刷毛(5/10)、体部磨き	
5-44	25	第5区	土坑7	土師器	土埴	21.8	(2.9)	-	にぶい黄橙	横なで	横なで	
5-45	1	〃	-	弥生土器	底部	-	(3.0)	3.3	にぶい褐	体部平行叩き(2.5/10)、底部なで	刷毛(3/10)	

遺物番号	実測番号	調査区	出土遺構	器種		法量 (cm)			色調	成形・調整等		備考
				種類	器種	口径	器高	底・脚径		成形・調整等		
										外面	内面	
5-46	71	第5区	-	弥生土器	底部	-	(4.9)	2.6	黄灰	体部平行叩き (3/10)、底部平行叩き	銚削り	
5-47	72	〃	-	〃	高坏	-	(6.3)	-	にぶい黄橙	不明	脚部下部銚削り	
5-48	69	〃	-	〃	鉢	22.8	(2.9)	-	橙	銚磨き	銚磨き	
5-49	70	〃	-	土師器	羽釜	22.8	(2.0)	-	橙	横なで	横なで	外面煤付着
5-50	54	〃	-	須恵器	坏身	-	(2.8)	-	青灰	口縁部ロクロナデ、底部回転銚削り	ロクロナデ	
5-51	94	〃	-	〃	〃	13.6	(2.2)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
5-52	43	〃	-	〃	〃	12.0	(3.4)	-	灰白	口縁部ロクロナデ、底部銚切り	ロクロナデ	
5-53	63	〃	-	〃	蓋	17.6	(2.2)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
5-54	60	〃	-	〃	〃	18.0	(2.5)	-	灰	口縁部ロクロナデ、天井部回転銚削り	ロクロナデ	
5-55	56	〃	-	〃	〃	16.4	(2.2)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
5-56	57	〃	-	〃	〃	19.4	(2.6)	-	灰白	口縁部ロクロナデ、天井部回転銚削り	ロクロナデ	
5-57	93	〃	-	〃	〃	13.6	(1.4)	-	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
5-58	58	〃	-	〃	〃	13.4	(1.5)	-	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ、研磨痕	転用硯か？
5-59	61	〃	-	〃	〃	12.0	(2.4)	-	灰	口縁部ロクロナデ、天井部銚切り後ロクロナデ	ロクロナデ	
5-60	62	〃	-	〃	〃	23.2	(2.7)	-	灰白	口縁部ロクロナデ、天井部回転銚削り	天井部仕上げなで	
5-61	59	〃	-	〃	〃	-	(1.5)	-	灰	ロクロナデ	仕上げなで	
5-62	36	〃	-	〃	坏	12.0	(3.3)	-	灰白	口縁部ロクロナデ、底部銚切り	ロクロナデ	
5-63	39	〃	-	〃	〃	13.0	(3.0)	-	灰	口縁部ロクロナデ、底部銚切り	ロクロナデ	
5-64	38	〃	-	〃	〃	-	(3.3)	-	灰	口縁部ロクロナデ、底部銚切り	ロクロナデ	
5-65	89	〃	-	〃	〃	15.4	(3.5)	11.4	灰白	口縁部ロクロナデ、底部銚切り後なで	底部仕上げなで	
5-66	52	〃	-	〃	〃	-	(2.4)	-	灰白	口縁部ロクロナデ、底部回転銚削り	ロクロナデ	
5-67	45	〃	-	〃	〃	22.0	(3.7)	-	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
5-68	37	〃	-	〃	〃	15.4	(5.5)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
5-69	33	〃	-	〃	〃	18.0	4.7	12.6	灰白	口縁部ロクロナデ、底部銚切り後ロクロナデ	ロクロナデ、底部研磨痕	転用硯か？
5-70	32	〃	-	〃	〃	17.4	4.4	12.8	灰白	口縁部ロクロナデ、底部銚切り後ロクロナデ	底部仕上げなで	
5-71	34	〃	-	〃	〃	14.0	2.8	10.3	灰	口縁部ロクロナデ、底部銚切り後なで	底部仕上げなで	
5-72	97	〃	-	〃	〃	-	(2.3)	10.4	灰	体部ロクロナデ、底部銚切り後なで	ロクロナデ	
5-73	48	〃	-	〃	〃	-	(2.3)	9.8	灰	体部ロクロナデ、底部銚切り	底部仕上げなで	
5-74	46	〃	-	〃	〃	-	(1.9)	9.4	灰	体部ロクロナデ、底部回転銚削り	底部仕上げなで	
5-75				欠番								
5-76	98	〃	-	〃	〃	-	(1.6)	10.4	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
5-77	51	〃	-	〃	〃	-	(2.3)	9.0	灰白	体部ロクロナデ、底部銚切り	ロクロナデ	
5-78	50	〃	-	〃	〃	-	(1.7)	10.8	灰	体部ロクロナデ、底部銚切り	底部仕上げなで	
5-79	95	〃	-	〃	〃	-	(2.7)	9.0	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
5-80	35	〃	-	〃	〃	-	(3.0)	6.2	灰	体部ロクロナデ、底部銚切り	底部仕上げなで	
5-81	96	〃	-	〃	〃	-	(2.3)	5.8	灰	体部ロクロナデ、底部銚切り	ロクロナデ	
5-82	66	〃	-	〃	〃	-	-	-	灰白	銚切り	ロクロナデ	外面に墨書あり、判読不明
5-83	53	〃	-	〃	〃	-	(3.6)	-	灰	回転銚削り後ロクロナデ、口縁部直下凹線一条	ロクロナデ	
5-84	47	〃	-	〃	底部	-	(4.3)	11.4	灰	回転銚削り後ロクロナデ	ロクロナデ	
5-85	49	〃	-	〃	〃	-	(4.6)	10.4	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
5-86	42	〃	-	〃	小皿	8.0	1.2	6.0	灰	口縁部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり
5-87	64	〃	-	〃	壺	19.8	(6.3)	-	青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
5-88	41	〃	-	〃	山茶碗	-	(2.4)	5.0	灰	体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	ロクロ回転時計回り
5-89	40	〃	-	〃	〃	-	(2.2)	5.6	灰白	体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	
5-90	92	〃	-	〃	〃	15.4	(2.6)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり
5-91	90	〃	-	〃	〃	16.2	(3.5)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり
5-92	91	〃	-	〃	〃	16.0	(2.3)	-	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり
5-93	44	〃	-	〃	〃	15.4	(3.1)	-	灰	口縁部ロクロナデ、底部手持ち銚削り	ロクロナデ	口縁部重ね焼き痕あり
5-94	67	〃	-	白磁	碗	18.0	(20.3)	-	(胎) 灰白	-	-	
5-95	68	〃	〃	土師器	土錘	-	4.1	-	橙	-	-	
5-96	65	〃	〃	瓦	平瓦	-	-	-	灰	凹面-布目	凸面-不明	

# 圖 版

図版1  
多可町中区北部平野航空写真



(南から)



(西から)

図版2  
調査区空中写真



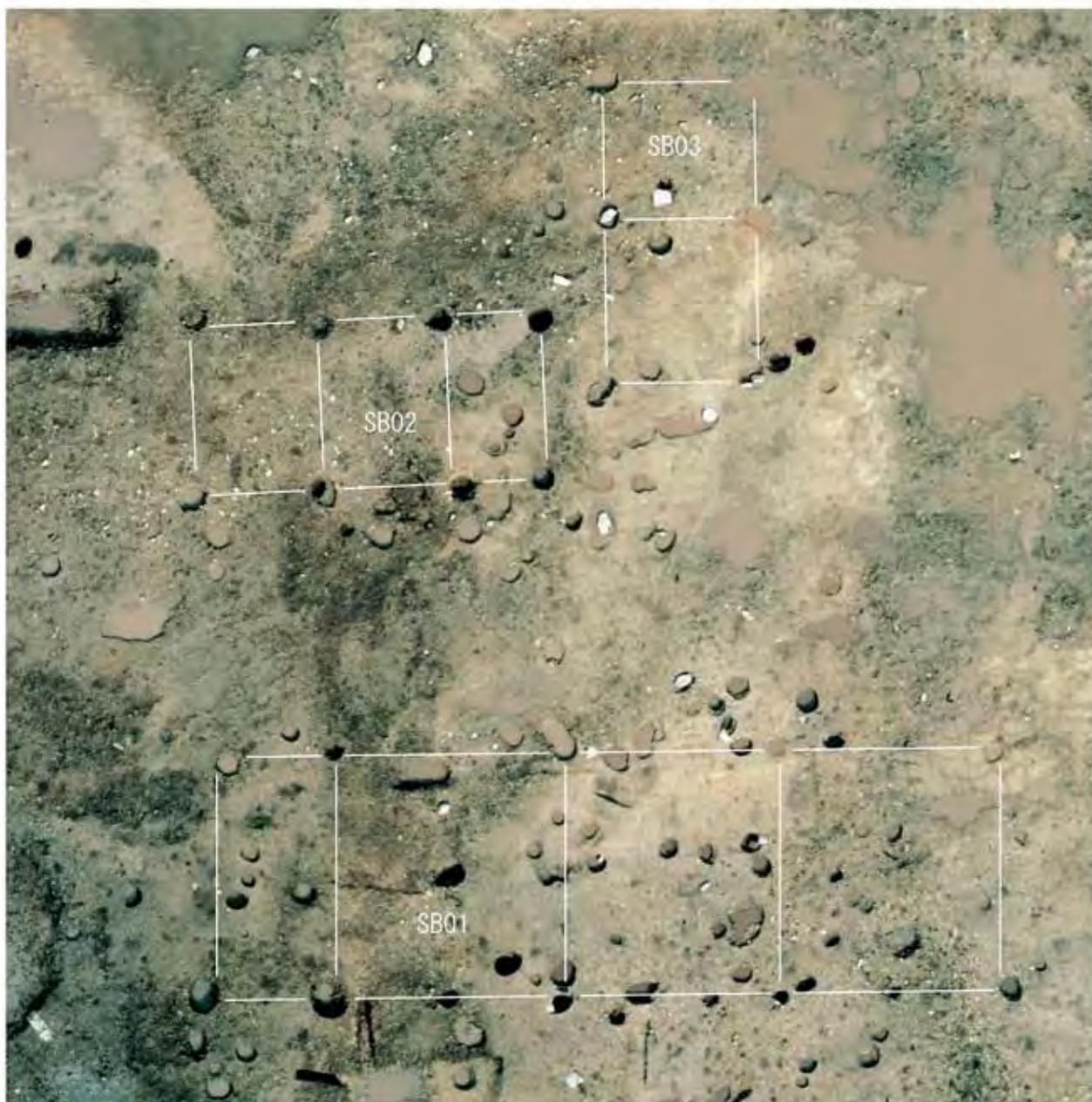


調査前全景



調査区全景（東から）

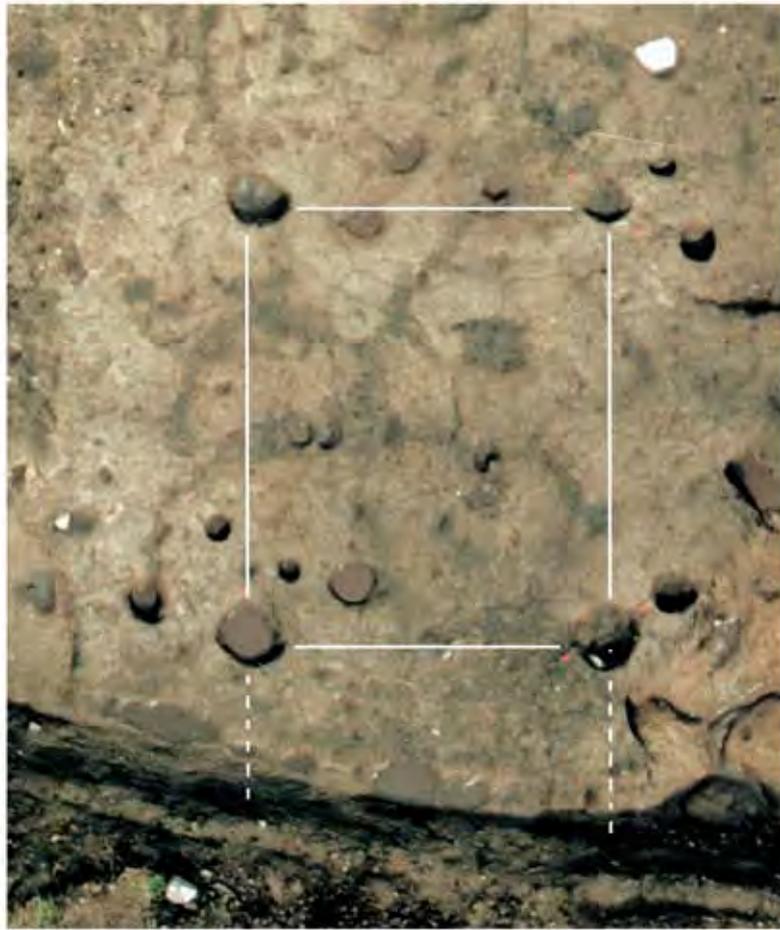
図版 4  
堀立柱建物 01・02・03



P43



P81



P29



P30



P32



P33



P17



P18



P27



P14



(東から)



土層



遺物出土状況①



遺物出土状況②



遺物出土状況③



溝 02 土層



溝 03 土層



溝 04 土層



検出状況



集石検出状況



完掘

図版10  
土坑01土層



土層①



土層②



土層③



カラミ出土状況



検出状況



完掘



土層



遺物出土状況



土坑03完掘



土坑03土層



P10



P16



P61



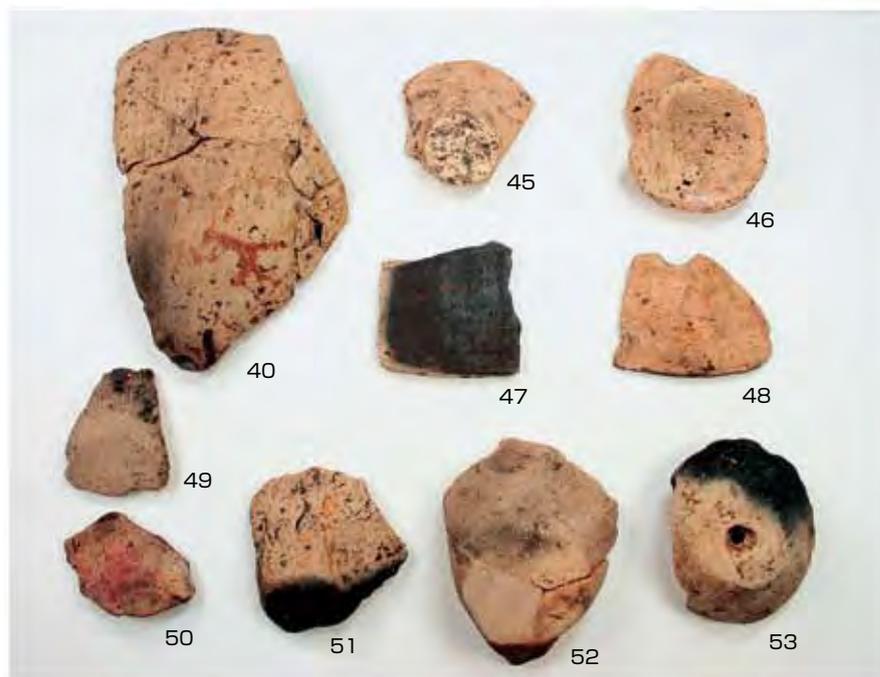
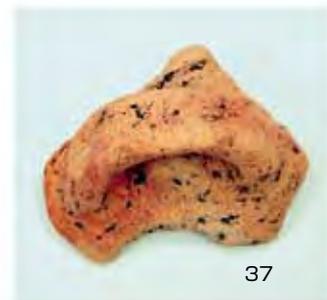
P89

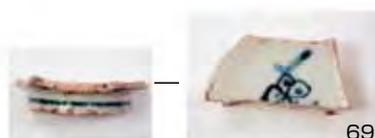


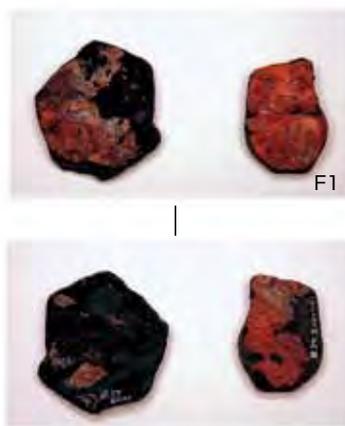
P96



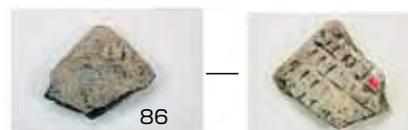
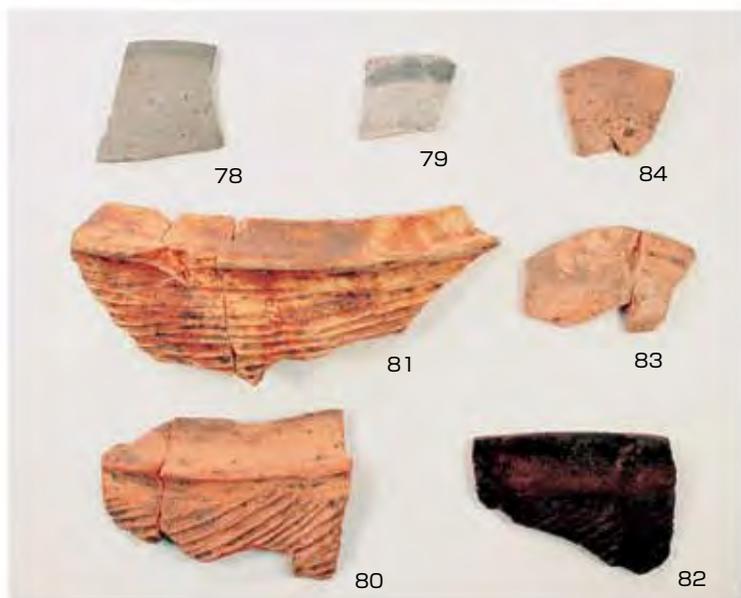
図版14  
出土遺物

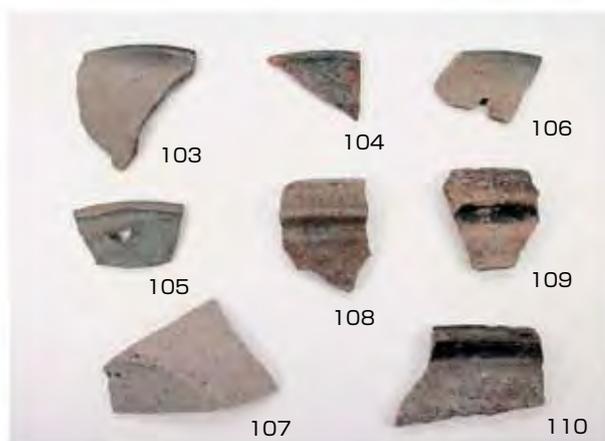














第3区



第5区



(西から)



(東から)

図版22  
第3区溝1  
遺物出土状況(1)





図版24  
第3区溝1  
遺物出土状況(3)



図版25  
第3区溝1  
遺物出土状況(4)



溝1断面





溝1 (南東から)



溝2 (北西から)





第5区B (東から)



第5区C (東から)



(北から)



(南から)



竪穴住居跡1 中央土坑2 断面



竪穴住居跡1 中央土坑1



P14



P23



(東から)



(南から)

図版32  
柱穴内土器等出土状況



P7



P12



P6



P16



P71



P75



図版34  
出土遺物(2)



3-23



3-31



3-22



3-65



3-33



3-64



3-35



3-55



3-58



|



3-59



3-56



5-11



5-6



5-14



5-21



5-46



5-80



3-S3 (S ≐ 1:1)



5-70



3-S4 (S ≐ 1:2)



3-S1

3-S2 (S ≐ 1:3)



5-S1

5-S2 (S ≐ 1:3)

図版36  
出土遺物(4)





# 報 告 書 抄 録

ふりがな	たのくち・みやのしたいせき							
書名	田野口・宮ノ下遺跡							
副書名	中町東線・西線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査							
シリーズ名	多可町文化財報告							
シリーズ番号	7							
編著者名	安平勝利 宮原文隆							
編集機関	多可町教育委員会							
所在地	〒679-1105 兵庫県多可郡多可町中区東山539-3 TEL0795-32-0685							
発行年月日	西暦 2009年（平成21）3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因
たのくち・ みやのしたいせき 宮ノ下遺跡	ひょうごけんたかくん 兵庫県多可郡 たかちょうなかく 多可町中区 たのくちあざみやのした 田野口字宮ノ下	23833	中区番号 449	35度 04分 16秒	134度 55分 12秒	2007.12.19 ～2008.3.2	約1,000m <sup>2</sup>	中町東線 ・西線道 路建設に 係る事前 調 査
あさかじょうの ほりせき 堀遺跡	ひょうごけんたかくん 兵庫県多可郡 たかちょうなかく 多可町中区 あさかあざじょうのほり 安坂字城の堀	23833	中区番号 309	35度 02分 30秒	134度 55分 34秒	1994.1.31 ～1994.3.4 1996.2.13 ～1996.4.22	約1,500m <sup>2</sup>	中町南線 建設に係 る事前 調 査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構			主な遺物	特 記 事 項	
田 野 口 ・ 宮ノ下遺跡	集落跡	弥生時代～ 中世	弥生時代終末期の溝。 中世後半期の掘立柱建物群。			弥生土器、 須恵器、土 師器、鉄器	近世期の土坑 よりカラミが 多量に出土。	
安坂・城の 堀遺跡	集落跡	弥生時代～ 中世	弥生時代後期後半期～古墳時代 前半期の竪穴住居跡、掘立柱建 物、溝、柱穴群。 奈良時代後半期の掘立柱建物跡。 平安時代末の掘立柱建物跡。			弥生土器、 須恵器、土 師器、鉄器		

多可町文化財報告7

たのくち みやのしたいせき  
田野口・宮ノ下遺跡

2009年3月  
発行 多可町教育委員会  
〒679-1134 多可郡多可町中区茂利20番地  
TEL. (0795) 32-2385  
印刷 ウニスガ印刷株式会社

■データ 紙質 表紙 アートポスト 220kg  
見返し 色上質 藤色 特厚口  
本文 ニューエイジ 57.5kg  
カラー図版 アート 93.5kg  
文字 モリサワ 14級  
写真 スキャナー分解  
製本 無線トジ

